

METAL GEAR NEXIS—New generation gear—

saver

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

決して許しはしない、全てを奪い去った何もかもを。
決して諦めはしない、全てに復讐を遂げるその時まで。

※注意

・メタルギアの世界観をベースにISのストーリーを再構築しています。

・ISは原作読了、MGSはTPPまでプレイ済み。

・MGSのキャラは殆ど出ません。

・オリキャラ投入に伴って原作キャラが強化されたり独自設定が付与されたりします。

キャラクター及びISのイラストは叛逆堂様に描いていただいています。

P i x i v : 叛逆堂 <http://www.pixiv.net/member.php?id=1247163>

T w i t t e r : ?? 叛逆堂 @getumentour

目次

設定関連	
人物紹介	1
世界情勢	7
終幕と開演	
Prologue (大空の下で蛇の戦いは終わる)	12
入学編	
第1話『Another future (もう一つの未来)』	15
第2話『The girl falls to "Outer heaven" (少女は天国の外側へ堕ちる)』	37
第3話『Do Cyborg girls dream of vengeance? (サイボーグ少女は復讐の夢を見るか?)』	74
第4話『The boy flew to "Infinite stratos" (少年は無限の空へ飛び立つ)』	92
クラス対抗戦編	
第5話『Enter the Dragon (燃えよドラゴン)』	109
第6話『Enter the Dragon 2』	122
第7話『Mission impossible (スパイ大作戦)』	133
第8話『War machine (殺戮機械) 1』	143
第9話『War machine 2』	161

設定関連

人物紹介

日野 棗

年齢：16歳

身長165cm

誕生日：2009年12月5日

所属：日本／イカルガ・アームズテック社

専用IS：メタルギア・ネクシス「ヴァイパー」

好きなもの：格闘技、ホラー以外のゲーム全般
嫌いなもの：家族と四肢を奪った奴ら

世界的な軍需企業であるイカルガ^I・アームズテック社^T専属テストパイロットであると同時に日本国家代表候補生。

貧乳であるのに尻が大きい、所謂アスリート体型である事を気にしており、本人の目の前で胸と尻の話は禁句である。

普段は昼行灯然としたニコニコ笑顔で柔らかな物腰を崩さないが、感情が高ぶると言葉の取捨選択が荒く、冷淡な本性が露わとなる。

世界唯一の男性ISパイロットである織斑一夏と専用ISである「白式」や他の国家代表候補生が有する専用ISの情報を入手する為にIS学園へと入学した産業スパイの一面も持つ。

過去に遭った事件により体の殆どをサイボーグ化しており、専用ISであるIAT社製第三世代IS「ヴァイパー」もサイボーグによる運用を前提としたもの。

ISを駆る目的をブリュンヒルデとしているが、真の目的は己の家族と手足を奪った組織、亡国機業への復讐である。

しかし亡国機業の特性や、詳細も名前しか分かっておらず、尻尾す

らつかめていないので復讐は難航している。

嘗てはジュニアクラスの総合格闘大会で優勝を飾る等、将来が有望視されていた少女格闘家であった。

しかし、12歳の誕生日に家族と旅行に行く為搭乗していた旅客機が事故により墜落し、家族と手足を失い、選手生命をも絶たれる。

全身に重度の火傷を負っている上に内臓にもダメージがあり、救出こそされたが生存は絶望的であった。

しかし、両親の勤め先であったIAT社のサイボーグ技術部門により、当時最新鋭のサイボーグ技術を以ってして生き長らえ、リハビリを開始する。

その最中、他のスタッフから主任と呼ばれる男、伊野部進から亡国企業に関する情報を僅かながらに入手する。

事故だとされていたものはISによるテロであり、その主犯は亡国機業と呼ばれる秘密組織であり、それは世界中に根を張っている。

それを知った棗は2年かかるとされていたリハビリを1年半で終わらせ、ISの訓練に励んだ。

元来、棗のIS適性はD以下であり、歩くのが限界とされていたが、それを標準値であるBランクにまで押し上げた拳句、専用機であればAランクに上り詰める事を可能にしたのがNCMS手術である。

○専用IS メタルギア・ネクシス「ヴァイパー」

嘗てのメタルギアが“人と兵器を繋ぐ歯車”であったように、“人とISを繋ぐ歯車”を作り、世に送り出すことを目的とした

New generation gear 計画の2号機。

ネクシスの綴りは『NEXIS』で、NextとISを組み合わせ合わせた造語。

パイロットの特技に合わせて格闘技による極近接格闘戦に特化した特性を持ち、武装も格闘戦のサポート兵装が殆どを占める為に武装

単体での火力は一部を除いて皆無である。

しかし、その代わり武装を極限まで限定し、その上で一部の射撃兵装以外は機体そのものに搭載する事で本来は数秒を要する武装切替をほぼノータイムで行うことが可能である。

それと同時に、本来は武装の格納に利用する拡張領域にジェネレーターやバッテリー、予備の部品等を搭載する事で継戦能力を高めている。

機体サイズは格闘戦を旨としている為、アンチロックユニットや装甲が邪魔にならないよう最低限に抑えられている為、一般的なISと比べて小柄。

デザインはメタルギアRAYの意匠が取り入れられており、第三世代機にしては珍しい全身装甲型である事も合わさって他のISとはだいぶ毛色が異なる印象を受ける。

・腕部固定式電磁誘導剣『雷切』
肘に固定されたブレードを電磁誘導を以って音速で射出し、軸を起点として180度回転させ、居合の要領で対象を切断する。

その特性から、使用に際して非常に高度な技術を要するが、棗の超人的な格闘技術とともに繰り出される斬撃はタングステン合金ですらもバターののように切り裂く。

・電磁誘導投射銃『梓』
特筆すべきものはない一般的なIS用拳銃サイズのレールガン。雷切と切り替える形で装着され、エネルギー供給を受ける

『ヴァイパー』はこれを二丁有し、さながらガンIIカタの様な動きが可能であるが、棗の射撃適正が致命的である為にあまり使用されない。

・ハイパーセンサー妨害弾筒『日輪』
対象に着弾させるか、空中で炸裂させる事で相手のハイパーセンサーヘジャミングを仕掛ける特殊兵装。

一発辺りの単価が新車で軽自動車を買える程に高価だが、直接当たらなくてもある程度近くで炸裂させれば十分な効果が出るので射撃が致命的にヘタクソな棗でも使える事に加えて使えば確実に相手を

攪乱できる為、多用される。

見た目に関しては『続ボクらの太陽』に出てくる黄色いガン・デル・ソル、KONAMI繋がり。

・臀部ワイヤーアームユニット

人間でいうところの尾骶骨の辺りに格納されているもので、最大で5mまで伸びる。

先端が鉤爪のようになっており、刺突も可能。

月光が有するワイヤーアームと殆ど同様のものだが、ISへ搭載するにあたって強度や素材等が見直された結果、150kg程度までなら持ち上げる事が可能

・『葵』

ごく一般的なIS用の刀。

一応バスのロットに格納されているが、殆ど使われない。

・『レイン・オブ・サタデー』

デュノア社製のごく一般的なIS用のショットガン。

キチンと狙いをつけなくても良いので葵よりは使うが、葵よりは使うというだけで殆ど使われない。

○イカルガ・ホールディングス／イカルガ・アームズテック

江戸時代より続く重工業系企業の老舗で、本社施設は出雲に置かれている。

キャッチコピーは”ふとした怪我の絆創膏から国家を守るミサイルまで”。

自動車・航空機部品を担うイカルガ・インダストリアル社を中心に幅広く事業展開を行なっている。

テキサスに本部施設を置くイカルガ・アームズテック社はその一つで、前身はSOP失陥後に経営難に陥ったアームズテックセキリユテイ社。

○New generation gear 計画

IA T社が他の軍事系企業と比べて出遅れたIS関連市場への進

出と、需要拡大を狙って打ち出したIS開発計画で、通称NG2計画。後述する新機軸の操作システムであるNCMSを基点として開発が行われ、棗を含めて4人いるテストパイロットは全てNCMS手術を受けている。

○Neuron Connect Motion|trace System

人とISを繋ぐ歯車として開発された新機軸のIS操作システムで、サイボーグ技術から派生した特殊な手術を施す事により通常の操作と比較して精度や速度が大幅に向上する。

しかしISと神経を繋ぐ関係上、パイロットへ過度の情報出力が発生し、パイロットの脳負荷が許容範囲を超えてしまう可能性が存在する。

○織斑一夏

我らが朴念神にしてハーレム野郎。

箒とセシリアに加えて棗による教導の甲斐あつて原作よりも頭が良いし腕も良いが、恋愛ごとに対する鈍さは据え置き。

○織斑千冬

一夏の姉にして世界最強の女。

とある事情からエメリツヒ博士やスネークと親交があり、世界の裏側を知る数少ない人物。

○篠ノ之箒

モツピーことファースト幼馴染。

凰鈴音とのキャラ被りを気にしている為、なんとしてでも専用機を入手し彼女を出し抜こうと躍起になっている。

○セシリア・オルコット

列車事故で両親を亡くした際、遺産相続等の面倒事から大佐によつ

て救われる。

大佐の事を「叔父様」と呼ぶ程度には信頼し、家族同然の付き合いをしている。

過去に棗と対戦しており、その経験からか与えられた専用機の「ブルー・ティアーズ」を紅茶をキメたスタッフと共に魔改造している。

○凰鈴音

酔豚ことセカンド幼馴染。

箒とのキャラ被りを気にしているが専用機持ちというアドバンテージは揺らがぬと満人氣味。

○篠ノ之束

世界を股にかける天災科学者。
現在行方不明。

世界情勢

○現在の世界

ガンズ・オブ・ザ・パトリオット事件の終結は愛国者達と戦争経済の終焉を引き起こしたと同時に大きな混乱をもたらした。

特に軍事、経済界の混乱は凄まじく、各国間の関係が悪化し第二次冷戦の到来とすら言われる程であったが、それもある事件により終息を迎える。

人類史上最大の攻撃能力を持ち、最大の戦争抑止力である核兵器、その発射可能なものが日本に向け発射され、それら全てを正体不明の人型兵器が撃墜し、不明機の確認と拿捕を目的に出動した戦闘機、巡洋艦、空母の悉くを一人の人命も奪う事なく戦闘不能にし、事態に合わせて移動していた衛星軌道上の偵察衛星ですら破壊した、後に白騎士事件と呼ばれる事件の勃発と、”インフィニット・ストラトス”と呼ばれる人型機動兵器の出現である。

そこからは早く、アラスカ条約の制定やISの分配、関連技術の解放によるブレイクスルーは世界を飛躍的に発展させた。

しかし、その弊害として女性にしか動かすことのできない特徴を有するISは女尊男卑の風潮を呼び起こし、加速させていく。

経済格差、地位的格差としてその風潮が広まる中、初の男性ISパイロットである織斑一夏が出現し、停滞していた世界は動き出す事となる。

○インフィニット・ストラトス

古くは髑髏部隊、昨今ではビースト部隊の装備や潜入工作に用いられた強化スーツに代表される強化外骨格の発展型……というには少々語弊があるが、分類的には強化外骨格にあたり、あえて名称をつけるならば「全天候型特殊強化機動外骨格」とでも言うべき代物。

世界の軍事的パワーバランスを一変させた超兵器であり、本来の役割である宇宙進出の架け橋とはならなかった悲運の発明でもある。

○日本

白騎士事件のほぼ全責任を負う形で多額の賠償金とIS学園の設立と運営を委任される等、21世紀のヴェルサイユ条約とも言われる不利一辺倒な協定を一方的に締結されてしまう。

だが、もとより専守防衛を謳う反戦国家であるのと、病的なまでの予算の少なさからSOPシステムの導入が諸外国と比べて大幅に遅延していた事が功を奏し、システム失陥に伴う影響を最小限に留めていた。

更に、日本国籍の企業であるイカルガ・ホールディングスがSOPシステム失陥のどさくさに紛れてアームズテック・セキュリティ社を買収した事に起因するメタルギア先進国でもある。

そうした軍事的躍進の影響と織斑千冬や篠ノ之束の存在からか、漸く安全保障理事会常任理事国入りを果たした。

○自衛隊

白騎士事件において既存兵器と戦略がまるで役に立たなかったのが余程ご立腹であるらしく、対IS防衛戦略を真つ先に研究しだした組織。

当時の政府と幕僚監部は世界各国が研究を始め、普及させつつあったIS中心の戦略には懐疑的であり、2017年に対IS措置としてメタルギア兵器の大量導入を決定した。

その結果、メタルギアREX Mk-IIを19式二足歩行戦車、メタルギアRAY Mk-IIを20式水陸両用二足歩行戦車として導入している。

特科と機甲科が併合した機甲特科と水陸機動団での運用を中心とした一方で、海自は20式の円滑な運用と周辺諸国からの諸島防衛を目的として、国家によって正規運用される物としては初のメタルギア母艦である、ほうしょう型メタルギア搭載護衛艦を建造。

2025年時点で1番艦「やまと」以下、2番艦「むさし」、3番艦「しなの」の三隻が運用中であり、メタルギア運用能力の他にも通常のイージス護衛艦と同様の能力を備える他、VTOLや他の垂直離陸

機、回転翼機も運用出来ることから周辺諸国に対する軍事的アドバンテージを確固たるものとしている。

○アメリカ合衆国

(あつてないようなものであるが)生産性、整備性能に優れた汎用タイプ且つ大火力と堅牢な装甲のISを好む。

元より人種の坩堝と呼ばれ人種・宗教的対立が耐えない国であったが、ISの台頭以後は男性蔑視、軽視の傾向が強まった事もあり様々な面で混乱を招きつつも、以前から有していた多大な影響力とその力を維持してきた大国。

ロシア、中国と並んでIS所有台数は最多であり、イスラエルや日本との共同研究事業もあつてか、その技術力は世界トップクラスを誇る。

メタルギア関連ではATS社の買収もあつて日本に遅れるも、独自体系の技術開発を行なっているが、経済的問題から難航している。

○英国

普及型レーザー兵器のパイオニアであり、俗に”英国面”とも揶揄される独特な性能、機体の開発に定評がある。

SOP失陥とそれに伴うEU離脱の混乱を潜り抜け、嘗ての大英帝国の片鱗を取り戻しつつある。

その逸話の中でも、アラスカ条約下でISの軍事利用が厳しく制限される中、工作活動や戦術的判断により”敵国のIS軍事利用”を誘導した事よる受動的IS運用を行なった第二次フォークランド紛争は良くも悪くも世界的な注目を浴びた。

○ドイツ

堅実で象徴性に長けたIS開発に定評があるが、日本の「打鉄」とフランスの「ラファール」に一步遅れる。

SOP失陥後の混乱においては様々な面において中立的立場を取りつつも、嘗ての移民政策を全て反故にし移民排除を行なった現政権

の”純化計画”は人権的な観点から非難が殺到したが、国民からは好意的に受け止められており、ナチスの再来などとも言われている。

○フランス

デュノア社の高い技術力に裏打ちされた汎用性に長ける「ラファールシリーズ」には定評があるが、EU連合が進める第三世代主力機選定計画への脱落に代表される業績不振に見舞われており、「ラファールR」のライセンス料と原子力関連技術でやりくりしている状況。

○ロシア

アメリカとの対立は以前よりも控えめになったものの、対アメリカを念頭に置いた戦略に変わりはなく、親米的な日本との対立もほぼ据え置き。

IS開発に関しては仮想敵国のアメリカに遅れをとっているものの、国家代表候補生であり、現IS学園生徒会長である更識楯無の存在や専用機である「ミステリアス・レイディ」の存在感は大きい。

○中国

SOP失陥以後、共産党の一党独裁である故か一番被害が大きかったのと同時に、日本に次いで立ち直りが早かった国でもある。

ロシアと並んで東側の中核を担うのと同時に、IS開発に関しても溢れ出るほどのマンパワーを存分に使って大きな存在感を示す。

○第三世界

中東、アフリカ、ラテンアメリカ地域は国軍主導のISによる武力介入に積極的で、イスラム過激派勢力の活動や東西陣営による代理戦争が絶えず、国連監視団やNGO、PMSCの活動により一定の落ち着きを見せているが予断を許さない状況。

○ISとメタルギアの関係

大別するならば、戦いに勝つ為のIS、戦争に勝つ為のメタルギア、

これに分別される。

メタルギアはコストさえ支払う事が出来れば大小用途様々な運用が可能であり、立ち位置的には戦車やヘリコプターの延長線上に存在するが、その戦略的価値は戦車やヘリコプターと比類するものではなく、IS登場以後も多くの国家が運用を継続、更新しているのが有用性の証左と言える。

一方で、ISのパフォーマンスはパイロットの状態に著しく依存する上、万が一の事態における代替機やパイロットの確保が非常に難しい等、軍事的に見れば欠陥兵器もいところであるが、それを鑑みても尚余るほどの性能を有する兵器であり、それ故にISへ対抗する為にはISを投入する他にない。

しかしそれでは戦いに勝つことは出来ても戦争に勝つことは出来ない、それは世界的な共通認識である。

それと同時に、ISはアラスカ条約によって軍事利用こそ禁止されているが、機体とそのパイロットは殆どが軍属である事から条約は既に形骸であるとの見方もある。

終幕と開演

Prologue (大空の下で蛇の戦いは終わる)

戦争は変わった

国家や思想の為でなく、利益や民族の為でもない

金で雇われた傭兵と、造られた無人兵器が、果てしない代理戦争を繰り返す

命を消費する戦争は、合理的で痛みのない経済へと変貌した

戦争は変わった

ID登録された兵士、ID登録された武器を持ち、ID登録された兵器を使う

体内のナノマシンがその能力を助長し、管理する

遺伝子の制御、感情の制御、戦場の制御

全ては監視され、統制されている

戦争は変わった

時代は抑止から制御へと移行し、大量破壊兵器による最終戦争は回避された

そして戦場の制御は、歴史の操作をも可能にした

世界は変わった

戦争により世界は回り、人々は戦争により生活し、戦争により生まれ、戦争により死ぬ

世界は変わった

だが、それを許さない者達がいた

彼らは歴史に名を刻まず、誰にも知られず、誰が為でなく戦ったのだと、その者達を知る人は誇らしげに語る

彼らの孤独で、壮大で、熾烈な戦いによって、世界を包んだ果てのない代理戦争と、その元凶は静かに終わったのだと

世界は変わった

新しい時代の訪れ

しかしそれは同時に、新しい戦争の始まりでもあった
規範を、基盤を、何もかもがやり直しになった世界を、新しい戦争
が包み込む

回避された筈の最終戦争、その時はゆっくりと近づいていく
世界は再び東西へ分裂し、果てしない利権戦争の時代が再び幕を開
けようとしていた

だが、そこでまた世界が変わった

1人の天才科学者が生み出した、”無限の空”の名を持つマルチ
フォームスーツ

それは従来の戦争を終結させ、抑止と制御を併せ持つ新しい戦争の
始まりを告げた

世界は変わった

これは平和なのか、彼らが目指した世界なのか、それは分からない
だが、世界はある一定の平穩を得た

これは、蛇と呼ばれた男達が戦い、その果てに形作った世界、その
可能性の物語



長い夢を見ていた気がした

壮大で、孤独で、長い、長い夢

「……朝」

身をよじると、窓からは木漏れ日が差し込んでおり、寝ぼけ眼をジ
リジリと焼いてくる

喧しく鳴り響いていたであろう、ベッドの下に落ちた目覚まし時計
を睨むと、時間は6時45分を示している

いつもなら既に起きている時間だが、昨日の夜更かしが響いたのだ
ろう

まあ問題はない、出勤の時間まで1時間半以上あるのだ

「……おはようございます、父さん、母さん」

もつと眠れと囁く身体の意味を否定し、ベッドからもそそと這い

出る

棚の上に置いてある家族の写真に向かい合い挨拶をした後、軽く身体を伸ばして具合を確かめる

関節がキイキイと音を鳴らしている気がするあたり、そろそろメンテナンスの時期だろうかと思いい端末を確認すると予想的中、4日後には定期メンテナンスを控えているようだ

「メンテナンス早めてもらいますよ、あなたもね」

物言わぬ相棒にそう告げると、クローゼットを開き、着替える

ーーまた、新しい一日が始まる

入学編

第1話『Another future（もう一つの未来）』

2025年4月ーS O P システム崩壊から11年、並びにイン
フィニット・ストラトス公開から10年後

アメリカ合衆国 テキサス州

イカルガ・アームズテック社 I S 技術開発部門 テキサス本部

「おはようございます」

「よおナツメ、今日も元気そうだな」

小銃を携行した警備員に挨拶をした

日に焼けた健康的な小麦色の肌が朝日に照らされている

「いよいよ一週間後か、朝の潤いが無くなっちまうぜ」

「愛しのナオミさんがいるじゃないですか」

「ナオミはそりゃあ世界一だが、それとこれとは話が別さ」

「それなら早く指輪でもあげて喜ばせてあげてくださいね、ナオミさん待ってますよ?」

暫く立ち話を続け、キリのいいところで切り上げる

ゲートを潜った先はそこらの国家施設より警備が厳重なイカルガ・アームズテックの研究開発施設だ

私ですらも”テキサス州の何処か”としか知らされてないこの施設は I S とその関連技術が研究されている場所で、出雲の本社施設に次ぐ I A T 社の要所、第二の心臓である

「おはよう」

<?????
プーー>

だ
ブモウ、と牛の様な鳴き声をあげたのはメタルギア I R V I N G

鳴き声に関しては、発声部位があるわけではなく部品同士の擦れ合
いだったかそんな理由で鳴き声のように聞こえるだけなのだが、おは
ようと返してきた気がする

施設内を50機が随伴兵と共に警備していて、対ISは言わずもがな、昨今流行りのサイボーグ兵士相手ともなれば勝負にならないが、日々アップデートと改良を重ねる彼らは頼もしい存在だ

因みに、先の警備員もサイボーグ兵士である

SOPシステムの崩壊と秘匿されていた技術の解放は、傷つき倒れた兵士に新たな戦場を与えた

退役した兵士が社会に馴染めず孤立する、なんていうのはよく聞く話である

住んでいた世界が違いすぎることによるギャップは相当なものだろう

上官と、仲間と、部下と共に切磋琢磨し、味方と国民を守り、敵を倒し殺し殺され、築き上げた生涯はとても大きく、そして重いものだ
老いた兵士は体をサイボーグ化し、身体の一部を失った兵士は失った部分を取り戻し、ただの人の身では辿り着けない境地と力を得て、再び戦地へ舞い戻る

魂を落としてきてしまったあの場所へ、あの戦場へと還るのだ

途中、自販機で買ったコーヒを飲みながら端末を開き、今日の予定を確認する

午前中は9時からいつも通りにISの戦闘訓練、明後日に行われる
展示会の打ち合わせが13時から、そしてなにより来週に迫った最重要任務――IS学園潜入、もとい編入に向けてのブリーフィングだ

こちらの高校を飛び級で卒業している上、大学レベルの学力はあると自負しているし、ISの技能や知識は他の国家代表候補と比べても遜色ないとは自他共に認める所である

しかも国家代表候補生兼IAT社専属テストパイロットであるからして、本来ならばISの基礎から学ぶIS学園に行く必要はない
しかしながら、これはIAT社上層部の決定事項だ

自社製品の宣伝とIS学園内での諜報活動――要は他国や他企業、なにより初の男性IS操縦者である織斑一夏の調査をしてこい、との事である

ただ、上司の一人が言うには、君に足りないものは一般的なス

クールライフの思い出さ」との事である

まあ、私本来の目的を達成する為の人脈確保と考えれば、実際悪くない話だ

しかもIS学園に属する間もIAT社の社員であるには違いないので普通に給料が出る上、特別勤務手当なるものまで発生するのだから美味しい事この上ない

そんなことよりも、だ

「ベッドにでも連れ込めばいいのかな、これ」

これは、私にマタ・ハリの真似事でもしろというのだろうか

確かに先日渡された資料で確認した彼の顔は一般で言う所のイケメンであるが、中身が伴わなければただの案山子だ

そもそも私の好みはステイサムやシユワルツネツガーのような頼れる男である、ちよつと危ない雰囲気があるとなお良し

その点で言えば織斑一夏は不合格だ、ワイルドさに欠けるといっても、精一杯吠えているが愛嬌たっぷりの子犬のような印象を受ける「君の身体を買うというのなら、だいぶマニアックだな」

「おはようございます主任、朝から失礼な台詞をどうも」

「おはよう棗君、最初に下品な台詞を口にしたのは君だがね？」

それより用事があるって話だけど、どうしたのかな」

「身体とこの子のメンテナンス、早めてもらいたくて」

「ん？まだ数日ほど間があった筈だけど、何処か痛んだりするのかい」「痛むほどではないのですが、調子が悪い気がして」

「ふむ、特に大した用事もないし、問題はないか」

主任の研究室へ入ると、そこへ座れと指で指示する主任に従い、服を脱いでベッドに腰を下ろす

ISスーツを着ているから、なにも真つ裸になるわけではないものの、やはり少々恥ずかしい気もする

私のISスーツは一般的なものの一俗にハイレグレオタードと称されるそれとは違って、ハイネックのスク水みたいなものであるが、それでもだ

しかし、一般的なアレを着込んでいる連中の気が知れない

恥じらいだとかそういうった感情はないのだろうか

「〜♪」

若い頃に流行った歌だと言っていた曲を鼻で奏でながら手慣れた様子でキーボードを叩く男性――主任こと伊野部 進は、IAT社のサイボーグ技術部門を取り仕切る人間で、過去は職業軍人で医務官だったようだ

そして、11年前には“あの戦い”にも参加していたらしい

その後紆余曲折を経て退役、この会社へ再就職したとの事である

脊椎に沿って取り付けられたプラグヘケーブルを差し込み、私が寝そべると小慣れた手つきで義肢のメンテナンスハッチを開ける

私の身体は殆どがサイボーグだ、耐久性と柔軟性、利便性に特化させたサイボーグ義肢は手首が360度回転したり、関節が本来曲がらない方向に曲がったり、指先が変形して小道具になったり、膝や肘が伸びたりする

見た目もサイボーグ感丸出しで、とても女の子に繋げて良いシロモノでは無い気がするが(事実装着した当初は嫌だった)、これが使ってみると中々に便利なものである

ドライバーやカッターみたいな、欲しい時に限って手元にはない道具とか特に

他にもISと物理的に繋がる為のプラグとか色々ある

「うん、やはりヒトの感覚ってのは馬鹿にならないねえ、関節の部品が磨耗してるよ」

「右の?」

「右肩だね」

「やっぱり」

「まあ、目立った部分はここだけだねえ、あとは定期メンテナンスの範囲内だ

NCMSも問題なし、プラグの交換も必要なさそうだね」

「そもそも最近は派手なことしてませんから」

「飛行型メタルギア5機との戦闘を派手じゃないと言い張るかい」

慣熟教育まで終えた正規軍人や、それこそシミュレーターでしか対

戦をした事がないが、”恐るべき子供たち”による操縦や、SOPで管理されたAIで完璧なコンビネーションを取られれば厄介極まりない

しかし、そんなじよそこらのパイロットが駆る有人メタルギアなど、一般戦力なら兎も角としてISからすれば子供騙しにもならない

それこそ、余程特別な状況でなければ

「あの程度で落ちたらISパイロットの名折れです

そもそもアレ、前に戦った量産型RAYとサイボーグ兵士の方がよっぽど強かったですし」

「アフリカの件かい？アレはまあ、プロだからねえ」

「メタルギアは兎も角として、あのサイボーグ兵士とは2度とやりたくないですね

生身でシールドエネルギーを10%も食う斬撃を繰り出す兵士がただのプロで済むものですか、アレは所謂達人ってヤツですよ」

誤解と紆余曲折の果てに戦ったアイツ、あの時は本当に死ぬかと思った

物資と要人護衛の任務があつたとはいえ、本当に人間かと疑いたくなるレベルで強かつた

実戦で片腕持っていかれるのはアレが最後だと願いたい

「なるほど達人ねえ、確かに……っと、はいチエツク終わり

部品交換はこっちでやつとくけど、代わりの腕、つけとく？」

「いえ、結構です」

代わりの腕、と言ってプラプラと揺らしているのはどう見ても古き良きロボットアームだ、先行者みたいなやつ

そんなのをうら若き乙女につけようってんだから何を考えているのか分からない

「そうかい、じゃあ1時間後くらいにまた来てくれーっと、そういや支部長が呼んでたよ？」

「支部長が？」

「そ、支部長が」

「了解です、それでは」

「ほいじゃ、またあとで」

主任の研究室を出て暫く歩き、区画の一番奥に位置する支部長室に辿り着く

支部長は極度のヘビースモーカーで、部屋の外からでもタバコの臭いが滲み出ていた

こういった施設では館内禁煙が普通の筈なのだが、どうなっているのだろうか

「日野 棗、入ります」

「入れ」

「失礼します」

「よく来てくれたな、長い話でもないが、まあ座りなさい

君はコーヒーでよかったね?」

「ありがとうございます」

案の定紫煙を吐き出していた支部長ーージャスティン・バーラッドは吸いかけのタバコを揉み消すと、淹れたばかりのコーヒーを差し出した

「最近どうかね?」

「まずまずといった所ですね

訓練は順調、任務も完遂、お給料いっぱい、私幸せ」

「それは結構」

軽く雑談を交わし、お互い一息ついた所で支部長は主題を切り出した

「しかし朝から済まないな、こちらも少し急だったのだ」

「急、と言いますと?」

「IS学園への入学の件、これを早めることになった」

「はあ」

大方IS学園に関する事だろうとは予想はついていた
なにぶん不確定要素の大きい任務である故、予定が早まるのは仕方のない事だろう

しかし、次に告げられた一言は予想を超えるものだった

「明日からだ」

「は……は……」

「ここに日米両政府からの書類もある、ただちに準備をしてくれたまえ、3時間後にはここを発つてもらおう

F-35を使って空中給油を挟みつつ最速で横田へ向かう、そこからはヘリで移動、日本時間で20時には学園に着く手筈だ

明後日の展覧会には優理君に出席してもらおう」

「えっ、いや、え？」

優理君こと、優理・アンダーソンはIAT社が進めるIS開発計画であるNG2計画―”New Generation Gear Project”における初号機のパイロットだ

新時代の歯車を謳うこの計画に参画するテストパイロットは全て私と同様に四肢の一部を欠損していたり、脳以外で障害を持つ者が集められている

「落ち着きたまえよ、すまないと言っただろう

だが、これも上の決定だ」

「……はあ、しかしまた、なんで急に」

「先日、協力者から情報があつてな

なんでも、任務のメインターゲットである織斑一夏と、英国代表候補生のセシリア・オルコットが入学早々対決するらしい、日程は6日後だ

なんでも、クラス代表を決めるのにモメたようだな、くだらん話だ」

「あー、なるほど」

その決闘騒ぎに一枚噛むなりなんなりしてこい、という話であるらしい

ISのうまい乗り方でも教えて恩でも売ろうかなあ……

「話が早いようで助かる……して、相手の方だが」

「英国の国家代表候補生セシリア・オルコット……”BTシステム”を搭載した純英国産第三世代ISの1号機であるMODIS―BT01「ブルー・ティアーズ」のパイロットですね」

「当時「ブルー・ティアーズ」は完成していなかったが、一度戦ったことがあつたな？」

「ええ、思い出したくもないですが」

当時英国が有していたのは純国産第2世代ISの改良型である「KORT13」シリーズ

騎士甲冑のような見た目が特徴で、名前の通りアーサー王伝説をモチーフとしたISであり、大口徑エネルギーキャノンと実体剣を主武装としていた

その射程は実に150km、威力も最大出力ならば着弾点がMOABの直撃を受けたような有様になってしまいうまじいものである

セシリアはその計画の試験機、謂わば2.5世代とでも言うべき機体を扱っており、細かな射撃は苦手とする機体で無理やりスナイパーライフルを運用していたのもあって楽勝かと思われたが、予想に反して手痛い反撃を受けた苦い記憶がある

「……君の私情は抑えてくれると助かるのだがな

過去はどうあれ、現在英国は光学兵器分野では頭一つ抜けた存在だ、その技術も上手い事やってくれると助かる」

「善処します」

正直、うちの会社はIS開発に出遅れたってレベルでもないのに、藁にもすがる思いなのだろう

上手いことやれって言うのも、要はそうゆうことだ

「しかし、IS操縦経験がそこのガキに劣る男に専用機とはな、まったく羨ましいよ」

「とんだポンコツだったりして」

「バカを言うな、ああは言ったが仮にもメイド・イン・ジャパンだ、「打鉄」の倉持技研製だぞ？」

しかも世界唯一の男性操縦者に与えられる機体だ、ハリボテを贈るわけにもいかんだろう、日本政府の威信に関わる」

「それもそうですね、まあ当然と言えば当然ですか」

その考えは一週間と経たずに否定されるのだが、それは2人の知らぬ所である

「……ふう」

そんなこんなで、お世辞にもフレグランスとは言い難い支部長を出

て溜息をつく

「3時間後とはまた、随分やってくれますね」

懇意にしていた方々とのパーティだとか、新居に向けての買い出しだとか色々予定していたのに全て台無しではないか

買い出しに限って言えば、有給を使って観光がてらニューヨークまで繰り出そうと思っていたのに

予定に関わっていたメンバーには支部長から連絡を入れてくれるとはいえ、やることは山積みだ

部屋にあるものは決して多くはないが、最低限の荷造りだけで時間いっぱいになってしまいうさである

「ああ、行きたかったなあタイムズスクエア……はあ、特急料金でも請求してやろう、うん、そうしよう」

この時期日本はどんな風だったかな、学園では制服だと聞くが私物の服や靴は何を持っていいこうか、あれ？F-35って単座じゃなかったかなー

そんな事を考えながら、廊下を駆けた

◆◆◆◆◆

結果のみ語れば、この時期の日本はまだ冬の肌寒さが残る春先で、私物も多くは持ち込めず後日郵送となった

F-35を降りてからはヘリに乗り換え、IS学園敷地外のヘリポートへ着陸、そこからは専用のモノレールに乗って正門に辿り着くと、諸々の手続きを済ませた後に案内だという教員に従って自室へ入る

持ち込めた最低限の荷物を適当に仕分けると、手渡された案内書類に目を通すこともなくベッドに突っ伏した

「つ、疲れた……」

約4時間あまりとはいえ、お世辞にも乗り心地が良いとはいえないコックピットーとは名ばかりの兵装格納スペースにISを生命維持に問題がないレベルで最低限展開して詰め込まれるのは気分が悪いとかそもそも乗り心地とかそんなレベルで済む話ではない

いくらISの展開に色々と制限があり、急な話で手続きも出来な

かったのであろうとはいえ、迎えに着たVTOL機に乗って空軍基地に着いた途端

「Hey・見てくれよ、お嬢ちゃんの為にファーストクラスシートを用意したぜ！」

と、言われて態々カーペットを敷いた上でF-35のクソ狭い兵装庫部へエスコートされた時はこの軍人達をどうしてくれようかと思っただ

極め付けは汚い文字で”機内サービス”と書かれ、ダクトテープで雑に固定されたビニール袋の中に賞味期限ギリギリの軍用レーション、先週の週刊誌、昨年有名な映画雑誌において”エド・ウツドの再来”と称され、ラジー賞を総ナメした映画のDVDまで入っていたのだからその時の気持ちは推して知るべしである

「最ツツ高ですねド畜生！」

「そうだろう!? そう思うだろう!？」

「この映画どうやって観るんですか? 口に入れば観れるかな? ウィン——ン」

「ワハハハハハハハ!!」

しかし、人をコケにした真似もここまで来ると笑えて来るもので、一周回ってテンションMAXで乗り込んでやったし、”機内サービス”は全部食ったし読んでやった

いや、寧ろ此方の無理なお願いを聞いてもらっているのだから、あの程度の嫌がらせは受けて然るべきだろうとは思う

そもそも軍属の人たちからすれば私は目の敵というか、食い扶持を減らした張本人に他ならないのだから仕方ない……か?

そんな事を考えつつ、荷解きと身の整理をしているとドアがノックされる

ドアを開けると、先の案内人が私のキャリアバッグを持って立っていた

別クチで送るとは聞いていたがこんなに速いものなのかと感心しつつバックを受け取る

やはりあんなでも軍か、仕事はやー

「……なにこれ」

嫌でも目につく大きさの物体

キャリーバッグの側面に括り付けられたビニール袋

嫌な予感は見事的中ど真ん中ストレート、その中身は機内サービスと同様に賞味期限ギリギリのレーション詰め合わせだった

「……国家権力があるのだから、使わなければ勿体無いですね」

やっぱり何があるろうと仕方なくない、絶対にタダじゃ済まさん

中東の反体制ゲリラ最前線コースをお見舞いしてやる

そう決意すると、機内サービスをゴミ箱へ投棄し、携帯電話を手にとった

◆◆◆◆◆

――翌朝

シャワーを浴び、手足のチェックを済ませ、アイロンをかけてパリットした学園の制服に袖を通し、新聞に目を通しながら野菜を挟んだベーグルとコーヒーで軽めの朝食を済ます

場所が日本で、目を通してるのが日本語の新聞で、テレビに映るのはバラエティ色の強い日本のニュース番組で、身を包むのが私服ではなく制服であること以外はいつも通りの朝、時間は7時

8時には私のクラスへ案内してくれる教師が来るはずだから、だいぶ余裕のある時間帯だ

しかし、この学園は宗教上の理由とか人種への配慮がどうたらこうたらなんとかで、公序良俗の範囲内で制服の改造が認められているが、色々と弄りすぎて逆に格好悪くなっていないかと心配になる

まあそんなことを考えていても仕方がない、デザインしてくれた友人と悪くないと感じた己のセンスを信じるでしょう

そんなことを考えていると、部屋のドアがノックされた

「は、入ってもよろしいですか?」

「どうぞ」

聞こえてきたのは幼さの残る可愛らしい声

隣室の住人でも挨拶しにきたのかと思いい、少しばかり身構えるが、それは杞憂に終わった

「はじめまして、山田麻耶と言います

この学園の教師です」

「これはどうも、本日より転入します、日野棗です
して、ご用件はなんでしょうか」

「はい、本当なら8時からの予定でしたが、学園内の案内も済ませてしまった方が楽かと思ひまして……あの、ご迷惑でしたか?」

アワアワとこちらを気遣う、癒しという概念が服を着て歩いているような女性——山田麻耶と名乗った彼女はIS学園の教師だと名乗った

その名前には聞き覚えがある、確か専用カスタムを施した「ラファールR」を駆る優秀なISパイロットであった筈

堅実にして王道、良く言えば完成された、悪く言えば教科書通りのパイロットだと聞いている

しかし教科書通りということは、その分野における理想形を我が物にしているという事に他ならないし、様々な理想形を組み合わせ、応用し、相手にとつて最悪のパターンを作り上げて戦ってくるという事でもある

以前、彼女と交戦したISパイロットはこう語っていた

——マヤがパイロットである内はいい

しかしマヤが指揮官か教官であったなら、それはたまたまなく恐ろしい——

教科書通りに動く1機のISに対処する事は容易でも、それが2つ、3つ、4つと増えればどうなるか……正直ゾツとする

事実として、彼女の適性はパイロットよりも指揮官向きであるとした報告もあるくらいだ

ただまあ、今見て感じた彼女に対する人物像が正しいのであれば

「あ、あのーなんか私失礼なことしちゃいましたか!?アメリカ的になにか問題があったりとかしませんでしたか!」

この人はどんなに間違つても指揮官向きじゃない、どちらかと言えば後者の教官——いや、先生向きだ

それも軍隊の士官学校ではない、ISを乗り回しているよりも子供

達と笑いあっている方が余程似合っているのではなからうか

そういった意味では、このIS学園の教師はお似合いであろう

「……いえ、なにも問題はないですよ」

本当に、お気遣い感謝します」

この人、腕はいいんだからもう少し自分に自信を持つべきじゃないかなあ……

私は学生で、あなたは教師でしように

流石にビビりすぎだろう

「学園の案内、よろしくお願ひしますね」

「……！は、はい！」

「では、少し待って頂けますか？サツと片付けちゃいますので」

一気に雰囲気明るくなつたのが目に見えるようだ

小動物を相手にしている気分である

手早く部屋の片付けを済ませ、教科書とノートに筆記具、己の専用機を手にも部屋を出た

◆◆◆◆◆

「ーさて、これで学園内の主要施設は終わりですね

これまで紹介した場所以外にも色々とありますが、それはその都度教わった方が良いでしょう」

「ひ、広いですね……」

「疲れちゃいましたか？」

「いえ、少し驚いただけです」

居室練、教室練、体育館とトレーニングルーム、食堂、購買、図書館、IS用アリーナ、IS用整備施設

小綺麗でSFチックな内装は清潔感に溢れていたし、随分な金をかけたのは想像に難くない

「(しかし、驚くべきは……)」

それは、世界最高峰と言っても過言ではないセキュリティだろう

指紋、虹彩、IDカードとパスワードからなる四重認証、所によつてはそこに声紋まであるのだから恐ろしい

数メートル感覚で設置された監視カメラは学園内を余す所なく見

張っているし、武装した警備員の数も尋常ではない

拳銃と短機関銃は当たり前、空中はステルス迷彩を施したドローンに加えて対空レーダーが睨みを利かせている

海中にもなんらかの警備があるはずー確か、REYの発展型であるGRACEの整備部品や消耗品がIS学園向けに発送されているのを見たことがあるから、おそらくはGRACE、最低でもREYがいるのだろう

まあ、世界各国の要人とISを預かるのだから当然といえば当然である

因みに、これらを山田女史が見せてくれたわけではない、こちらが勝手に調べただけだ

こうゆう時にサイボーグの身体は便利なもので、義眼である私の目は望遠機能が搭載されているし、視界に写ったものがある程度解析できる機能がある、諜報活動にはもってこいだろう

スパイ映画の主人公にでもなった気分だ

「では時間もちようどいいですし、教室に行きましょうか」

「はい、よろしく願います」

「緊張してます?」

「まさか、アフリカー」

「アフリカ?」

「……いえ、IS適性試験の方が緊張しましたよ」

「適性試験ですか、懐かしいですね」

危ない、アフリカで非合法な要人救出任務をやった時の方が緊張したなんて言いそうになってしまった

国家代表候補とはいえ、流石に非合法作戦に参加してたなんて口が裂けても言えない

「さて、ここがあなたのクラスです

少し待っててくださいね」

そう言って山田女史は教室に入っていく、ややあつてから”入れ”と手招きした

教室へ入ると年頃の女の子がいっぱい、更に男子が一名

いったい私がどんな人物なのかとコソコソ話をしている者もいる
申し訳ないが私が普通の女の子である、手足がサイボーグなこと以外は

「はじめまして、日野 棗といいます」

「訳あって入学が遅れましたが、よろしくお願いしますね」
簡単に自己紹介を済ませると、拍手で迎えられます

さて、この中の何人が敵なのか味方なのか、疲れるなあ

◆◆◆◆◆

「突然だが、転入生だ」

その一言により、ホームルームが始まったばかりの教室は僅かながらの喧騒に包まれる

どんな娘なのか、織村一夏のようにまた男なのか

綺麗系か可愛い系か、専用機はあるのか否か、話題は尽きない

「静かに」

しかし、教員である織斑千冬が放った一声と机を叩いた音により、一瞬にして教室は静寂を取り戻した

彼女を怒らせると面倒だと、ここ数日で学んだからだ

「なんでも日程調整に手間取ったようだな、故にこのタイミングでの転入ーというよりも入学となったそうだが、仲良くしろ」

「するように」や「しましようにね」ではなく「しろ」と命令形なのが彼女の性格をよく表していると言えるだろう

「山田先生」

「はい」

山田先生が扉が顔を出し、手招きをすると一人の少女が入ってきた
「はじめまして、日野 棗といいます」

「(……へえ)」

その時彼女ー日野 棗に対して織斑一夏が抱いた第一印象はそこまで強烈なものではなかった

彼女が不細工だと言った話ではなく、印象に残り難いからだ

「訳あって入学が遅れましたが、よろしくお願いしますね」

長い黒髪に切れ長の目、ニコニコとした表情は作り笑いにも見える

し、素の表情にも見える

それとこう言つては悪いが、スタイルも至極普通だ

唯一気になる点としては白手袋をはめている事だろうか

防寒用としては頼りない上、手袋をはめるような季節でもない

「……でも、それ以外は普通だ」

もとより、篠ノ之箒やセシリア・オルコット、何より実姉である千冬を筆頭に女傑のバーゲンセールな生活を送る上、周囲は女だらけのIS学園に身を置く世界で唯一の男、それが織斑一夏という男であるそんな彼にとつて、極々普通の日本人女性といった風貌の彼女は余りにも印象が薄い

一夏のみならず、良くも悪くも個性的な面々が揃う生徒の多くは、ごく一部を除いて殆ど同様の印象を抱いていた

しかし、次の言葉でその印象は覆ることとなる

「日本の国家代表候補生で、スポンサーはイカルガ・アームズテック社、専用ISは同社製IS、メタルギア・ネクスス「ヴァイパー」好きなものは格闘技とゲーム全般、嫌いなものは退屈と不躰な人です

目標は世界最強、ブリュンヒルデ」

ざわ、と教室の空気が揺れる

セシリア・オルコット、織斑一夏に続いて事実上クラス3人目の専用機持ちであり、国家代表候補生なのもそうだが、なにより学生を驚かせたのはその名前だ

ーメタルギア

歴史にその名を刻む”歩兵と兵器を繋ぐ歯車”

公開された情報によればその祖先は冷戦時代に遡り、幾度となくあらゆる武装勢力や国家が利用したとされている

大小用途様々なバリエーションが存在し、最近では警察も専用仕様機を導入した月光もその1つだし、陸自と海自が最新鋭機を導入したのは記憶に新しい

そんなモノの名を冠するISが登場したのだ、驚くなどという方が無理な話だろう

「――騒ぎたいのは理解してやるが、静かにしろ」

その喧騒も織斑千冬が教壇を叩いた事により終わりを告げる

「さて、山田くんとの挨拶は済んでいるな？」

担任の織斑千冬だ」

「はじめまして、改めまして日野棗です、よろしくお願いします」

「……」

「なにか？」

「いや、今までのやつとは印象が違うな、と」

「私、過去は参考にこそしますが継るほど興味はないので」

「……言うじゃないか、気に入った」

流石の一夏もこれには驚きを隠せなかった

織斑千冬のファンでない者は、特にISに関わる人間ではこの世に何パーセントいるのかも怪しい

その実姉に対してこの対応とは、どれだけ肝が座っているのか

「質問を受け付ける、手短にしろ」

実姉が発したその言葉を皮切りに、日野棗はあれやこれやと質問責めに会うが、その迫力に気圧されずテキパキと答えていくあたりだいぶ大人びているようだ

「では、これでHRを終了する

次の授業はIS概説の続きを行う、0900時の開始次第宿題を回収するから遅れないように

では、解散」

それからややあつて怒涛の質問タイムは終了し、授業前の小休憩に入る

お茶を飲んで一息ついた所で、件の転校生である日野棗が己の机に寄ってきた

「はじめまして、織斑一夏さん」

「ああ、はじめまして

日野……棗さんでよかったですっけ？」

「ええ、一言挨拶をと思ひまして

色々大変みたいですね？クラス代表決定戦だとか」

「そうなんだ、まあ啖呵切ったのはこっちだし、逃げる気なんか毛頭ないけどな

やらなきゃならねえ時があんだよ、男には」

数日前、クラスの代表を決める際にセシリアの発言で端を発したクラス代表決定戦

相手は英国の国家代表候補生、対して自分はドが付く素人

箒にアドバイスや稽古をつけてもらっているが、はてさてどうなるものか

「……ふむ」

「なんだ？」

何か含みのある頷きと共に、日野棗はニツコリと笑みを浮かべた

納得、期待、様々な感情が読み取れるが、なんだと言うのだろうか
「いえ、世界初の男性パイロットと聞いてどんな人物かと思いましたが、想像より男らしい方で安心しました」

「どうゆう意味だよ？」

「ああ、気を悪くしたのなら謝罪します

ですが決して悪口のもりではないんですよ？

今のご時世、男がISパイロットになるという意味をしっかりと分かっているようでしたので」

「当たり前だ、これから俺みたいにISに乗れる男が出てくるかもしれないんだ、悪しき前例になるわけにはいかないだろ？スタートダッシュはしっかりキメないと」

「こういうのは気合が大事だ

ただでさえ技量と経験で負けているのだから、気持ちだけは勝たねばならない

「その意気です、頑張ってくださいね」

「しっかしアレだ、えーと、日野さん？」

「棗で結構です」

「そっか、じゃあ棗……その、ISが随分すごい名前だよな」

「ああ、メタルギア・ネクスス」

「そうそう、ヴァイパーって言ったっけ？」

「自慢の相棒ですよ」

そう言つて胸元から取り出したのはメタルギアを表しているのであろう、歯車の形をしたネックレスだ

「どんなISなんだ？」

「具体的な情報は控えさせていただきますが、まあ少なくとも何処ぞの狙撃バカよりはいい性能だと言っておきましょう」

「狙撃バカ？それってー」

「ーちよつと、よろしくて？」

それって誰のことなんだ、と問おうとした所で横槍が入る

それは長い金髪を揺らして現れた女性は、セシリア・オルコットだ
「あら、お久しぶりですセシリアさん」

「ええ、ご機嫌麗しゆう」

1年ぶりにお会いしたのに気が付いてないのか、私の事を無視してお猿さんにお尻を振っていらつしやるようでしたので、放っておこうと思つたのですが……少々癪な言葉が聞こえましたので

「私に気がついていないとでも？」

大嫌いなブランドの香水がプンプン臭ってきましたから、勿論気付いていましたとも

ああ、私の前で無様に負けを晒したあの時から、下品に膨らんだ胸以外何一つお変わりないようで何よりです」

「あの時はお互い専用機ではありませんでしたし、今はそう上手く行かないと思つてくださいまし

それより貴方こそ、ラグビーボールみたいなお尻以外枯れ枝のような体はそのままですよ？」

それと、胸に関しては下品ではなく魅力に溢れたと仰つただけ
「ではその魅力たつぷりの胸、もぎ取つて差し上げましょうか
ます？」

ISに乗る時邪魔でしょう？視界も下半分が見え難いでしょうに」

「いえ結構ですわ、私は貴女のように野蛮な殴り合いは好みませんの狩りは優雅に軽やかに、射撃戦で行うものですわ」

冷戦ー現状を表すならばその言葉がピッタリであらう

2人ともニコニコ笑顔であるが、彼女らが纏う雰囲気はまさしく一触即発である

「ああ、そうそう、一つアドバイスを差し上げます、整形外科を受診してみてくださいは如何？」

その貧相な体つきもシリコンを詰め込めれば少しはマシになるでしょうに」

「——OK、そのクーパー韌帯パッと引き千切って無様に垂れさせてやりますから今すぐ表に出なさい、ライミー」

「いい度胸です、穴あきチーズにしてロンドンのドブに捨ててさしあげますわ、スランツ^目」

2人は火花が幻視される程、穏やかに罵り合いながらガンをつけあっている

流星にまざいと感じた一夏と他のクラスメイトはなんとか2人を止めようと仲裁に入ろうとするが、それは第三者の武力介入によって先んじられる事になる

「あいたあ！」

「極めて個人的な問題を国際問題に発展させようとするんじゃない、馬鹿者共が」

ゴパンツ、と鈍いとも乾いたとも分からない破裂音と共に炸裂したのは出席簿による一撃である

千冬が手首のスナップを利用した目にも留まらぬ制裁を2人にお見舞いしたのだ

「つづう~~~~ツツツ！」

「授業を始める、さっさと席に着け」

「しゅ、出席簿の角で殴らなくてもいいではないですか先生……」

「暴力反対、ですわ……」

「ほう、今の言葉が理解出来ないとは、お前らの頭には紙屑でも詰まっているのか……？」

確かめるのも一興か」

「席に着きます!!」

「よろこび」

指をゴキリ、と鳴らした所で2人は猛ダツシユで各々の席に着く
「授業を始める前に聞いておくことがある

日野、クラス代表に立候補する気はあるか？」

「ー、クラス代表……ですか」

数拍置いた返事には驚きの感情が伺える

それもそうだろう、入学初日も来てから1時間と経っていない中で
のクラス代表立候補の提案だ、驚くのも無理はない

「そうだ、お前は遅れて入学してきたからな

上から一応聞いておけとの達しだ」

「うーん……」

「急かすようで悪いがな、この場で決めて「では、やりましょう」……
そうか、分かった」

「ん なっ」

ガタンツ、という音と共に奇天烈な声をあげたのはセシリアだ

驚きのあまり椅子を跳ね上げて立ち上がったようである

「ど、どういったおつもりで？」

「どうするも何も、立候補しただけですよオルコツトさん」

「あなたの事です、どうせクラス代表決定戦の事はご存知なのでしょ
う？」

「ええ勿論、公衆の面前であなたをボコボコに出来るのなら良い機
会ーおっと、本音がウツカリ」

「この……」

「お前達、そんなに頭の中身を覗かれないのか……？」

「いえ、そんな事は」

お前ら本当は仲が良いんじゃないのか、と疑いたくなるような光景
だ

ああいったモノを”宿敵と書いて友と読む”も言うべき関係なの
だろう

「それは違います（ますわ）!!!」

「喧し〜」

「あいたあ!!」

やっぱり仲良しじゃないか、てゆうか心を読むな、と思う間も無く
再び千冬の制裁が下されるのにコンマー秒とかからなかった

第2話『The girl falls to』
uter heaven”（少女は天国の外側へ落ちる）』

放課後

各所がメカニカルな意匠を放つのはこのIS学園において珍しい事ではないが、他ならぬ生徒によって魔改造が繰り返される整備課が有するエリアを除けば、この場所が1番メカ好きの心を踊らせる場所だろう

それは広大な敷地の中でも一位二位を争う程の巨大さを有するISアリーナだ

既存兵器の多くを凌駕したIS同士の戦闘に耐えるフィールドバリアとバリアジェネレーター、IS発進用カタパルトとメンテナンスドック、整備課直通の大型エレベーターと、様々な設備が整っている「うおおおおおお！」

「ほら！足元がお留守です！」

「クソア！毎度思ってたけどこれ絶対に初心者メニューじゃないだろ！」

「世の中荒療治の方が効く場合だってあるんです！実戦形式で鍛える他にありません！戦場では度胸と経験を兼ね備えた戦士が生き残るんですよ！」

「そうだぞ一夏！男は度胸だ、腹を括れ！」

そんなアリーナでは現在、三つの打鉄が縦横無尽に駆け回っていた一夏と、箒と、棗だ

一夏が必死に飛ぶ中、背後から葵を振りかざして迫るのは箒、そして縦横無尽にフィールドを駆け回り四方八方から攻撃を仕掛けるのは棗である

「畜生！棗は箒と違うと思ったのに！」

「それはどういう意味だ!？」

「ほら！集中してください！」

「あああああああああああああああああ
!!!!!!」



あその後、恙無く授業を終えて小休止に入り、用を足そうと廊下に出た時、再び棗がやってきた

「一夏さん、少々提案があるのですが」

「なんだ？」

「こう言つては申し訳ないですが、ISの操縦は殆ど初めてでしょう？」

それで、少しばかり稽古を、と」

「ああ、それはー」「それは不要だ」そ、箒に頼んでるんだ」

会話に飛び込んできたのは箒だった

何かあったのか、どこか不機嫌な様子だ

「改めまして、日野棗です」

「ああ、篠ノ之箒だ……一夏の稽古なら私がつけるから間に合ってるぞで」

「そうでしたか、それは失敬……」

「一応、目的を聞こう」

苛々は未だつのるようで、どこか落ち着かない様子だ

腹の具合でも悪いのだろうか

「目的も何も、老婆心とか親切心とか、そういった類のモノですよ」

「本当か？下心が透けて見えるぞ？」

「お、おい、箒……」

「大丈夫ですよ、一夏さん」

流石に言い過ぎではないかと思ひ止めに入るが、それは他ならぬ棗によつて静止された

「……ここで変に誤魔化すのは愚策ですね

まさかこんなボディガードがついているとは、誤算でした」

「ほう、本性を現したか女狐め」

「実は本社からの指示という奴でして、要は恩を売って織斑一夏の懐

に潜り込めつてところですよ」

「本社？」

「ああ、先も申し上げましたが私、国家代表候補という以前に企業の所属でして」

「イカルガナントカって会社か」

名前はどこかで聞いたことがあるがよく覚えていない、なんの会社だったのだろうか

ISを有するからして、軍需企業なのは間違いないが

「ふとした怪我の絆創膏から国民を守るミサイルまで」、イカルガホールディングスです

厳密に言えば、子会社のイカルガ・アームズテックですが」

そう言つて懐から取り出したのは名刺入れだ

そこから二枚取り出し、俺と箒に手渡す

そこには『イカルガ・ホールディングス イカルガ・アームズテック社専属パイロット 日本国家代表候補生 日野 棗』と書かれている

軽く調べてみると、どうやら江戸時代から存在する工業系企業のように、戦前に蓄えた莫大な資産、人脈を通して企業の吸収合併を繰り返していたとのことだ

最近では経営難に陥ったアームズテックセキュリティ社を完全子会社化した事でも話題になっていたようだが

「何を作ってるんだ？」

「アレとかですね」

「……アレって、月光か！」

棗が指差した方向、そこにはグラウンドの外周沿いを警備員と共に歩くメタルギアIRVINGである

正面と側面には「SECURITY」と記され、紺色と黒のボディにパトランプが特徴的な警備用で、頭部に備え付けられている機関銃も非殺傷性のゴム弾だし、側面に取り付けられたグレネードランチャーにもペイント弾や催涙弾が詰まっていると聞く

「ナマモノっぽくて気持ち悪い」と不評だったが、高い柔軟性と耐

久性を両立した脚部は鋼鉄製のカバーを装着することで悪評を解消したものだ

「ウチの主力製品、IRVING Mk-IIのS型です

アレがなければATS社もどうなっていたことやら……っと、話がズレましたね

まあ女狐だろうと泥棒猫だろうと結構なんですけど、親切心というのは本当ですよ

同じ日本人として一夏さんには頑張ってもらいたいですし、流石にいきなり英国の国家代表候補生——しかもセシリア・オルコットとやりあうのは酷だなと思ひまして」

「……そんなに強いのか」

「私も最後に戦ってからだいぶ経っていますので、今がどうだというのは一概に言えませんが、当時から凄かったですよ

当時はお世辞にも射撃安定性能に優れているとは言いがたい機体にも関わらず、ライフルの銃口やミサイルの発射口を狙撃してきましたから」

「なんだそれ……」

「今思うと、名前もちよつと変えるだけでゴルゴ13でしたしねえ

狙撃手は彼女にとつて天職なのかもしれません」

棗曰く、一部では現代のシモ・ヘイへとかスロ・コルツカの再来とか色々言われ放題な程度には射撃——特に狙撃の腕は有名であるらしい

IS以外でもバイアスロンの強化選手リストに載っているそうだな

ISパイロットに必要な知性、決断力、操縦の腕、容姿全てが揃ってミス・パーフェクトと呼び名も高いとかなんとか

「なんだ、自分より弱いみたいだな事言ってたのに、結構高く買ってるんだな」

「そりやそうですよ、驕り、慢心、油断、それらは全て敗北へ繋がる要因です

——実戦では、それが命取りになりますから」

「……そうか」

妙に実感のこもった台詞だ、と感じる

過去に何かあったのだろうか

「まあ、レディは秘密の一つや二つあったほうが魅力的といえますし、詮索はナシと言うことで一つ」

「自分で言うのかそれを……」

「ああ、それと話をもう一度戻しますと

期間は短いので大した事は教えられませんが、少なくとも基本的な立ち回りとかを覚えておけば少しはマシになるかな、と

見た所それなりに鍛えている様ですが、ISと生身ではだいぶ勝手が違いますし

餅は餅屋とも言います、箒さんはISの操縦時間は如何です？」

「お前、分かって言っているな？」

「一応、これでもISの操縦時間ならそこいらの国家代表候補生に負けない自信があるので」

それを最後に箒と棗の間を沈黙が支配する

ややあつて、鋭い眼光を放っていた箒は思案するように眼を閉じ、

その後言葉を紡いだ

「必要以上にベタベタしたら容赦せん」

「仕事上の下心はありますが、それ以上はありませんよ

なので箒さんの思っているような事にはならないかと、そもそも私の好みはワイルド系ですので」

「そ、それ以上とはなんだ！それ以上とは！」

「ふふ、気がつかないでも？」

「ぐ、ぐぬぬ」

「なんの話だ？」

「一夏は気にするな！」

「これは自分で気がついた方がよろしいかと思えます」
「？」

なんの話をしているのか分からないが、女の子には女の子なりの事情があるのだろう

そう結論づけていると、棗が再び口火を切った

「時に、一夏さんと箒さんは剣道をやっていたと聞きましたが」

「ああ、そうだけど、それがどうしたんだ？」

「てゆうか何故知っている」

「とある情報筋によるリサーチ、というやつです」

「……そうか」

棗が己のプライベートについてどこまで知っているのか気になったが、深くは聞かないことにした

これは多分、藪蛇ってやつだ

「まあそれはさておき、一夏さんは相手の面を打つ時、どの位の間合いから振り降ろすとか、考えはしても意識して行動することってありますか？」

「……ないな、そういえば」

「何事にしてもそうですが、物事がある一定のラインまで修めると考えずともそれを行うことができますね？」

ISでもそれと同じことが言えまして、スペックや理論などではなく、己が体の延長線上としてISを知り、振るうのです

勿論、だからと言ってスペックや理論、戦術等を学ばなくても良いというわけではありません、そこまでやって一人前という事です

剣道だって、どんなに強くても防具の着け方や作法を知らなければ一人前とは言えないでしょう？」

「なかなか知ったクチをきくじゃないか」

「私も、武道を嗜むものですので」

「ほう？……いや、確かに」

俺も箒も、それを意外だとは思わなかった

棗の体運びは隙のないものだし、履いているブーツは踵が高くなっ
ていてヒールのようなのであるが、体軸のブレは見受けられない

明らかに何某かの武道、武術を習得している者のそれだった

「既存武道を組み合わせた我流ですがね、そこいらの連中には負けな
い自信があります」

尤も、最近はISの訓練やらなんやらが忙しかったので、公式戦で
の記録は遙か昔のものです」

「へえ、それじゃあヴァイパーも近接格闘型なのか？」

「まあ、そんな所です……社外秘なので、詳しいお披露目はもう少し先になります」

「セシリアと戦う時について事か」

「はい、既に手配は済ませていますーというより、済ませられた感じですがね」

「……手配？」

「我が社は多数の契約を多数の組織と結ぶ事、つまりはIS市場における我が社の地位確立を目的としています、私はその広報活動の一環としてIS学園へ入学しました」

まあ、少々事情が変わって入学が遅れたり、早まったりとてんやわんやでしたが」

「ほう」

「それでまあ、広報活動ですからアピールを行わなければならないのですよ」

「ウチの製品を買いませんか？」って、つまりー今回のクラス代表決定戦は各国軍首脳部を筆頭とした、我々IAT社製ISの購入、或いはレンタルを検討している組織の重鎮へ生中継されます」

「……はあ!？」

「あ、一応言っておきますけど許可は取っておりますよ？」

元より、学園内で行われるISに関連したイベントは大なり小なりそういった用意がされる筈ですし、青田買ってヤツですね」

IS学園は日本にあり、日本政府によって管理運営されているが、実際には国連——引いては国連安全保障理事会の管理下にある

世界の財産であるIS、それに触れる事が許されたパイロットや整備師、研究者の卵達、これらは一国の手によって管理されるべきではない

たった一機で一軍を撃破可能な、一個人の手によって操作される戦術機動兵器、それがISだ

既存の核抑止力に基づく冷たい戦争を終わらせたのがメタルギアであるならば、10年ほど前までは常識だったメタルギアとPMCに

よる代理戦争を終わらせたのがISなのである

高校野球のドラフト会議が如く、無所属の卵達を手中に収めるべく、或いは既に関われたものを奪い取るべく思惑を巡らせる土地、それがIS学園のもう一つの姿だと棗は言う

「な、なんかイメージ崩れるな……」

「テレビとかじゃ有名パイロットとかってアイドル扱いですし、モントグロツソみたいな競技大会しか放送しませんからね

そもそもISは国家機密の塊みたいなもので、おいそれと公開できるモノではないのですが——と、また脱線しちゃいましたね、私の事情やら世界情勢やらはどうでも良いんです

今問題なのは一夏さん、あなたなんですよ

あなた自分で言いましたよね？”悪しき前例にはなれない”、とならば特訓あるのみです、これからの数日間でちよつとくらいマシンな動きができないと、セシリアに指一本触れることすら叶いませんよ」

そして、俺にとって地獄の四日間が幕を開けたのだ

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

——そうして、冒頭に至るわけである

「コヒュー……ゼヒュー……」

「ふむ、まあこんな所でしよう、”1時間耐久IS鬼ごっこ”お疲れ様でした」

棗は鬼ごっこと言うが、アレは決して鬼ごっこなどではない

通常、鬼ごっこは鬼がタッチをすれば交代するものだが、今回ののは交代がない

更に、あちらは銃火器刀剣何でもありなのに、こちらに許された攻撃は迎撃のみで能動的な攻撃は一切許されない

そして何より、1秒以上の停止は禁止、つまり”止まったら負け”なのである

因みに、ルール違反を一つでも犯した場合、要は負けた場合は”ポイント”なるけつたいなシロモノが溜まっていき、最終的にはポイントに応じたお楽しみコースが待っているらしい

こんなものは鬼ごっこではなく、一方的な蹂躪か虐殺に違いないのである

「ふむ、本日の棗ポイントは6ポイントですか、最初は『何もできない三流』だったのが『ちよっとはデキる二流』へランクアップと言ったところですね

代表決定戦まであと3日、それまでに一夏さんを『相手に食い下がることのできる二流』まで持って行きますので覚悟しておいてください

ではいつも通り、あとの事はお任せしますよ、篠ノ之さん」

「ああ、わかった……それと箒で構わん、この前は邪険に扱って悪かったな」

「では私の事も棗と……それと、アレは私にも非がありますので」

そう言つて箒と棗は握手を交わす、いつの間にか意気投合しているようである

棗もなにか武道をやっているようだし、武を嗜むもの同士、なにかと気の合う部分があるのだろう

「……？」

「箒、どうかしたのか？」

「いや、感触が……」

「ああ失礼、最近ではカミングアウトすることもなかったのですっかり忘れていました」

そう言つて、棗は今まで片時も外すことがなかった手袋を外す

露わになったのは——サイボーグの掌だった

「……！」

「ご覧の通り義手です、正確には機械と生物の中間、サイボーグですね。てゆうか今まで箒さん一緒に着替えましたよね？」

「……棗は首から下を全部包んでるISスーツを制服の下に着込んでいたじゃないか」

「あ、そういえばそうでした」

——サイボーグ化

SOP崩壊後、ここ数年で飛躍的に発達した軍事技術発端の先進医

療技術だ

手足その他を欠損したか、老衰や諸々の要因によりリタイアを余儀なくされた兵士への社会復帰政策、或いは部隊復帰策として講じられていたものが一般に開放されたもので、嘗ての手足と同等かそれ以上のパフォーマンスを発揮できる事から需要は大きくなっている

ここ日本でも筋肉の出力や材質等に制限付きで限定認可されたのが記憶に新しい

「両肩から先と、太腿の付け根から先、両眼は完全にサイボーグ化しています

ぶっちゃけ、人の手が加わっていない部分とか脳くらい……あ、視神経の関係で手が入ってます、無いですね手が加わってないところ」
「どうして……いや、不躰だった、ごめん」

「……いいんですよ」

これは過去に事故で失いました、その時両親も一緒に……まあ、こうなった経緯は兎も角、この身体はなにかと便利ですから……ふふ、私脱ぐと凄いですよ？」

凄いつてどういう意味なんだろうか

それってスタイル云々じゃなくてサイボーグの身体がって事じゃないのか

「そ、そうか……」

「あ、引いてますね？ドッキリですね？そういう反応が一番傷つきます……」

「え、あ、いや、すまない！」

「冗談です」

「ええ……」

茶化されてしまったが、棗の知られざる事情は気になった

サイボーグ化手術は高額な手術費用や、手術後も通常の義肢とは比べものにもならない程大掛かりな定期的なメンテナンス、そもそも国によっては認可が降りていない等々諸々の理由で手を出し難いのも確かなのだ

それを棗は人体の殆どをサイボーグ化しているという……ご両親

がお金持ちだったのだろうか、企業所属とか言っていたし

まあ、気不味過ぎて聞くに聞けないのだが

「それでは、私は本社への報告とか色々ありますので、失礼します」

「あ、ああ、また明日」

「……ま、また明日、な」



「さて」

柄にもなくアレコレ語ってしまったが、取り敢えずやらねばならぬ事を片付けてしまおう

自室へ戻り、制服を脱いで下着のみになると、コーヒーを用意して報告書を書くためにパソコンを開く

毎日提出しろと言われているわけではないが、進展があつた場合に送れとのことだ

その点からいえば、ここ数日はある程度の進展があつたと判断できる

内容は織斑一夏、並びにその友人である篠ノ之束博士の妹である箒と良好な関係を結ぶ事が出来た事

セシリア・オルコットは昔と大して変わっていないかつた事
ことI Sの腕前に関して言えば篠ノ之箒がそこいらの一年生と大して変わらない事

織斑一夏に関しては想定通り、気合は十分であるが腕は三流以下である事

何もできない三流を相手に食い下がれる二流へ鍛え直し始めた事

「……こんなところ、か」

すっかり冷えたコーヒーを流し込み、腕時計を確認すると時間は21時を回ったところだ

「……む」

下腹部に感じる違和感——正体は空腹だった

そこで、うっかり夕食へ行くのを忘れていたのを思い出す

——まだコンビニは開いていたはずだ

そう思い立って

服を着て財布を手にしち上がった時、携帯端末にメールが届く

内容を確認してみると、タイトルは「近況報告」とある

添付されていたものは主任を筆頭とするテキサス支部の面々が写ったフォトデータと、申し訳程度の書き込まれた「近況報告」の文面だった

「……」

もはや意識せずとも行えるようになった義眼の情報解析モードを立ち上げ、画像データと文面に隠された暗号を読み取る

この「近況報告」とは、ただの日常的なものではない

主任と私、それと幾人かのみ知る極秘の内容だ

解析の結果は「調査に進展なし」といったものだ

「……ッ」

ああ、また幻肢痛だ

機械と生物の間となった身体が疼く

喪くした両親との記憶が蘇る

まるで、錆びた五寸釘を打ち付けられているかのよう

「……ア、アアッ!!」

それが煩わしく、八つ当たり気味に壁を殴る

ISを展開していない状態では痛みはない、ただ壁にぶつかった感が脳へ信号として送られるのみだ

「……夕飯は、いいか」

興が削がれた、とでも言おうか

もう食べ物をお口に作る気などなくなってしまった

ボタンを留めかけていた制服と下着を脱ぎ捨てると、シャワールームに入る

こういう時一人部屋は便利だ、誰にも気を遣わなくて済む

バルブを捻ると、ザアツと温かいお湯が降り注ぐ

1日の汚れを流すシャワーは、僅かながらに手足と家族の幻肢痛を洗い流してくれる、そんな気がした

「……なんて、無様」

だが鏡に映った己の顔は、とても人前に出れるようなものではない
ムシヤクシヤした気分を少しでも紛らわすために、いつもより多め
のシャンプーで髪を洗い流した

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

翌日、昨日の事で鬱屈としながらも気分をなんとか切り替え、今日
も一日頑張るぞいと気合い入れた直後、SHRで織斑先生はトンデモ
ない事を言い出した

「突然だが、オルコットと日野は午後イチで戦ってもらう、クラス代表
決定戦の一回戦だ」

「えっ」

「なにか問題でも?」

「いえ、殺るなら殺るで心の準備というものが」

「私も同感ですわ……」

「貴様らの事情など知るか、こちらにも都合というものがある」

曰く、アリーナの予約状況やらなんやら、ジャッジの手配やらなん
やら、色々とあるらしい

「そもそもクラス代表を決定するというのに揉め事を作り出したのは
オルコットの筈だが?」

「うぐ」

「そちらの都合に付き合わせておいて、こちらの都合は飲めないか、い
い度胸じゃないか……」

「うぐぐ」

「ふふふ、無様ですねオルコットさん

その無様に免じて降参を受け入れても良いですよ?」

「なっ、お猿さん風情がなにをー」

「煽るんじゃない馬鹿者、そしてオルコットも乗っかるな」

「あいたあ!」

二本の電子チョークが弾丸が如く飛翔し、ほぼ同時にとセシリアの
額に着弾した

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

昼休みを終えたアリーナの観戦席には学内誌のネタにする為であ

ろう報道部の部員や、なにかと噂の一夏を見物に来た生徒が何人か見受けられる

そんなアリーナの一角、強固な防護壁に覆われたカタパルトルームそこに佇む一機のヒトガタと女性

「ハイパーセンサー異常無し、NCMS異常無し、シンクロ率99.78%、感度良好、正常値」

薄暗い室内に佇むヒトガタは艶消しの黒い装甲で覆われており、まるで闇夜に溶け込む暗殺者のようである

アンロックユニットが背部のブースターユニットらしきもの以外存在しない上、大きさは一般的なものよりも少し小さい

だが、赤く発光する鋭いツインアイや、ハイパーセンサーであろうヘッドユニット側面からせり出したブレードアンテナにより、威圧感は十二分であった

「アーティフィカルマッスル可動に問題なし、スラスター1番から10番よし」

ISスーツが覆い隠しているお陰で今は見えないが、着替えを始めた時には彼女の体を見て驚かされた

なにせ腕と足がサイボーグな上、背中にも背骨に沿うようにして機械が取り付けられていたーいや、アレは埋め込まれているのだろう書面では確認していたが実際に見ると凄まじいものであった

ヒトガタの側に佇む女性——織斑千冬がヒトガター「IS」ヴァイパー”を見た感想はそんなところだ

「ウエポンユニット、雷切、梓、日輪、葵、問題なし」

ヴァイパーに身を包むのは日野棗

ほんの一週間前に編入してきた学生だ

ルーティーンであろうか、本来ならば勝手に行われるシステムチェックを手動で行なっている

これも彼女が抱える事情によるものなのだろうと、千冬は結論づけた

「全システム、グリーン……よし」

「日野」

「なんででしょうか？」

「お前は、何故 I S に乗る」

「何故、ですか……」

I S に乗る理由

一昔前ならばいざ知らず、今の世の中で大きな意味を持たない言葉だ

それは政治であり、金であり、様々な利権でもある

夢と答えるものもいるだろう、これが義務だと答えるものもいるだろう

だが、乗り続ければ乗り続ける程に汚い鎖が己を雁字搦めにし、汚泥に浸かっていくものだ

しかしそんな中でも、稀に真っ白な洗濯物のような、綺麗な意思を持ち続けるものもいる

今年の学生にはそういった確固たる意思、気骨を感じるものが多い
「変な事を聞きますね、何か問題でも？」

「お前の経歴、調べさせてもらった」

「……プライバシーの侵害ですよ」

「公的機関に、よりにもよってこの I S 学園に偽装した書類を送りつける奴が悪い」

I S 学園のバックには I C P O を筆頭とした警察機関、C I A、モサド、M I 6 等の諜報機関がいるんだ、知らないわけではあるまい？」
では果たして、この少女はどうなのだろう

南ア、南米、中東等の紛争地域を中心に 20 回以上戦場を乗り越え、命のやり取りをし、運に味方されずともその場を切り抜けられるであろう実力もある

事実、I S 学園内で全力を出した彼女の相手が務まるのはごく一部だろう

それこそ、日野が殺人を戸惑わないのであれば私が出ねばならない程に

「……それもそうですね、して、何か問題でも？」

企業や国家間の諜報活動など珍しいことではないでしょうに」

「それだけではないだろう」

「IS学園において”原則”禁止されている行動を、なんの苦もなく言ってみせる胆力もある

「それ以外でしたら自己紹介でも言った筈です、世界さいきよー」あくまでも通過点、違うか?」……」

棗は紡ごうとした社交辞令を辞め、一度目を閉じ、此方を睨みつけ、言った

「――復讐ですよ、両親と私の手足をもぎ取っていった奴と、その親元を根絶やしにする為です」

「……月並みだが、復讐など負の連鎖しか生まん」

返ってきたのは予想通りの言葉

過去に両親が事故死したのは知っている

その事故は本当に事故だったのか疑わしく、搭乗していた旅客機には反IS団体に加えISの代替技術を研究する技術者が乗っていたことも

それをIAT社から知らされ、その事実が彼女を駆り立てているであろう事も、予想はしていた

「だが、そんな復讐を――両親が望んでいると思うか?」

失ってしまったものは取り返せない、だがお前には――」

「ああ、そうですねーで、それが何か問題でも?」

聞き飽きましたよその台詞、どうせ”明るい未来を”とか”安全な道を”とか言うんでしよう?」

「……ッ」

「それに対する答えはただ一つです

死んだ両親がどう思うだとか、知った事じゃありません、死人に口なしです

そう、どうだっついていいんですよ、どうでも良いことです」

そこにあつたものは、闇だ

知り合ってから長いわけではないが、普段のあつけらかんとした表情、昼行灯は何処へやら、底無しの闇がそこにあつた

瞳には何も写さず、ひたすらに渦巻くのは憎悪の感情ただ一つ

そんな、年頃の少女がどうやっても宿してはいけなであろう暗闇の瞳で己を見つめたまま棗は言葉を紡ぐ

「あなたからすれば私を思いやつての言葉かもしれませんが、余計なお世話にも程があります

両親がどう思うかですって？

なにを勝手に他人の心を代弁してやがりますか、思い上がるのも大概にした方が宜しいかと思えます

復讐は成し遂げればスッキリします、每晚憎悪で腹わたが煮え燥り返る事もなく、嘗ての手足に走る幻肢痛悩まされることもなく、穏やかに眠り、爽やかに朝を迎える事ができるのです、その日の朝食はさぞかし美味しい事でしょう

負の連鎖しか生まないですって？相手に勝る暴力を以ってして、連鎖の芽が潰えて無くなるまで徹底的に根絶やしにすれば良いのです」

その時、棗の姿——ヴァイパーの背後に蛇を幻視した

ゆらゆらと揺らぐ、陽炎のような歪みの中で、こちらを睨みつける蛇の顔を

「今の人生もそれなりに楽しいですが、消えて欲しい人が消えてくれればもっと楽しくなるんですよ

心の片隅に渦巻くこの感情を消し去れば、新しい世界が見えるんですよ……！」

私の大事なものを踏み躪っていった愚か者をこの世から抹消し、私は未だ見えぬいつかの明日を迎えたい、これ以上に理由が必要だつて言うの……!?

それが間違っているつて言うなら、どんな感情で、この喪くした家族の、失くした身体の幻痛を慰めろつて言うのよ……!」

首だけを向けていた棗は、ゆつくりとこちらに向き直り、暖かみなどカケラも感じられない冷たい瞳で睨みつける

「理解出来ないならそれで結構、邪魔さえしてくれなければそれで構わない

でも、私の歩む道を、この復讐を邪魔するのなら——」

——その時は、容赦はしない

言葉にこそしなかった

だが、突風のように全身に叩きつけられる明確な殺意、敵意
負の感情が嵐となって襲いかかる

「……ッ！」

声を上げる機能などついていない筈のISが、キシキシシュー
シューと鳴いている

それがヴァイパーの排熱機構が振動で音を鳴らしているのだと、そ
う気が付いたのは後の話だ

この時、手の震えを御し、後ずさろうと震える足を抑えられたのは
なんとという幸運だったろうか

だがその時の私には、棗が毒牙を剥き、今まさに眼前の獲物へ喰ら
い付かんとする巨大な毒蛇に見えて仕方がなかったのだ

そしてその時、私は思い出した

世界最強と謳われて以来、実弟を拉致されて以来、久しく感じるこ
とのなかった――恐怖を

「……」

「まだなにか、言いたい事が？」

だが、それと同時に棗への印象は猜疑から哀愁へと変化した

「……いや、私からはもう何も言えん」

ああ、なんとということだろう

どうして、世界はこうにも彼女に残酷であるのか

己の全てを奪った仇を討つ鬼となった彼女へ与えられたISの名
は、〃メタルギア〃

それがヴァイパー……〃蛇〃の名を冠するなど、なんとという皮肉だ
ろう

嘗て、世界への復讐の為、反抗の為、支配の為、戦いの連鎖を止め
る為に使われた〃機械の歯車〃

嘗て、己に忠を尽くし、復讐に身を燃やし、運命に立ち向かい、世
界を食らわんとした〃蛇〃

その、蛇の名を受け継ぐお前は、どこへ行くこうというのか

『日野さん、開始時刻です、カタパルトへ』

お互い睨み合ったままの沈黙を打ち破ったのは無機質なアナウンズだった

棗はまた眼を閉じ、ため息を一つついてカタパルトへ向かう

「今のは忘れていただいで結構です、てゆうか忘れてください

あまり、他人に話した事のないものですので……それと、感情的になつて不躰な物言い、失礼しました」

カタパルトへ脚部を固定し、射出姿勢を取る

千冬はまた思い出した

それは白騎士事件の直後、一度だけ会った壮年の男性

束と友人であつたというエメリツヒ博士——嘗て、蛇にオタコンと呼ばれた男

博士は私にこう言った

「これは決して語られることのない物語だ」

「スネークは嫌がるだろうけど、僕達以外に誰も覚えていないなんて……残酷すぎると思う」

「語り部にならなくてもいい、覚えていてくれるだけでもいいんだ

“こんな奴がいたんだ” って、そんな風にね」

そうして語り出したのは、蛇の話

嘗ての師を討ち、世界を救い、世界から消された原初の蛇

様々な思惑の中で誕生し、偽物でありながら本物であつた蛇

原点を超え、兄弟を超え、最強であろうとした蛇

支配からの解放を望み、誰かのコピーではなくただ己を確立しようとした蛇

縛る因果を断ち切つて、命をすり減らして運命と戦つた蛇

そんな、話に聞いただけの蛇を、彼女の背中に幻視した——そんな気がした

「(博士……)」

「メタルギア・ネクシス「ヴァイパー」——」

「(……私に、新たな“蛇”を導くことは、できるだろうか)」

「——出るッッ!!」



アリーナは喧騒に包まれていた

一部の界限ではそこその有名な人であるセシリア・オルコットと完全無名とはいえワンオフの専用機——それもメタルギアの名を冠するISを駆る日野 棗によるクラス代表決定戦

勝利者は世界唯一の男性操縦者である織斑一夏と戦う権利を得る
クラス代表決定戦とはいえ、報道部によって知らしめられた結果、その注目はIS学園中に広がっていた

無論、アリーナ各所に取り付けられたカメラによってアリーナ内部は余すところなく学園中に中継され、観客席に入りきらなかった、或いは見に行けなかった生徒・教員は画面に釘付けである

家庭科部による公認の出店は飲食物で荒稼ぎ、極秘裏に行われているトトカルチョでは千円札が飛び交っていた

『それでは選手入場です！』

青コーナー、世界女子バイアスロン選手権射撃部門U—17準優勝
！世界競技射撃選手権ビッグボアライフル部門優勝！IS公式戦記
録実質無敗

！イギリス国家代表候補生、セシリア・オルコット！』

カタパルトからISが勢いよく飛び出し、空中で綺麗に静止

バレエ選手のようにお辞儀をするのは長大なレーザーライフルを構えた青いIS、セシリア・オルコットのブルーティアーズだ

「キャアアアアアアアア！」

「セシリア様ア——！」

「踏んでー！罵ってエー！」

ファンサービスのなんたるかを心得ているのだろう

ハイパーセンサーが拾ってしまったピンク色の声は聞かなかったことにして、黄色い歓声へセシリアは客席に笑顔を振りまき、手を振る

初日における一夏との一件があるとはいえ、それでも世界に名を轟かせるセシリアのファンは多い

『続きまして赤コーナー！ISパイロットとしての経歴一切不明！謎

のヴェールに包まれたミステリアスレディ、日本国家代表候補生にしてイカルガ・アームズテック社所属テストパイロット、日野棗！』
そのアナウンスと共に、それは勢いよくカタパルトから飛び出すと、クルリと一回転の後、ガチンツと大きな金属音を響かせて着地した

右膝を突き、左足は立て、左腕はなだらかに曲げながら後方へ

「あ、あのポーズは!？」

そして握り締めた右拳を真つ直ぐ地面に突き立て、凜と前方上空のブルーティアーズを赤く輝くツインアイが睨め付け、立ち上がるその姿

「わ！急に叫ぶな！アレがどうしたって言うんだ!？」

「分からないのか箒！あれはー」

一夏にとつて、それは時間が止まっているかの様に錯覚する程カッコよく、控えめに言つて最高だった

そう、その勇姿はまさしくー

「ーあれは、スーパーヒーロー着地！

スーパーヒーロー着地は高い位置から飛び降りるか、飛行を停止して着地する際に片腕を後方に大きく反らせた片膝立ちの姿勢をとる事で成り立つ

主にヒーロー系の作品において主人公が登場する際に多用される技で、膝と腰に多大な負担を掛ける諸刃の剣だ……」

「なぜそんな事をする?」

「カッコいいからだツツ!!」

「そ、そうか……」

フィールドに降り立った棗は着地姿勢から立ち上がり、仁王立ちとなる

そして大きく見得を切つて声を張り上げた

「改めて、名乗らせていただきましょう！

ー1つ、己が拳を疑わず！

ー2つ、その身が成すは明鏡止水！

ー3つ、残すは敵（かたき）が骸！

我が氏は日野、名は棗！

我がISの名はメタルギア・ネクシス「ヴァイパー」!!
流派、日野示現流!!

見よツ！我が拳はアツ!!熱くツツ燃えているツツツ!!」

棗が戦隊モノか香港映画のスターもかくやなポーズをどこかで聞いたことがある台詞と共に吐く

「……………」

フィールドと観客席は一夏とごく一部の生徒、教師を除いて静まり返った

そんな静寂をよそに、棗は全身装甲型である故に頭部のほとんどを覆い尽くしていたフェイスカバーをガシヤガシヤと騒がしく展開させ、素顔を露わにする

棗は己の行動を半濁しつつウンウンと頷き、どこか満足げにポーズを解くと、グツと拳を握りしめ、呟いた

「キマった……………」

「なにがですの!?!」

「いえ、万物の評価は見た目と第一印象が9割と言いますし、ヴァイパーのお披露目は上手くいったな、と」

「絶対に頭のおかしい奴が出てきたとか思われてますわよ」

「え、そうですか?カッコよくないですか?」

この瞬間、当の本人である棗、興奮冷めやらぬ一夏、整備課を筆頭とするごく一部のオタクを除いて会場の思いは一致していた

「(頭のおかしい奴が出てきた……………」

「カッコいいと思っただけどねえ……………」

「貴女、存外面白い性格ですね……………」

『あの、もうよろしいですか?』

「……………」

棗とごく一部の人間たちの趣向をイマイチ理解できず、困惑気味の司会が開始を促すと、雑談もそこそこに、それぞれ開始位置に着く

先のぐだぐだした空気はどこへやら、両者に緊張が走るのが目に見えるようであった

「スウツ……ハア……」

「……」

そして、ゴングは鳴る

『これよりリーークラス代表決定戦を開始します、司会は報道部、審判は世界IS委員会公認ジャッジの資格を有する山田麻耶先生がお送り致します！』

『では改めてご紹介しましょう、青コーナーはイギリス国家代表候補生、セシリア・オルコット、使用IS「ブルーティアーズ」

英国が有する光学兵器技術の粋を結集して建造された次期主力IS開発計画の一号機

公式戦では36勝1敗2引き分け、敗退した一戦もチームの機材トラブルによる不戦敗、実質無敗のエースパイロットです』

『赤コーナーは日本国家代表候補生、日野 棗、使用ISメタルギア・ネクシス「ヴァイパー」！

国家代表候補にも関わらず公式戦記録は無し、しかし“その筋”の情報によりますと非公式戦での戦果はかなりのもの、訓練時間も2000時間を超えるベテラン！更にセシリア選手とは過去に対戦して以来のライバルなんだとか！特徴的な名前の事もあり、期待度も大きいです！良い試合が期待できそうですね！』

『オッズは棗選手が無名な事もあってかセシリア選手が圧勝、ほぼ0：10のようです』

『一応言っておきますが賭け事は禁止！禁止ですよ！』

『では、カウントを開始しましょう！5——4——3——』

カウントが開始されると共に、お互いの雰囲気力が籠るセシリアは愛銃であるスターライトのグリップを握りしめ棗も拳を軽く握り、構えをとった

『2——1——』

客席も一気に静まり返り、緊張が走る

『バトルツツ』

「地に伏しなさいな、私とブルーティアーズの円舞曲で！」

『——スタート!!』

フライング気味に先手を打ったのはセシリアだった

ドドドツ、とレーザー特有の火を焼く音が響く、両手に構えたスターライトMK-IIによる3発制限点射

一方、棗のヴァイパーは得物を有していない

多くの観戦者はあの攻撃を回避し、武器をこれから取り出すものだと思っていた

しかし、棗の取った行動はその予想に反したものであった

「ー生憎、私はフラメンコが好きなので」

「ツ!?!」

セシリアが放った先手に対し、棗が行なった行動は多くの者を驚愕させた

スターライトMK-IIIによる射撃を身を振る事で回避、そのまま振った勢いを使って右足を大きく前に踏み込んだその刹那、展開された背中のバーニアユニットが大きく火を噴きー棗は流星となった

「ーヤアツツ!!」

「なっー!?!」

繰り出したのは拳による突きだ

さながら弾丸が如く飛び跳ねた「ヴァイパー」は腰を大きく捻り、速度が十二分に乘った右拳を突き出す

拳が向かう先は「ブルーティーズ」ーいや、セシリアの頭部だ
装甲に守られていない、シールドバリアがあるとはいえ防御が比較的薄い場所を狙ったピンポイント攻撃

「せやアツツ!!」

「クツ!?!」

近接格闘型と射撃戦特化型、こと試合においてどちらがアドバンテージを制し易いかは火を見るよりも明らかだ

通常、IS間戦闘は射撃戦が主である

棗の「ヴァイパー」や、織斑千冬の「暮桜」のように近接戦闘を主体とするパイロットやISはいないわけではないが、その大凡は並みの使い手であり、千冬のような使い手は稀だ

——だが、棗はその「稀な使い手」であった

「相変わらず野蛮な！」

「潇洒な戦いなど！」

セシリアは左後方へ急加速して事無きを得るが、その距離は未だに
棗の距離である

「ハットアツ!!」

「……ッ、カンフーごっこもここまでですわ！ 見くびっては困ります
！」

だが、攻撃を受け続ける程セシリアは弱くなかったし、そこで焦ら
ず次の一手を繰り出せるだけの胆力があつた

棗が蹴りを繰り出すタイミングで機体を急旋回させ、メインスラス
ターをいっぱい吹かして安全圏まで一気に距離を取る

格闘戦主体の相手に背中を見せるという行為は本来ならば愚行で
あるが、この時ばかりはセシリアへ運が味方をした

振りの大きい上段回し蹴りであつた為に追撃が出来なかつたのだ

「お行きなさい!!」

棗の周囲を取り囲む Blue Tears Innovation Trial B I T は計4機

「出しましたね、虎の子！」

ビットは棗と絶妙な距離を保ちつつ、別々の方向から、別々のタイ
ミングで射撃を行う

それも時に小刻みに、時に大胆な動きを見せるのだから捉え難い

「ええい！ ちよこまかと！」

「どの口が！」

そう、ビット含め制圧射撃に近い物量の狙撃という悪夢のような状
況にも関わらず、棗は直撃を貰っていない

「直撃さえしなけば！」

「掌からシールドを!？」

その殆どを最低限の身のこなしで避け、どうしても避けられないも
のはエネルギーシールドをごく小規模かつ短時間に限定展開するこ
とで、機動戦闘を行いながら隙を最低限に収めつつ直撃を回避してい
た

——尤も、直撃を受けていないという点で言えばセシリアも同様で

あるが

「(なるほど、一夏さんの二の次とはいえ、上が情報を欲しがるとも当然か)」

セシリアの「ブルーティアーズ」はお世辞にも機動戦闘に適した機体ではない

細かな操作と集中力を必要とする精密射撃、それと同様の操作を思考、或いはマニュアル操作で行う遠隔操作兵器、これらは本来相反するものであり、同時運用など狂気の沙汰である

しかしそれを両立させようとしているのが「ブルーティアーズ」であり、このセシリア・オルコットという百年に一人と謳われた天才だった

未だ完成には至らないものの、全兵装を利用したオールレンジ攻撃をその手に掴むのはそう遠くないだろうし、その片鱗はすでに見えている

「(しかしセシリアの奴、ここまで腕を上げているとは)」

彼女が駆る「ブルーティアーズ」は安定性と索敵に特化した構成である

無論、ISとして最低限有すべき性能は持ち合わせているが、各々好みのカスタムとチューンナップを施された「打鉄」や「ラフアー」の方が速いだろう

しかしながら、いかなる状況でも射撃時の安定を確保する為に全身に小口径のサブスタスターが満載されており、それを利用したある程度の機動戦闘は可能なのだ

だが、AIによる照準補正を受けているのは明白とはいえ、ビットに加えて全身のスラスターを制御するだけのマルチタスクを有するのは棗にとつて予想外の出来事であった

「毒蛇風情が、落ちなさい!」

「そう易々とは!」

「ならば、これはいかがです?!」

スターライトMk-IIIの砲身が展開し、銃身が半分ほどに短くなる
消炎制退機すらなくなり、それは宛ら大砲のようである

小さくなつた愛銃を片手で構え、引き金を引くと――

「なァ!？」

「……ふふ、スターライトMk―Ⅲはあくまでもレーザー投射機の根幹部分を指す名……変形させれば銃種の変更も可能でしてよ！」

スナイパーキャノンを主軸とした可変式レーザー投射銃!この状況対応能力こそ、スターライトMk―Ⅲの真骨頂!」

まさしく流星群が如く降り注ぐレーザー散弾

精密操作が不要な近接面制圧射撃への変更、これによってビットのオールレンジ攻撃はより熾烈に、精密に、「ヴァイパー」の装甲を削りに襲いかかる

不意打ち気味にもらつた被弾は全弾直撃こそ避けた為に致命打ではないが、近接格闘戦を主体とする棗にとって決して軽視できるものではなかった

「しかし、散弾では――」

確かに攻撃範囲は拡大し、ビットの攻撃制度は跳ね上がった

しかし、言うならばそれだけだ

元より射撃間隔は短くない、それを埋めてなお余るビットの射撃が厄介だが、十分に回避と防御は可能だ

だが、どうやって己の距離まで接近するか、それが問題だ

引き撃ちに対して追い続けるこの状況は好ましくない

機動力だけで考えるならこちらが上だ

しかし、オールレンジ攻撃と散弾がそれを許さない

「散弾だと馬鹿にできるのなら実践してみせなさい!やれるものならば!」

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

「……す、すごいな」

「射撃戦のプロに対する近接格闘戦のプロ、モンドグロッソでも何回か見た事がある

だが、あの歳であそこまで出来るならば大したものだな

学園の教員でも、あそこまでヤれるのは追い詰められた山田先生くらいのものだろう」

「どういう事だよ?」

「——追い詰められた狐は、ジャツカルよりも凶暴だ」

「……窮鼠猫を噛むってことか?」

なんとなく、言いたいことはわかる

だがその例えはあまりにも詩的というか、千冬姉らしくないと感じた

「まあピンとこないのも当然か、私もこの例えは分かりにくいとは思
う」

やはり、口調から察するに誰かからの受け売りであるらしい

「まあ要は、腹をくくって覚悟を決めた者は藁にもすがる思いで勝利
を画策し、生存を望み、手段を選ばず、何よりも強い——そういう事
だ、覚えておくといい」

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

・シールドエネルギー残量60%・

・注意、危険域に突入・

「……!」

シールドエネルギーは残り6割、普段の作戦ならば最低でも7割は
残している

ISとの戦闘が久しいというのもある、普段は奇襲に近い戦法で
戦っているのもある

相手が己の戦法を知った相手だというのものもある
だが、そんなものは言い訳にはならない

事実として、私はセシリアに苦戦している

ロジカルに考えろ

私が勝利を掴む為に必要なことは?

——セシリアに肉薄することだ

接近するのに必要なことは?

——ビットを落とすことだ

そこから導かれた結論、ビットを落とすのに必要なことは、即ち

「肉を切らせて、骨を断アツツ!!」

「被弾を!」

回避しながら分析した

普段はちよこまかと動き回っているビットだが、射撃の瞬間に僅かながら動きが静止する

そのビットに向かって真正面から突進し、思いつきりブン殴れば――

「殺ツツ――たア!!!」

「クツ……まだ、まだ一機だけですー」

撃破対象のビットに向かうのだから、正面からの射撃は防御できるしかし、それ以外のビットからの攻撃は防ぐことができない

無論、当たらぬように心がけてはいるが、1発か2発は被弾を覚悟しなければならぬ

ヴァイパーは接近戦に特化した機体なのだから、装甲強度はそれなりではある

だが、ビットの射撃は当たっていい攻撃ではない

だが同時に、直撃すれば硬直が免れない散弾よりは、優先度が低い

！
四方八方から飛び交うレーザーを受け止め、身を振って回避し、避けきれず被弾しながらも――二機目！

「二つア!!」

「カミカゼ!?!」

「墜ちる気など!」

シールドエネルギー残量は5割を切った

もはや猶予はないが、せめてあともう1機落としたい
だがセシリアもバカではない

照準補正を切ったのだろう、精密射撃を旨としていたビットの射撃は回避しやすくなったものの、射撃回数を増した故か、射撃時の停止時間も短くなり殴打や蹴りによる攻撃は難しうなる

「では私も隠し球といきましょうー」

尾骶骨付近に存在する格納スペース

そこから射出したものは――

「尻尾!?!」

「伊達や酔狂では！」

格納していたのはワイヤーテールだ

月光が有するマニピュレータと同様のもので、その細さとは裏腹に結構な重量物を持ち上げることができる優れたもの

「そォー……れツツツ!!!」

「クツ……味な真似を！」

先端のマニピュレータでアンロックユニットビットを掴み、慣性と遠心力に任せて振り回す

ワイヤーテールの出現により驚いたのだろう、一瞬の硬直が生じた隙に4機目のビットに叩きつける

1機目と2機目を撃破した感触から強度はそれほどでもないと分かっていた

それならばこれの方が効率が良い

そして、ビットを全て撃墜したこの状況——イケる！

「トドメですー！」

「……ッ！ガトリングモード！」

スターライトの方針が再び変形し、六本の筒が機関部に接続されるセシリアが叫んだ通り、それはガトリングガン——いや、ガトリングガンでも言うべき大きさのソレは、轟音と共に見た目にそぐわぬ弾幕を射出する

しかし、それだけだ

一方からの射撃しかないのであれば、「ヴァイパー」に避けられぬものなどない

スターライトによる弾幕を掻い潜り、一気に接敵する

精密照準でなく、弾幕もう薄くなった今であれば——殺れる！

そんな確信に近い予想と共に突撃をする——しかし

「フツ」

「!？」

セシリアの表情が変わる

此方をなんとか倒さんと苦心する苦い顔が、まるでたちの悪い悪戯が成功した時の子供のような薄ら笑いに変わったのだ

「この時を、待っていましたよ」

「——ッ！」

悪寒が走る、経験から導かれた直感、第六感と言われるもの

この時、私は確信が覆った

「とくと味わないさかい」

・ A I S ミサイル発射を確認、多弾頭ミサイル・

セシリアが放ったもの、それはミサイルだ

4機だと思っていたビットはその実6機であり、ビットのクレイドルか何かだと思っていたものは、クレイドル兼ミサイル発射プラットフォームだったのだ

・ 回避不能、危険、危険、危険・

A I S ミサイルと分類されるソレは、I S が軍事業界に台頭してから開発された対 I S 兵器、その一つである

通常、ハイパーセンサーによる非人的な知覚能力や機動力ではミサイルなど意味を成さない

だが A I S ミサイルは違う、Fire and forget 撃ちっ放し能力を有するだけでなく、I S が発する独特の磁場を感知した上、ハイパーセンサーと同期して相手の速度、機動力をミサイルが計算し、自身の速度を調整しながら対象へ向かっていくのだ

それが、20発

私の速度とミサイルの速度、距離、ミサイルの機動性、どこからアプローチしても回避は叶わない

しかも多弾頭ミサイルを撃ってきているのだから、余計にタチが悪かった

—— 嵌められた

そう思った直後、爆発が私を包み込んだ

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

ミサイルの直撃ですら防ぐフィールドバリアが大きく揺れる

客席では爆発とその衝撃波で悲鳴が巻き起こっていた

「な……い！」

「最後の最後で隠し球か、なかなかヤレル女じゃないか、セシリア・オ

ルコット」

千冬は、見直したぞとでも言いたげに淡々と告げる

「シールドエネルギーは半分、そしてほぼゼロ距離から多弾頭A I Sミサイルの直撃……並みのI Sならタダでは済まん」

300m四方のフィールドは未だに爆発による煙が立ち込めていて状況は見えない

しかし「ブルーティーズ」は未だ健在であり、「ヴァイパー」は吹き飛ばされたのか姿が見えない

「こ、これで終わりなのか……?」

ジャツジである山田先生は「ふええ」とか言いながら慌てつつも、状況確認に奔走している

あれ程の爆発、殆どゼロ距離で直撃した「ヴァイパー」がもしも絶対防御が発動させているとすれば医務班の出番であるからだ

そうこうしている内に煙が晴れてくる

セシリアはスターライトと残りのビットを構えてはいるが、その表情は今までにない程に勝利の核心に満ちている

「フン、言っただろう、並みのI Sではと」

「ヴァイパー」は特別製つてことか?」

「……この世において、『蛇』と『歯車』の名を同時に冠するモノが、そう易々とやられるせんという事だ

目的は兎も角、日野の意志の強さも含めてな

まあ、これでやられるようなら奴もその程度だったということだ

……私の心情も杞憂で済む」

「……あつー」

「……やはり杞憂であつてはくれないか、これから苦労させてくれそうだな、あいつは」

煙が完全に晴れたその先、フィールドバリアの側に佇んでいたのは、黒い装甲をパージした「ヴァイパー」の姿だった



「……冗談でしょう?」

「ネイキッドモード……搭載された時は正気の沙汰ではないと思いましたが、使ってみると案外良いものですね」

ネイキッドモードは『裸』の名が示す通り装甲を全てパージし、速度と機動性に特化させた状態だ

その代わり耐久力はガタ落ち、今までのようにレーザーの直撃を貰ってしまったら即ゲームオーバーだ

「黒いからって生命力までゴキブリ並みにする事はなくってよ?」

「言うに事欠いて人の事を害虫呼ばわりですか、いい度胸ですね」

「それよりあなた、その身体……」

それよりとはなんだ、思ったがセシリアの言葉も仕方がないと合点が行く

以前戦ったあの時は「打鉄」を纏っていたし、今よりも野暮つたいISスーツを着ていたから見えていなかったが、今は私専用建造、チューンナップされた「ヴァイパー」を身に纏っている

そのの装甲を脱いだのだから、本来見えない部分まで丸見えになるのは自明の理だ

どう見てもISスーツやISの装甲ではない『機械の体』

まるで真つ黒な人体模型のような四肢はカーボンナノファイバーを蜘蛛の糸の様に編み、それらで組まれた人工筋肉とチタン合金で構成された金属骨格によるものである

そしてそれらが、義肢が如く棗の体に繋がっているとなれば驚きもするというものだ

セシリアからは見えないが、背中も背骨に沿う様にして金属製のパーツが並び、「ヴァイパー」と物理的に繋がっているのだ

そう、これはまるで肉体とISを直接接続しているかのような――

「まあこの辺りは追々話します――今は、この戦いに集中しましょう」
そこまで考えたところで、棗の言葉によりセシリアの思考は中断される

「……私とした事が、失礼いたしました」

「貸しにしておいてあげます――さて、立ち上がったては見たものの、正直限界なのでこの一撃で終わらせるとしましょうか」

「あら、奇遇ですわね

私も次の一撃で幕を下ろそうかと考えていたところですよ」

言うが早いのか、お互いに必殺・必中の攻撃を繰り出すべく構える

セシリアはA I Sミサイルを再装填し、スターライトをスナイパーモードへと切り替える

ミサイルで進路を制限し、そこを狙い撃つ算段なのだろう

ーなるほど、普通に考えたら「詰み」ですね、これは

「ブルーティアーズ」のシールドエネルギーは6割を残した状態だ
直撃ではなかったがジワジワ削った甲斐があったようである

しかし、6割だ

このタイミングで仕留めきれなければ勝利は無い

こちらはオワタ式も良いところであり、ミサイル1発の直撃ですら許されない

宣言通り、〃二の打要らず〃を実践しなければならないだろう

幸いにも手はあるのだ、ここは一つ、分の悪い賭けと洒落込もう

「雷切、起動」

気合を入れる意味を込め、音声認識で両腕に装備された武装を起動する

「エネルギー、充填」

《エネルギー充填、完了》

これは、徒手接格闘戦に特化した「ヴァイパー」が有する数少ない
武装の一つ

「フウー……」

「……」

西部劇の早撃ち勝負が如く、お互いに獲物を捉え、武器を構えたまま動かない

発汗機能などない筈なのに、緩く握った拳が汗ばんでいるように感じる

セシリアも、スターライトのグリップを何度も握り直していた

何をキツカケに動き出すのか分からない、特大の緊張感に包まれた
フィールド、この空気を打ち破ったのはー

「はぁッー」

山田先生のクシヤミだった

「——ツクシヨい!!!」

「墜ちなさいッ!!」

再び先手を打ったのはセシリアだ

スターライトから放たれるビームを間一髪で回避するが、その先に待ち構えるのは無数のミサイルだ

「輝け、日輪ツツツ!!」

「!?」

直後、フィールド内を甲高い爆音と視界全てを埋め尽くす光が放たれる

セシリアは混乱した、棗が何か奇妙な武器を取り出したかと思えば、突如として視界が狭まったのだ

これは、つまりー

「ハイパーセンサーが!?!」

ISに標準装備された技術の中で、最もISをIS足らしめている技術の一つがハイパーセンサーである

パイロットの周囲360度をカバーする全天周モニター

どんな遠くの敵であつてもいち早く察知するレーダー

非常に高度な操作を要求されるパイロットをサポートするハイテク技術の塊、それがハイパーセンサーだ

これがなければ、パイロットは己の眼でしか視界を確保出来ず、敵を察知することは叶わず、ISは旧世代のパワードスーツとなんら変わりなくなってしまうのだ

棗がビームを避ける刹那、ノンフレームで「ヴァイパー」の拳に現れたのは拳銃のようなものだ

“ようなもの”というのは、その外見が一般的な拳銃とはかけ離れたものであるからだ

黄色と黒のフレーム、大口径の銃口、両側面に大きくせり出したドラム状の部位、そして何より目を引くのは撃鉄が備わっているであろう部分に奇妙なレンズのようなものが鎮座している、まるでオモチャ

である

だが、その外見とは裏腹に銃口から放たれた光弾は亜音速で「ブルーティアーズ」の前方まで進むと突如として爆発し、ハイパーセンサーを麻痺させたのだ

無論、「ヴァイパー」は対策済みである

「そんな、ハイパーセンサー用のジャマーだなんて！」

「言ったでしょう、戦いに潇洒ではと！」

「クツ……でも、A I S ミサイルなら！」

「遅い！」

放たれているミサイルは多い

だが、通常形態ならいざ知らず、ネイキッドモードとなった「ヴァイパー」は——

「ミサイルを踏み台にした!？」

「セシリアさん、あなたに足りないものア！それはア！情熱！思想！理念！頭脳！気品！優雅さ！勤勉さア！そオして何よりもオオオオ——速さが足りないツツツ!!！」

——速い

「雷切——」

ミサイルを足場にし、踏みつけながら一気に呐喊し、接敵するセシリアからしてみれば一瞬にして現れたかのように見えたのだろう

「馬鹿な」という表情をしている

「——抜刀ツツツ!!！」

両肘に纏わりついていた紫電が一層強くなる

肘のカバーが開くと、そこから姿を露わにしたのは刃だ

全長50cmほどの刃は対I S用としては頼りなく見える

だが、棗が両腕を振りかざし、肘打ちのようにしてセシリアの眼前で腕をクロスした瞬間、空気を揺らす轟音と共に刃が回転した

振り子運動の様に一点を支点とし、電磁誘導を以って繰り出された刃はセシリアのシールドを十文字に切り裂く

その衝撃と威力は60%の余力を残していたセシリアのシールド

エネルギーを削り切り、そこから、だめ押しの中段回し蹴りで蹴り飛ばす

ブルーティアーズは為す術もなくフィールドの端まで吹き飛ばされー

『セシリア・オルコット、「ブルーティアーズ」、シールドエネルギー0！勝者、「ヴァイパー」！日野棗！』

ブザーが試合の終了を告げた

第3話『Do Cyber girl's dream of vengeance? (サイボーグ少女は復讐の夢を見るか?)』

「つ、疲れた……」

試合の後、ピットに帰還した私はISを解除し、備え付けの長椅子に突っ伏す

ネイキッドモードは装甲やシールドの維持に使用していたエネルギーを最低限に留めて残りを全て速度に回した、謂わばリミッター解除形態のようなものである

故に、私と「ヴァイパー」は物理的接続を行なっているため、とても疲れるのだ

「お疲れ様、ほら、スポーツドリンク」

「うむ、良い試合だった……しかし改めて見ると、いや、すまない、余計だったな」

「言ったでしょう?今更気にしていません……それと、ありがとうごさいます、一夏さん」

打鉄を使用していた時の全身スーツとは違い、今の私はハイネットクのスク水のようなISスーツを着ている状態だ

だがそれでも神経接続をする上に四肢のサイボーグ部位をISのパーツに置換する関係上、NCMS接続プラグが存在する頸椎、脊椎、骨盤、鎖骨といった部位はどうしても露出する事になる

「へえ〜こんな風になってるのか、サイボーグをこんな間近に見るのって初めてだ」

「うむ、私もテレビで見ただけだからな、新鮮だ」

「……あの、一夏さん? 箒さん?」

「む、どうした?」

「なんだよ棗」

主任を筆頭に、テキサス支部のみんなには一糸纏わぬ姿ですら晒したことがある私である

この身体を見られること自体は大したことはない、と思っていた
「……いえ、気にしていないとか慣れてるとか言った手前アレですけど、流石にそんなジロジロ見られると恥ずかしいのですが……」
赤の他人とまでは言わないが、2人とは知り合って数日である
しかも、タイプではないとは言っても同年代の男性にここまで凝視されると流石に恥ずかしさが込み上げてくる

あ、わかった

一夏さんって唐変木とか朴念仁とかって言われるタイプの人だ

「うえ!? あ、すまん！」

「す、すまない棗」

「いや、まあ、いいんですけどね？」

「あーいや、なんて言うか、機械と生身の調和っていうかさ、綺麗だなーって思ってたさ」

「!?」

「えっ」

いま、なんと言った？

え? 綺麗? 私が?

「綺麗、ですか?」

「ん? ああ、無骨だなあとも思うけど、どちらかって言えば俺は綺麗だと思っぜ」

「そ、そうですか……」

凄いとかが、カッコいいとか、そんな風に評価されることは多々あった

だが、綺麗だなんて言われたのは初めてだ

「……は、初めてです、そんな風に、言ってくれたのは」

「そうなのか?」

「は、はい……」

「なら、今までの奴に見る目がなかったな」

「……口説いてるんですか?」

「へ? なんでそうなるんだ?」

「……はあ」

ああ、一夏さんって朴念仁な上に天然ジゴロか、これはなんとまあ、夕子の悪い

箒さんがあんなに必死になるのも領ける

「時に一夏、屋上に行こう、少し話したいことがある」

「そうか、わかった」

「じゃあ俺は行くから、ゆっくり休めよ！」

「はいはい、休ませてもらいますよ」

……お話、無事で済めばいいですけどね

しかしまあ、なんとというか

「……きれいな」

顔が熱い

サイボーグの掌からも伝わる熱

これはまさか、噂に聞く——

「これが、恋——？」

「正直キモいのでおやめになった方がよろしいかと」

「げえ、セシリアさん」

「人を関羽雲頂みたいに言うのやめてただけます？」

ピットの奥から姿を現したのはセシリアさんだった

汗ばんだ身体に学園指定のジャージを着て、タオルを首から下げつ

つストローでスポーツドリンクを飲む様はどこか扇情的である

「……」

「な、なんですの？」

「いえ、別に」

ジャージの上からこれでもかと張り出し、動くその都度たゆんたゆ

んと揺れて自己主張する巨乳が羨ましくて仕方がない

いったいゼンたい、何を食ってどんな生活したらあんな胸が育つ

のか気になる、英国淑女の嗜みとでも言うのだろうか

「てゆうか、人をゴキブリ扱いしておいてその言い草は流石ですよ、

例えば人間なだけ感謝してほしいものです」

「あんな髭面の男に例えられるのは死んでも御免です——って、そん

なことはどうだっていいのです、今回はお話に来ましたの」

長椅子に横たわる私を見下ろして宣言する姿は威風堂々というか、
なにか憤っているように見えた

「私は特に話すことなんて無いんですけど?」

「あら、ご自分の台詞をお忘れになつて?」

その身体のことについて「追々話す」、と言つたばかりではないで
すか

あの身体とIS、私の考えが正しいのであれば——私はあなたが今
後ISを使うことに反対です」

なるほど、説明するまでもなく私の秘密に辿り着いたらしい

……一夏さんや箒に話している以上、秘密もクソもないのだが

「……場所を変えましょうか、学内のカフェテリア、一度行つてみた
かったのです」

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

学内の一角に設けられたカフェは国家予算が潤沢に投資されてい
るIS学園なだけあつて随分と立派なものだ

麻布十番や青山にあつても顔負けしないお洒落な内装、教育の行き
届いた店員、まだ一口しか飲んでいないがコーヒーの味も確かなもの
だ、セシリアさんが買ったダージリンもそれなりの味わいなのだろう
だが、休日や昼休みであればパソコンを持ち込んで何がしかの作業
に没頭する生徒、お喋りに夢中な生徒で賑わうであろうこの場所も、
こんな時間となれば人気は疎らだ

そんな店内の一角にあるソファ一席に陣取り、ややあつてから話し
始める

「で、私の体に関することでしたね」

「はい……アレ、真つ当な技術ではないでしょう?」

ISの操作系統は二つある

一つは腕部パーツ内部に存在するコンソールから手動で行うマ
ニュアル操作、もう一つは脳波を感知することで操作するイメージ・
インターフェースだ

基本的には肉体の動作に付随させてマニュアル操作を行い、その補
助としてイメージ・インターフェースを利用する

だが、それだとしても人間の知覚能力、判断能力に依存してしまい動作にラグが生じてしまう

「ISはその量産性の皆無さやパイロットの確保しにくさ、その他諸々の点から兵器失格ですが、それを伴って余りある性能——具体的には戦闘機に勝る速度、戦闘へりに勝る機動性、戦車に勝る耐久性、そしてそれら既存兵器を圧倒する火力がウリです

IS技術が持つ可能性は正しく無限大ですが、コアの生産が不可能な上にパイロットの数が制限される以上、既存兵器のようにトライアンドエラーを繰り返す反復研究は不可能だとは言いませんが限界があります

ならば、パイロットでトライアンドエラーを繰り返す方向に持っていくのは、誰しもが一度は考えることでしょう

世の中には、世代遅れの量産機で最新鋭機を圧倒するパイロットだっているのですから」

織斑千冬が良い例である

最近ではISに殆ど乗っていないようだが、彼女は一度国家代表が駆る最新鋭の専用機に対し、打鉄で勝利を収めているのだ

「表沙汰に出来ないだけで、何がしかの形でどの国でもやっている事だと思えますよ？」

一騎当千のエースは貴重で重要な戦力です、それが沢山いればその国が有する軍事的アドバンテージは確かなものとなるでしょう」

それこそ、嘗て遺伝子操作技術とクローニングで最高の兵士を作ろうと画策した恐るべき子供たち計画のようにだ

数で戦力を伴うことが不可能ならば、質でそれを伴うしかない、これは各国の共通認識だろう

「2年前、この技術は我が社で産声をあげました

強い人間を産み出すのではなく、何でもない普通の人間に手を加えて強くする方法を採用したのは昔取った杵柄というか、経験からですかね」

そうして産まれたのがISと人を繋ぐ歯車、

Neuron Connect Motiontrace System
N C M S だ

人体にISと物理接続するプラグを移植し、ISと人体を完全に同調させてあたかもISを身体の一部のように扱う新世代操作システム

人と繋ぐのだから、通常の操作系統と同様に隙は生じるのだが、既存システムよりも圧倒的に早い反応を可能にしたもので、国防高等研究計画局 防衛装備庁DARPAとATLA協賛の下、一定の成果を出す所までは研究が進んでいた

「ですが、そう簡単には行かなかったんですよね」

「……失敗したのですか」

「結果的に言えばそうですね、技術は完成し、術後経過も順調、残すは実戦のみ

そして迎えた実施試験、場所は中東、任務内容は某国よりメガトン級核弾頭を奪取したイスラム過激派組織の殲滅、並びに核の奪取でした

結果、組織は跡形も残さず全滅……ですが」

順調に見えた試験は思いもよらぬ結果となった、組織はあろう事か核による自爆を選択したのである

無論、核自爆を止めようと奮闘した——だが、その時に事故は起きた

「幾らISと言えどメガトン級核弾頭の爆心地では絶対防御の発動は必須

それも、流石にその規模の核爆発では絶対防御で助かる保証などありません・

しかも運の悪いことに、どこからどう手に入れたのか知りませんがクソのような固さに定評がある拠点防衛型メタルギアが10機ほど出張ってきた上、核の殺傷圏内に非戦闘員どころか無関係の民間人が多く住む街まで存在する始末でした

そんな状況だったので、あの時は嘗て無いレベルで必死だったんですよね

作戦は成功したんですけど、ちょっと無理し過ぎちゃいました」

あの時起きた事故、それは神経接続による弊害——パイロットへの情報過供給である

NCMSはパイロットと機体間で情報交換速度を飛躍的に上昇させるものだ

だが、この時の私は必死になるあまりISと一つになり過ぎた

ISとのシンクロ率が100%を超えた段階でパイロットへの負担が許容値を超え、情報セーフティを破ってしまうのである

詰まる所、パイロットとISのシンクロ率が高過ぎた為、本来膨大な処理の果てに取捨選択されたごく一部の情報を受けるだけの筈が全ての情報が脳に流れ込んだというわけだ

「作戦行動中はめちゃくちゃ頭が痛いのと、目やら鼻やらから血が出てエゲツない顔になる程度だったので問題なかったんですが、帰還後にISを解除した途端にこう、テレビが消えたみたいになりました、そりやもうパニックですよ」

高すぎるシンクロ率がパイロットを殺す可能性、これはとても無視出来るものではなかった

だが、その事故を防ぐ為にシンクロ率を安全なレベルに制限すると通常の操作と大差ない精度まで落ちてしまう始末である

「私、昔は金色ではなく黒い瞳だったんですよ」

前髪をかき上げ、義眼を通常モードから解析モードへ切り替えるセシリアさんには瞳がレンズがフォーカスを繰り返しているように見えているはずだ

「……その話から察するに、あなた被弾の際にダメージのフィードバックを受けていますわね？」

「ご明察です」

ISと人体を繋ぐ、これは非常に痛みを伴う行為だ

身体をサイボーグだらけにするなんてちやちな理由じゃない

ISに乗って戦うその都度、常に死の危険がつきまとうからだ

ISは既存兵器と毛色がだいぶ異なるが、それら既存兵器の延長線上に存在するのは自明の理である

過去に一度、ISパイロットの養成所へ行ったことがあるがアレは酷いものだった

アレは兵器と向き合う者の姿勢ではない、その先に待つ者、待ち受

ける現実も知らず、ただただ強い力に惹かれてやってきた子供の集まりだ

ISは競技用のオモチャなどではなく、戦場の行く末を左右する礫とした兵器であり、己はそれを駆るパイロットであり、一度戦場に出れば殺し殺される立場となる事を理解していない

最初はそれでいいのかもしれない、徐々に現実と向き合って成長すれば良い

だが、訓練を始めて数年以上のベテランと教育者がそんな状況では話にならない

撃墜されれば死の危険が付き纏うのは当然、そんな事も分かっていない

確かに撃墜されただけでは死にはしないだろう、それだけ絶対防御というライフセーフティは強力なのだ

だが、その後はどうなるだろう

友軍が駆けつけて助けてくれる保証なんてない

敵に捕まり、ISを奪われ、拷問され、身も心も凌辱されるかもしれない、そして藁のように死ぬ

絶対防御は便利だ、しかしその存在がどうしてもパイロットと関係者を「死」という概念から遠ざけてしまう

一方、NCMSはISと神経接続を行い、通常の操作ではなし得ない精度と速度を手にする技術だ、これを使っていればISの手であやとりですら可能なのである上、普通ならば感じることはない地面を踏みしめる感触や掴んだ物の感触、表面装甲を撫でる風まで感じられるシロモノだ

だが、その代償としてダメージフィードバックが存在する

一定以上はカットするとはいえ、ISが受けたダメージをパイロットにも感じさせてしまうのだ

別に怪我をする訳ではないのだが、被ったダメージが脳に信号として送られ、現実のような痛みを感じてしまう、その信号が大きければ大きいほど、量が多ければ多いほど、パイロットの脳へかかる負担は強くなる

その先に待ち受けるものは死か、一生残り続ける疵痕だ

「正しく、I Sと人を繋ぐ歯車」、と言ったところですわね」

「それがメタルギア・ネクシスだ」とは、開発主任の談ですよ」

「狂気の沙汰としか言いようがありませんわね……どうせ言ったって聞かないでしょうが、改めて申し上げておきます」

怒りからだろうか、カップを掴む手を震わせながら、セシリアさんはキツと此方を睨みつけ、言い放つ

「これ以上アレを使うのはお辞めなさい」

これは、友人としての忠告です」

「……忠告、痛み入ります」

「では——」

「ですが、それは土台無理な話です

私には、アレを使わなければならない理由と目的があります」

一つ目は、私が本来有するI S適正の致命的な低さ

過去に受けた適性検査では『今時珍しいくらい才能がない』、と言われたのは苦い記憶である

私は、NCMSの恩恵を受けて漸く戦えるようになったのだ

「そうまでして、なぜ戦うのです？」

『目指すはブリュンヒルデ』と言いましたが、アレどうせ建前でしよう？」

「……喋りすぎましたね

しかし今日は厄日でしょうか、まさか同じ質問を二回もされるなんて……でも、あなたになら話していい

……私は四肢と両親を事故という建前のテロで亡くしました、これだけ言えばお分かりでしょう」

「……仇討ちをする気ですね」

二つ目の理由、それは織斑先生に語ったように復讐の為だ

「この手と足、ヴァイパーは奴らを根絶やしにするためのモノ
ブリュンヒルデは、その過程にすぎません」

「……そこまで言うのです、相手の見当はついているのでしょうか？」

「それ、はー」

「奴ら」の根は深い

どこに奴らの手のものがあるかわからない以上、おいそれとあの事件の事を話すわけにはいかないのだから

セシリアさんがそうである可能性はゼロに近い

だが、ゼロではないのだ

「まあ、喋りたくない、あるいは喋れないと言うのであれば無理に聞きはしませんわ」

「……感謝します」

冷めかけたコーヒーをぐいっと飲み干し、一息つく

「それはそうとセシリアさん」

「なんですの?」

「一夏さんの事、どう思います?」

「どう、と言いますと……ハッ、まさかあなた、あのお猿さんに本気で惚れ込んで」

「惚れたかどうかは分かりませんが、あんなタラシな台詞吐かれたら動揺の一つや二つもするといふものです」

「……いったいどんな台詞を吐いたんですの、あのお猿さんは」

「黙秘します」

それ程に、*「綺麗」*という言葉は衝撃的だったのだ

心に大砲でも撃ち込まれた気分だった、思い出すだけで俯いてしまいう程に恥ずかしい

「セシリアさんも気をつけた方がよろしいかと、一夏さんは天然ジゴロと朴念仁が悪魔合体した神様みたいな男です」

「それは滅ぼすべき悪なのでは?」

「そんな事したら地獄の底まで織斑先生と箒さんが追ってきそうです」

「……それは、嫌ですわね」

かのブリュンヒルデと、天才にして天災と謳われた篠ノ之博士の妹から全力で追跡される未来というのはあまり想像したくはない

「根が誠実なのは分かるんですけどね、一応初心者脱却を目指して稽古をつけていましたが、今時珍しいくらい男らしいというか」

「……まあ、確かに」

今思えば支離滅裂であったとはいえ、私の言葉に対してあんな風に返してきた男は初めてです」

何か思うところがあるのだろうか、セシリアさんは思案顔だ

「兎に角アレです、コロリとやられないように注意した方が良いと思いますよ」

「胸に刻んでおきますわ」

まあどうあれ、明々後日に控えたあなたと織斑一夏の戦いを見て判断しますわ」

「あ、それについてなんですけどね」

「？」

そうして私は、今一番の問題について切り出した

その時のセシリアさんの顔は今ままで一番面白かったと思う

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

翌日、廊下に張り出されている学内新聞は昨日の国家代表候補生同士のクラス代表決定戦が一面を飾っていた

『日本対英国、1—1クラス代表決定戦!!』

『織斑一夏と戦う権利は謎の格闘家、日野棗に!』

そんな見出しには棗とセシリアの戦いが事細かに綴られた文章が踊っている

いったいどれだけ高価なカメラを使ったのか、一部は肉眼では到底捉えきれなかった「ブルーティーズ」と「ヴァイパー」の熾烈な戦いが写真に収められていた

「すごいなあ」

「明日にはお前が戦うんだぞ、気を抜くな」

「分かってるよ」

昨日何故かキレ気味の箒に引っ叩かれ、赤く腫らした頬を撫でつつ方位の叱咤に答える

明日の放課後に棗との試合——A組クラス代表決定戦の決勝が行われる

初心者からだとしード枠を貰っているのが些か複雑であるが

「それで、あの戦いから盗めたものはあったか？」

「……正直、高度過ぎてなにも参考にならなかった」

勝利者である棗、その専用ISである「ヴァイパー」の特性は掴むことができた

極近接戦闘特化型である「ヴァイパー」はその尖りすぎた性能から射撃戦に弱い、だがそれを伴って余りある機動性、柔軟性を有したISだ

基本的に殴る、蹴るといった格闘戦を主体としているが、ワンオフアビリティかなにかであろう、ハイパーセンサーに干渉する閃光弾や両肘から繰り出した刃、アーム付きのテールユニットといった特殊な武装も使用しているし、格闘だけというワケではないのだろう

……しかし、それだけだ

「何も知らんよりはマシだと割り切るしかないだろう」

「まあな」

「世は常に暗雲に包まれています

一歩先は闇であつたとしても、一筋の灯りを頼りに進むしかないのですよ」

その上、納品が遅れているという己のISが一体どういった仕様なのか、それすら分からない状況では対策も何も無い

そんな事を考えていた矢先、音もなく後方に現れたのは棗だった

「おはようございます、一夏さん、箒」

「おう、おはよう棗」

「おはよう、昨日の疲れはとれたか？」

「はい、問題はありません……私は」

「私はって、どういう事だ？」

「いやあ、申し上げ難いのですが……」

本当に申し訳なさそうに、頬をかきながら告げらえた言葉は衝撃的なものだった

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

「棄権!?!」

「おい、それどういう事だよ棗!」

——クラス代表決定戦決勝戦なんですが、棄権しようかと

申し訳なさそうな態度とは裏腹に誤魔化す事なく単刀直入に切り出した言葉は衝撃的なものだった

「いや、正直セシリアさんとの試合で燃え尽きたと言いますか」

「燃え尽きたって……」

「まさかあそこまで全力でやらないといけないとは思ってもみなかったんですよねえ」

被弾も多かった上にリミッター解除形態とでも言うべきネイキツドモードまで使ってしまったので、消耗部品の交換とか諸々の整備が間に合わないんですよ……あの子、ピーキーな機体故だいぶデリケートなので」

今の今まで、圧勝するかボロボロになるかの二択しかなかった故の盲点だったと言えるだろう

あの上にセルフメンテナンスをした所、「ブルーティアーズ」との戦闘で関節部品を筆頭に消耗部品の磨耗や劣化が著しく進んでいたことが発覚した

通常形態での戦闘だけならばこうはならなかったのだが、ネイキツドモードの使用によりお釈迦になりかけている部分が散見されたのである

元より人機一体である「ヴァイパー」はそのコンセプトとは裏腹に非常にデリケートな機体だ

故に、こればかりはISの自己修復機能を逸脱したものである上、本社としては今後の予定にあるクラス対抗トーナメントに向けて万全を期したいという意向もあり、耐久性向上を念頭に入れた新品を送るとの事だ

そんなワケで、朝イチで申請した補給物品の到着と専門スタッフによるオーバーホールを待つ他にない、しかも到着が五日後と来た

「それで、装甲の修復と予備のビットを持ち出すだけで済む私が代理出場するというわけですわ

まったく、あんな大見得切っておいて情けない」

「いやあ、今回ばかりは面目ない」

軽口を叩きながら青いサーモマグを手に見れたのはセシリアさんだった

「ですが、今回の戦闘で問題点がわかりましたし、次は一方的にコテンパンにしてあげますから楽しみにしててくださいいね」

「何を言っていますの？」

昨日の戦いであなたの戦闘データは取得済み……いくら性能を向上させようと私の勝利は揺らぎませんわ

ま、データがあるという点ではあなたも同じですが……と、それはそうと、織斑一夏？」

「なんだよ」

一夏さんに向き直ったセシリアさんは何処か恥ずかしそうにしていたが、一度深呼吸をしてからはキツと表情を引き締め、言葉を紡いだ

「まず、入学初日の一件については言葉が過ぎました、謝罪します」
「！」

深々と頭を下げ、謝罪するセシリアは新鮮であった

セシリア・オルコットは今や絶滅危惧種かと思われた金髪縦ロールとお嬢様言葉、その上リアル英国貴族出身という属性役満である事からも分かるように、高慢ちきとまでは言わないが非常にプライドが高い女である

決して性格が悪いとかではない、ただ誇りとかそういったモノが服を着て歩いていると言っても過言ではない人間だと思っていたが、こういった殊勝な態度も取れるのかと驚いた

「な、なんだよ、急に」

「いえ、改めて振り返ってみればなんともみっともない姿を晒したものだ」と猛省しただけです……故に、謝罪を」

それは一夏さんと箒も同じようで、今までと一変したセシリアさんに動揺しているようだった

「……おう、そこまで言うならあの事を掘り返すことはしないけどさ」

「そう言っていただけとありがたいですわ」

「でも、そんなこと言ったって明日は手加減はしないぞ」

「無論、それとこれとは話が別です」

私も未だ候補生とはいえ英国を背負う身、これ以上公然の場で醜態を晒すわけにはいきませんから……時に、あなたは棗さんに師事を受けているそうですね？」

「ああ、そうなるな」

師事した、と言われる程大した事をしたつもりはない

ただ、仕事の都合と個人的感情がマッチしたからスパルタ式で最低レベルまで鍛えたただけだ

「くれぐれも、棗さんの顔に泥を塗る戦いをなさらないでくださいかね？」

幾らルーキーとは言っても国家代表候補生の教えを請うたのです、無様な戦いなどしようものならばタダじやおきませんわ」

「当たり前だ、勝とうが負けようがーいや、絶対に勝ってやるから首洗って待ってるよ」

「その威勢、言葉だけにならないよう期待しています」

そう言って、セシリアさんは華麗に立ち去るーが

「あつつ」

「どうしてこう、最後に締まらないんでしょうかあの人は……」

サーモマグの中身、おそらく紅茶が熱くて火傷でもしたのだろうか

見た所新品のようだし、普段はお付きの執事なりメイドなり、一般人からすればファンタジーな存在に任せていたのを自分でやったのだろうか

普段やらない癖に慣れない事をするからだ

「……セシリアって実はいい奴なのか？」

「性格は基本的にひん曲がってますけど良い人ですよ」

ノブリスオブリージュって奴ですかね、面倒見もいいですし、あらゆる意味で教育者向きの人だな、とは思いますが」

事実として、ISの教育者への道も有望視されていると聞いたことがある

あくまでも代表候補生として結果を出せなかった場合、という話であるが

「へえ……なんか意外だな」

「まあ、あのナリと性格はでは仕方がないかと」

属性役満なセシリアさんは第一印象があまりにもキツイ

正直、あの見た目だけでもなんとかすればもう少しマシになるのではと思うが、そうすると今度はセシリアさんのアイデンティティ的なものが死ぬ気がするので、それはそれでどうなんだと思うが

「まあ彼女のことはどうでも……良くはないですが、今考えるべきはあなた自身の事です」

一夏さんは明日、一世一代、世界中全ての男、その沽券に関わる戦いに挑むわけですが」

「……そりゃ責任重大だな」

「ええそうです、トトカルチョで正直馬鹿にならない金額を賭ける予定である私の食生活の為に、あなたは勝ってもらわなければなりません」

「おいちよつと待てそんなことやってるのか!？」

「あれ、知らなかったんですか？私とセシリアさんの時もやってたんですよ？」

……まあ、それだけこの試合に注目してるってことですよ、私や学園の生徒のみならず、様々な人々がこの試合に注目しています

ちなみにオツズですが、私の予想ではオルコットさんが9、一夏さんが1ですね」

昨日は会場でトトカルチョを運営していたのがバレて生活指導部からキツイお灸を据えられた事から学んだのか、各クラスに配された報道部員が票を纏め、部室にて極秘裏に集計を行なっているらしい

あの手の賭けはどうやってても元締めが美味いように出来ているのであるが、ああも勝った時の分配がデカいとやってみたくもなるというものである

「そ、そんなにか……」

「オツズはどうあれ、ガチガチに緊張しちやっただ一夏さんにアドバイスですよ」

「緊張させたのは棗だけだな」

「病は気から、なんて言うように精神の状態は肉体に大きな影響力を持ちます」

「話聞けよ」

「普通、国家代表候補生の相手が、付け焼き刃の知識と技術を得ただけのルーキーなんて不相応も良いところですよ」

それは、かのブリュンヒルデの弟であろうと変わりません」

天賦の才なんて言葉があるように、トレーニングを重ねずとも一定の成果を出す天才は存在する

だがそれはあくまでも一定のレベルを超えないものであり、ごく一部の例外は除いてそれ以上は努力を重ねたものに軍牌が上がる

だが、その天賦の才を有するものが努力をすればどうなるか……それを体現しているのがセシリア・オルコットという少女だと言える「ですから、せめて想像してください」

普通に戦って敵わない相手なら、勝てる状況、勝つ為に必要なものを想像し、それを現実とする為の一手を掴むんです

少なくとも、私はいつだってそうしてきたし、そうやって勝利をもぎ取ってきました

イメージの中ですら勝てない敵なんて存在しません、そしてイメージ出来るならば既にそれは実行可能な筈

こういった状況において常に想定すべきは最悪の状況ですが、常に想像するのは最強の自分です

これを忘れなければ、少なくともセシリアさんが言うように無様を晒す事もないでしょう」

「……わかった、やってやるさ存分に」

「その意気です——つと、では私はこの辺で」

「そろそろはHR始まるぞ?」

「いえ、少々野暮用を思い出しまして、それでは」

そう言うが早いのか、その場を立ち去る

その後ろでは——

「織斑くん!なんか明日のクラス代表決定戦の相手が変わったって聞いたんだけど!?そこんとこ詳しく!」

「うえ!? あつ、棗の奴逃げたんだな!」

私達の会話をどこからか聞きつけたんだろう

報道部の部員がカメラ片手に押し寄せてきていた

アレに巻き込まれるのはゴメンだ

「……それでは見せてもらいますよ、ブリュンヒルデの実弟にして世界唯一の男性 I S 操縦者である『織斑一夏』、この世界を変革するかもしれない可能性の獣……その力を」

第4話『The boy flew to』 Infinite stratos”（少年は無限の空へ飛び立つ）』

翌日、アリーナには先日以上に人が集っていた。

やはり世界唯一の男性IS操縦者というネームバリューは大きいらしい上、ルックスも良しとあって予想よりもずっと票が多かった事から、愚弟は思いのほか期待されているらしい。

それでもオツズは7：3である事から、冷静な判断ができる人間はそれなりにいるようだ。

……そもそも、本当に冷静ならばトトカルチョなどには参加しないだろうが。

「流石、織斑先生の実弟が戦うとだけあって凄いですね」

「お前とオルコットの試合も本当なら内輪だけでやる予定だったのだから」

しかし、国家代表候補生同士の戦いは良い教育材料になった」

コーヒー片手に隣へドカッと座り込んだ棗は、いつもの昼行灯然とした笑顔を崩さない。

千冬的にはどうにも先日の一件が脳裏を過ぎるが、彼女がこうして気楽にしている以上蒸し返すべきかどうか、悩んでいた。

「お褒めに預かり光栄ですよ、ところで一夏さんは？」

「ズブの素人がプロに挑んだ結果どうなるのか、付け焼き刃の知識と技量で挑めばどうなるか、その見せしめという意味がある」

お前らも公衆の面前で恥をかきたくなければ練習しろ、とな」

「流石はブリュンヒルデ、実にお厳しい事で」

「お前も人のことを言えんだろうに」

「はて、何のことやら」

「惚けるなよ、お前が奴に課したメニューが代表候補生錬成コースの一部であるのは知っているんだ」

棗が一夏に課していたIS鬼ごっこは世界各国のIS機関で採用

されている訓練項目の一つだ。

アレ一つで初歩的な対IS戦闘機動に必要な技術をが学べるのだから、間抜けな名前に反して有用な訓練である。

だが鬼ごつこの名を冠しているだけで何故か楽しくなってきたりするもので、やっている本人達からは概ね好評のようだった。

「ふむ、流石にわかりますか」

「私をなんだと思っっているんだ、一応教師だぞ」

「一応とか言っちゃうあたり、自分でも似合っていないか思っってますん？」

「日野、私のことが嫌いか？」

「昨日の一件さえなければ少なくとも偉大な先達くらいには思っってみましたね」

「今はどうなんだ」

「深刻な悩みに月並みなことしか言えない年増ですかね」

「ほう……？」

「ふふふ……」

隣りあいながらも妖しげな笑みでお互いを威嚇する二人は異様な雰囲気にもまれていた。

笑顔とは本来威嚇行動であるとはよく言ったもので、周囲の生徒も喧騒で内容こそ聞き取れなかったが、身の危険を本能で察した勘の良い生徒に連れられて逃げ出している有様である。

しかし、千冬は不敵な笑みを真剣な眼差しに変え、心の片隅に影を落としていた一言を吐き出した。

「……昨日はすまない、お前の深い所へ簡単に踏み込むべきではなかった」

「……急に真面目な顔になったかと思えばソレですか」

その事ならもう気にしてませんよ、私も年甲斐なくキレちゃったのとお互い様という事でひとつ」

「そう言ってくれると助かるな……だが、アレは私の、教師としての本音でもある」

思い出すのは、嘗ての教え子に少なからず存在した「鬼」になる事

を選んだ者たちだ。

「私も職業柄、お前のような子供をゴマンと見てきた

そしてその多くは内に燻らせる復讐心に潰れるか、その対象に逆襲され人生をファイにしていたのだ

私自身、一時はそういった感情に振り回された時期があったから尚更だ……修羅の道など、真つ当な歩みではない」

織斑千冬は、復讐とは人間の尊厳を保証する最も残酷な権利であると認知している。

復讐者が抱く憎悪の形や理由は千差万別であるが、鬼となる事を選んだ者の末路は権利と同様かそれ以上に残酷だ。

天国アウターヘヴンの外側に置かれたその身は憎悪の炎に焦がされ、やがてその炎に心まで焼き尽くされ、破滅していく。

「怒るな恨むなという意味ではない、お前に限らず、人の未来は可能性に満ちている

それを復讐のみに費やすべきではないと、私は思う」

復讐とは当然の権利だ。

毒をもって毒を制す。

目には目を、歯には歯を。

犯されたならば、犯しかえす。

己を犯した相手を許せなど、とてもできるものではない。

無慈悲に過ぎる時間は、罅の入った心を癒してなどくれない。

だが、人の歩みとはそれだけに費やされるものであろうか。

千冬の脳裏に過るのは話に聞く「毒蛇」の逸話だ。

仲間を、帰る場所を、守るべき子供を、己の人生すらも敵の手により破壊され、その果てに作られた蛇。

「教師とは子供の未来を定める者ではないが、子供が望む未来へ道標を建て、導いてやることは出来る

だからもう少し大人を頼れ、私とて長い訳ではないが、少なくともお前よりは「年増」なのだからな」

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

意外だった。

正直、織斑千冬についてはそこいらの大人達と大して変わらない人物だと判断していたからだ。

それ程に先の一件が響いていたのだが、この人はあらゆる意味で大人であるらしい。

教師と生徒、元とはいえ実質的な世界ナンバーワンと一介の国家代表候補生、そういった立場の差を超えて公然と謝罪が出来る人間はそういうものではない。

ここ最近そういった事で驚かされてばかりだな、と思う。

「……そういえば、年増って言ったの気にしてます?」

「私とて女だ、気にしないやつがあるか」

少し前まで学生だと思っていたら、いつの間にか三十路が見えてきたのだぞ……」

「それは失敬」

「ここ10年程は善悪の意思は兎も角として、ご機嫌を伺う連中ばかりだったからな、年増呼ばわりされるなど思ってもみなかった」

うつかり口走ってしまったが、やはり年上の人間にとって年齢の話題は地雷であったか。

「……そういえば日野」

「なんででしょうか」

「お前は、一夏をどう見る?」

「……そりゃあ、まあ」

「そうですね、天然ジゴロと朴念仁が悪魔合体した畜生かと」

まるで女の子を泣かせる為に産まれて来たのかと錯覚するほどに」

「……すまない」

「分かっているなら、早急になんとかした方がよろしいかと」

IS学園中の女性を意図せず泣かせるのも時間の問題です」

こちらの発言から「実弟がなにかやらかした」と理解してくれたらしい。

口角がヒクついているあたり本人にも思うところがあるのだろうか、というか被害者の一人なのかもしれない。

女教師属性の実姉まで誑し込むとは、一夏さんの女誑しっぷりは底

なしなのか。

「真面目な話をするならば、そうですねえ……可能性の獣、私はそう評価しています」

「可能性の獣？」

「ふむ、流石に詩的が過ぎましたか」

一夏さんは意図せずともISを起動した事により、この世全ての男にとって正に旗印となった。

その結果、水面下では様々な団体が動いている。

それこそ国家、非合法組織関わらず、この世の中に少なからず不満を抱いている者全てがと言っても過言ではない。

彼は女性にしか動かせないという致命的欠陥にして、世界の軍事的均衡をギリギリの所で維持しているセーフティを外し、撃鉄を下ろし、戦争への引き金を引くことが可能な唯一の人物でもある。

だが、それはあくまでも可能性、言うならば机上の空論の域を出ない。

しかし可能性である故に、推測は出来ても予知はできない……まるで自由奔放な獣のように。

「故に、可能性の獣……か」

「はい、良くも悪くも、ですがね」

反IS団体は一層活気を増したようだし、各国は我先にと第二の男性操縦者を探し出そうと必死だ。

新しい男性操縦者が発見されれば、それが神が二物を与えた事による奇跡の産物でないと分かり、各国の軍事ドクトリンから経済情勢に至るまで、その影響は計り知れない。

「今日の試合も可能性に満ちています」

世界唯一の男性操縦者、ブリュンヒルデの実弟……まだまだ未熟ですが、アレは磨けば磨くほど光るダイヤモンドの原石みたいなものですよ、与えられるISもどんな化け物が出てくることやら」

「……それなんだがな」

その一言を最後に織斑先生は黙り込む。

なんと言ったものか分からない、とでも言いたげな表情だ。

「ポンコツだったよ」

「……一夏さんがポンコツなのは今に始まった事ではないですが」

「……いや、与えられた機体がな、どうもな」

「……いやいやいや、ないない、それはない」

いや、そんなまさか。

世界で唯一の男性操縦者の機体だぞ。

本人の性格はアレとしても、かの織斑千冬の実弟だぞ。

「先程納品されたから、奴に与える前に点検をしたのだ

どんなものかと蓋を開けてみれば、世界でも類を見ないーいや、恐らく世界で唯一、未来永劫産まれまいであろうポンコツ機体でな……いや、だがアレのコアの事を鑑みればある意味当然の帰結とも思いうがいやしかし」

最後の方は喧騒に紛れてよく聞こえないが、織斑先生が頭を抱える程のポンコツとは、一周回って気になってくる。

「……私、ピットに行つてきますね」

「……私も行く」

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

「お待たせしましたあ！すいませんチェックとか登録とか書類とか色々ありました！」

アリーナのIS用ピットにて待つ事十数分、セシリアは既に用意を完了している故、これ以上待たせるのも忍びない。

最悪、専用機の到着を待たずに「打鉄」か「ラファールR」でやるかと腹を括り始めた頃、大慌てで駆け込んできたのは山田先生と数名の整備課生徒だった。

「これが、一夏君に与えられる専用の第三世代IS、型式番号XX—01、個体名称「白式」です！」

その言葉と共に整備課生徒がIS用移動ハンガーにかけられていたシートを剥がす。

この時の感情は一生経つても忘れない。

この時、俺は眼前に佇むISに見惚れていたのだ。

——そこには「白」があった。

まるで白無垢のような、純白の装甲を纏ったISがそこにいた。
「……」いつが

「はい！なんだか色々あったようで遅れましたが、正真正銘一夏君のISですよ！」

今まで見てきた「打鉄」や「ラファールR」、棗の「ヴァイパー」やセシリアの「ブルーティアーズ」とも違う。

純白のそれは、まるでこの時を待っていたかのような気がする。
俺自身も、この時の為に産まれてきたかのような錯覚さえする。

山田先生に言われるまでもない、体と心で実感した、これはー俺のISだ。

「なんとか間に合ったようだな、それと惚けている暇があればさっさと装着しろ、フォーマットとフィッティングを行う必要がある」

「そのままISに座って体を預けてください、あとはISが勝手にやってくれます」

「は、はいー」

そんな時、ピットに入ってきたのは千冬姉と棗だった。

急かされるまま、ハンガーに佇む「白式」に身を預けた。

《待機モードで最適化処理を開始、終了まで残り5分》

軽い機械音と共に装甲が閉じ、瞬く間に全身を「白式」が包み、産まれた時から一緒だったかのような一体感と共に「白式」と繋がった。
ハイパーセンサーが起動すると、まるで世界が広がったかのようにある。

「……すごい」

「ハイパーセンサーは問題なく動いているようだな、気分は悪くないか、一夏」

「問題ない、すごくぶる良いよ千冬姉」

「そうか」

そう呟く千冬姉の声には、ハイパーセンサーがなければ分からないほどのブレがあった。

名前で呼んでくれたし、心配してくれているのだろう。

《最適化、完了》

《ファースト・シフト
一次移行、開始》

一次移行——確か、機体が初期設定からパイロットに最適化した結果発生する形態変化だ

「白式」に言われるがまま、空間投影画面に映し出された確認ボタンを押す

すると、全身を包んでいた「白式」は一度消え、甲高い機械音と共に再び機体を再構築し始める。

一次移行前でさえ惚れ惚れするような機体であったのに、それがより洗練され、鋭く変化していた。

「おお……これが」

「一次移行は済んだようだな、これでやっと戦えるようになる」

未だ薄く発光する装甲は白というよりはパールホワイトのようで、変化した装甲は何処か騎士を思わせるものであった。

「よし、武装の確認をし、取り出してみろ

慌てるな、教えた通りにやれば良い」

「ああ……つて、なんだこれ!?!」

武装一覧を参照すると——いや、一覧というのは語弊がある。

なにせ武装は、近接ブレード一本しかなかったのだから。

「ちよ、「ヴァイパー」よりピーキーじゃねえか!」

「それどういう意味です?」

「一夏、名前をよく見てみる」

「名前……?ちよ、これつて」

表示されている武装は、分類上は葵と同様の近接ブレードである。

だが、その名前が問題だった。

「[雪片式型] つて……」

「ああ、私が過去に使用したIS、「暮桜」の武装と同じ名前だ」

取り出したブレードの全長は1.6mほど、色は装甲と同じ純白である。

だが、「白式」から頭に流れ込んでくるこれの使い方は一般的なIS用物理ブレードとは異なるものだ。

「零落、白夜……」

思わず呟いたそのワンオフアビリティ、その名は「零落白夜」。

千冬姉をブリュンヒルデ足らしめる要因の一つ、全てを一刀両断する必殺の一撃。

通常、ワンオフアビリティはその機体だけのものであるが、「白式」には「暮桜」と同様のものが備わっている。

不思議と、何故こんなものがとは思わなかった。

やけにしつくりくる握り心地、こうして俺が構えているのが自然だと言わんばかりのフィット感がある。

「当たり前さえすれば防御不能なバリアー無効化攻撃、シールドエネルギーを分解するエネルギー光波発生システム……なんていうか、世のIS開発者が聞いたら卒倒しますね、これは」

「ああまったくだ、作った奴のしたり顔が浮かぶようだよ

奴め、トンデモないブツを寄越してくれたな」

千冬姉と棗が察した作った奴……それが誰なのか俺には分からない。い。

だが、これは意地でも、死んでも負けられない試合になってしまった。

「……」

この剣を振るう事は、千冬姉の誇りを背負う事と同意だ。

だが、これは千冬姉の為の戦いではない。

俺が俺である為に、俺のエゴを通す為の試合だ。

だから、俺は俺の為にこの剣で恥を晒したりはしない、してはいけない。

……覚悟は決まった。

「行ってくるよ、千冬姉、箒、棗」

「気張れよ」

「勝つてこい、一夏！」

「応援していますね……私の明日の為に」

「……ヨッシャ、いっちょ決めてくるー！」

棗が一言多かった気がしたが、そんな事はなかったぜ！

握り締めているトトカルチヨの半券とか、記憶よりも薄くなってる

財布とか、俺は何も見っていない！



『皆さん大変長らくお待たせしました！織斑選手の専用機が到着、諸設定を全て完了したとの報告、只今をもちまして選手入場です！』
ワアアッ、と歓声が湧き上がる。

予定時間より20分遅れての選手入場宣言に会場のボルテージは最高潮だった。

『赤コーナー！先日の勝者である日野選手の専用機「ヴァイパー」の整備難航に起因したIAT社の戦術的判断に基づく棄権により、セシリア・オルコット選手が繰り上がりで代理出場です！』

ピットから「ブルー・ティアーズ」が飛び出し、先日と同様に静止してポーズを決める。

だが、「ブルー・ティアーズ」は先日と装いが異なっていた。

『オルコット選手の「ブルー・ティアーズ」も「ヴァイパー」の猛攻によりかなりのダメージを負っていた筈ですが……』

『ビットと装甲パーツに予備が用意しており、それへ換装するだけで済んだとの事です、備えあれば憂いなしってやつですね！』

本来、青を基調としたカラーリングから全体的にグレーが多めなカラーへと変化している。

予備であったモノを引っ張り出して取り付けた故か、塗装が間に合わなかったのだろう。

『続きまして青コーナー！世界が注目する世界唯一の男性I.Sパイロット、織斑一夏！』

その放送と同時に「白式」がピットから飛び出す。

練習で使用していた「打鉄」と違い、一夏専用チューニングされた「白式」は音もなく静止する。

その手には既にただ一つの得物である雪片式型が握られていた。

『実姉はかのブリュンヒルデであると同時にI-A担当教諭、織斑千冬！』

噂によれば泣かせた女は星の数、お前は今まで食ったパンの枚数を覚えていいのか!?甘いマスクから放たれる甘言に要注意とのこと！』

「おいなんだその紹介！」

『情報源はプライバシー保護の観点から黙秘させていただきます！』

『専用ISは「打鉄」で有名な倉持技研製の第三世代、XX-01「白式」

詳しい性能は伏せられていますが、相当なものである事は容易に想像できますね』

『はい！一見近接戦闘型のようなのですが、どのような戦いを繰り広げられるのか楽しみです！

では、カウント開始です！』

そうしてカウントダウンが始まり、ゴングが鳴る。

しかし、2人は動かなかった。

一夏としては主兵装であるライフルかビットで射撃をしてくるものだと予想していた為、拍子抜けしたのもある。

だが、セシリアは一向に攻撃の気配を見せなかったのだ。

ややあって、セシリアは冷たい瞳で一夏を睨んだまま言葉を紡いだ。

「……織斑一夏」

「なんだよ、やらねーのか？」

「最後通告です、あなたにチャンスをあげましょう

国家代表候補生と少し齧っただけの素人では勝負の行く末など見えたもの……平伏なさいな、そうすれば全て水に流します」

スターライトMk-IIIの銃口を下げたまま発せられたのは勝利宣言、そして降伏勧告だった。

「なんだお前、言うに事欠いてそれかよ
力の差だとか経験だとか関係ねえ、これは男の矜持って奴だ、二言

はない

「俺はお前に勝つ……昨日も行った筈だけだな」

銃口を下げたままのセシリアとは対照的に、一夏は雪片式型を構え、切っ先を向けた。

その瞳に曇りはなく、迷いはない。

感じられるのは必ず勝つという強い想いと、泥を啜ろうと地を舐めようと、胸に抱いた誇りを汚しはしない、そんな感情だ。

すると、セシリアは表情を一変させて微笑む。

「ふふっ」

「な、なんだよ調子狂うな」

「……いえ、流石に意地が悪かったですわね

すいません、確認をしたかっただけなのです」

「なに？」

「私、人を見る目はあるつもりですの

一度は節穴になりかけましたが、結果的に狂いがなくて良かったと、そう思っただけです」

「……なんだよ、意味わかんねーぞ」

「分からなくとも結構、これはあくまでも個人的な想いですので、お気になさらず」

「……？」

「——では、いい加減始めましょうか

ギヤラリーが退屈してしまいます」

そう言うが早いのか、スターライトMk-IIIを構え、ビットをクレイドルから射出する。その数、6機。

「さあー円舞曲Shalwe danceはいかが？」

「踊りなんざ、盆踊りかしらねえよ！」

遂に、青と白が激突した。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

「ブルー・ティアーズ」の先制攻撃が始まりを告げた1-Aクラス代表決定戦決勝。

片や英国国家代表候補生、セシリア・オルコット。

片やブリュンヒルデの実弟にして世界唯一の男性ISパイロット、織斑一夏。

セシリアが言い放ったように、本来ならば力の差は歴然である。

幾ら特訓によって最低ラインの戦力は確保したとは言っても、その

間には覆し難い差があるのが現実である。

正直なところ、師事した棗自身ですら十分保てば良い方で、その時間内にセシリアを打倒する事が叶わなければ敗北を喫するのみであると考えていた。

「うおおおおッ!!」

「猪口才なア!」

だが、一夏はその予想に反して20分以上もセシリアの猛攻に耐え、セシリアは一夏が予想以上に食い下がる事に驚き、苦戦を強いられていた。

これは「白式」が有するポテンシャルの高さ、性能に依存したものであるが、一夏が「白式」の使い方を弁え、棗が戦った際の情報を精査し、戦術をコピーし、受け取ったアドバイスを忠実に守っているのが大きい。

「〔白式〕は雪片しか武装がない、ならば取れる戦法は一つしかない」
……寄って、切る!」

「ヴァイパー」と同様どころか、それ以上に近接戦闘特化型である「白式」を扱う上での極意は「寄って切る」、これに限る。

そして一夏は、雪片式型以外の武装が存在しない上、一撃必殺の零落白夜を扱うには適切且つ的確なエネルギー管理が肝要だと即座に理解し、覚束ない足取りながらも着実にセシリアを攻めていた。

「この短時間で対策を完成させたと……!?! 一体どれだけの演算処理を!」

「思いつきを数字で語れるかよ!」

「冗談でしょう!?!」

一夏が棗とセシリアの試合から学んだ事は、「セシリア本人の視界から失せ、死角へ回り込む事だった。

ハイパーセンサーは360度全方向を認知可能であるが、棗のように神経そのものをISと繋げ、己の目を完全に同期させる事はできない。

故に本来持ち得る視覚以外からの情報は、通常の認識動作よりもプロセスが多くなるのが常である。

更に、セシリアが行うビットとスターライトMkⅢによるオールレンジ攻撃は決して同時射撃ではなく、それぞれの射撃には僅かながらにラグが存在し、安定性確保の為に射撃の際には静止する事を見抜いていた。

「クツ……しかし私として英国を背負う身、そう簡単には！」

セシリアとて馬鹿ではない。

彼女自身が言ったように、英国の看板を背負う一角である以上は一夏がある程度の対策を練ってくるであろう事は把握していた。

ただ、一夏はセシリアが予想する以上に対策を土壇場で完成させており、掌握してから間も無いISでそれを実行してみせるだけの胆力と実力を持ち合わせていた。

それがセシリアが一夏に対しての誤算、その一つだったのだ。

そして、ついに一夏は攻めに転じる。

「決めるぞ、「白式」ツツ!!」

その掛け声に呼応するように、「白式」のジェネレーターが莫大なエネルギーを吐き出す。

スラスターの出力も跳ね上がり、セシリアに向けて一気に肉薄するが、それだけではない。

一夏が、「白式」が有するただ一つ、唯一にして最強の得物へとエネルギーが収束していく。

その刹那、雪片二型の刀身が割れ、生じた隙間から紫電を纏うエネルギーが溢れ出し、発動したのは対IS用決戦兵装、零落白夜だ。

一夏は零落白夜を発動させた雪片二型を振り回し、己に向かって殺到する攻撃を全て消滅させる。

「そんな、零落白夜ですって!?!」

「ブルー・ティアーズ」のハイパーセンサーが捉えた情報は、セシリアを驚愕させるに十分なものだった。

「まずいつ……!?!」

「逃すかよー!」

ISを扱う者ならば知らぬ者はいないその名前。

嘗てブリュンヒルデが振るい、立ち塞がる敵をその一太刀で切り捨

てて来た最強の代名詞、その一つ。

織斑一夏は織斑千冬の弟である、故に一夏がそれを使う事自体はなにも不思議はない。

だが、搭載されているコアによってその特性や性格がまるで異なるISにおいて、姉が使用していたISと同じ技を繰り出してこようなど、セシリアは微塵も思っていなかった。

「こうなればー!」

「今更本気かよ! 最初っからそうしてろってんだ!」

セシリアはなりふり構ってられないと言わんばかりに、棗の時と同様に狙撃を中止しスターライトMk-IIIをショットガンに変形させ、制圧射撃を開始する。

ビットのパターンも当初の静止動作が無くなり、荒くも熾烈な攻撃に変化した。

「ここ、まで、はア、織り込み、済み、だつてエの!」

本気となったセシリアが繰り出す4機のビットに加えてクレイドルから発射されるAISミサイル、スターライトMk-IIIによる拡散レーザーの雨。

それらを一夏はフィールドを縦横無尽に駆け抜け、迎撃と回避を繰り返す。

零落白夜を発動した事により、シールドエネルギーは被弾せずとも減っていく、その上に回避迎撃が間に合わなかった攻撃が当たり、更にシールドエネルギーの減少は加速する。

「くうツツ……!」

「クルクル避けるだけなら、お人形さんにも出来ましてよ!」

ただ愚直に、一見すれば滅茶苦茶に、一夏は回避と迎撃を繰り返す。

その行動は自殺行為に見えるが、それは違った。

「(見極める……最高の瞬間で、最高の間合いで、最高の一撃を叩き込み、一気に全部叩き斬るんだ!)」

一夏は棗のアドバイスを思い出す。

常に最悪の状況を想定し、常に最強の己を想像する。

勝利を掴みとるのに必要なものは何かを考え、それを現実とすべく

イメージし、行動する。

その先に、勝利の未来がある。

「こ、こ、だアツツ……!!!」

「しまアツ!」

フィールドを周回する様に回避機動を取っていた一夏は、突如としてセシリアに突撃する。

この時セシリアは直感した、ッやってしまったッと。

「ぜエやア……!!!」

「一振りで……全てを……!」

一夏が突撃を仕掛けたタイミングとは、ビットが全て一太刀で斬り伏せられる瞬間だ。

セシリアは近接戦闘型の一夏に対し、ビットを己より前に配置する事で攻撃と防御を兼ねる盾として運用していた。

一夏は逆にそれを利用し、ビットの配置がある程度円形であり、尚且つその半径が雪片二型の刃渡り以内に収まる瞬間、或いは突撃した際の直線上に並ぶタイミングを待っていたのだ。

「うおおおおおおお!!!」

「インターセプター……!!!」

拡散弾用に短くなつたとはいえ、それでも小さめの大砲の様なスターライトMk-IIIの銃身が零落白夜を発動した雪片二型に切り裂かれ、量子へと還っていく中、セシリアが叫んだのは申し訳程度に搭載していた近接兵装である大型ナイフであった。

セシリアはこの刹那、名前を言わなければ呼び出せない程度にしか使ったことがなかった己を呪いつつ、一夏へ向けてナイフを振り抜く。

——キーン、そんな音が響きいた。

「[白式]は袈裟に振り降ろした雪片二型を構えたまま、[ブルー・テイアーズ]はインターセプターを前方へ突き出したまま、お互いに得物を振り抜いたまま、佇んだ。

そして次の瞬間、ISのシールドエネルギーが尽き、具現維持限界リミットダウンを迎える——両者同時に。

『ご、これは……両者同時、相打ち、でしょうか？』

『……いえ、0.46秒差です！0.46秒差で、「白式」のシールド
エネルギー残量0！

勝者、セシリア・オルコット！』

クラス対抗戦編

第5話『Enter the Dragon (燃えよドラゴン) 1』

「あれだけ大見得切っておいてこの様か、馬鹿者め」

「……はい」

試合が終わり、俺はピットで正座させられていた。

ピットの床は滑り止めのためかゴツゴツしており、その上ISSスーツのままなので膝がすごく痛い。

とても、痛い。

……本音を言うなら、あそこまで奮闘できた事を褒めてほしいものだが。

「先ずはお疲れ様です、といったところですか

織斑先生はこう言っはいますが、セシリア相手にアレだけやれたのですから、まあ良いでしょう、頑張りましたね」

「おお……ありがとう棗……！」

天使だ、眼前に天使が舞い降りた。

結果的には負けてしまったが、うん、やはり俺は頑張った、よく踏ん張ったと思うのだ。

だから正座は勘弁してくれ、頼む。

「日野、こいつは甘やかすとロクな事にならんぞ」

「ええ、ですのでこの先はお小言を少々」

「……はい」

舞い降りた天使は死に、悪魔がダブル顕現した。

このままでは正座がレベルアップして石抱きの刑にでも処されかねない。

畜生、世も末だ。

「二次移行を終えたばかりでよくまああそこまで戦えたとは思いますが、彼女が途中まで遊んでいたの、分かりますよね？」

本気モードで戦闘をしたならば、白式の硬さから考えると、耐えて

2分といったところですか」

「そ、そんなにか……？」

「私との戦いで手の内を晒している以上、出し惜しみをする必要もありませんからね

ミサイルの使用頻度、射撃の精度、リロードやその他諸々を加味しても遊んでましたね、アレは」

棗曰く、火器の種類、リロードタイム、連射速度を把握して戦略を立てるのは対射撃戦機における鉄則なのだそうだ。

リロードタイムに関しては高速切替ラピッドスイッチなる技術がある為あまりアテにならないらしいが、それでも知らないよりは断然お得との事である。

更に言うならば、相手の体裁きや射撃時の癖を把握し、銃口の向きを判断して相手の攻撃を回避する「見避け」とか、最小限の体捌きで回避する「ミリ避けグレイズ」なる技術もあるらしいが、そんな芸当ができるのはそうそういないのではなからうか。

「それと足回りが致命的です、イグニッション・ブースト 瞬時加速に代表される移動系技能が未熟故に致し方ない部分もあるとはいえ、一夏さんは移動する際に一瞬勢いを溜め込む癖があります

これは高速機動戦闘を旨とする対IS戦闘では致命打の切っ掛けになりかねません

それに、相手に判断の猶予を与えるだけでなく先読みをされることに繋がりますので、意識して直した方がよろしいかと……ですが、結果はどうあれ最後の瞬時加速による踏み込みからの一閃と、最後まで勝機を狙い、チャンスを見極めた根性は見事でした……「いいセンス“です”

指を突き出した独特なポージングで言い放った「いいセンス」という言葉……これは褒めていると受け取って良いのだろうか。

てゆうか、その精一杯のキメ顔みたいなのはなんなんだ。

「……ありがとう、ところでさ棗」

「はい、なんででしょう」

これは怒らせるかもしれない。

うん、てゆうか絶対に怒ると思うんだけど、わからないものは仕方ない。

「瞬時加速って、なんだ」

「……はい？」

この後、棗と箒による特訓メニューが増え、地獄を見る事になるのは余談である。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

セシリアは己を囲むファンを適当にあしらい、ISスーツの上からジャージを羽織ったまま自室へと足早に向かった。

普段では考えられない程、乱雑にジャージとISスーツを脱ぎ捨てるとシャワールームへ入る。

IS学園の設備は良く出来ていて、シャワーを捻った際にお湯かと思ったら水が出てきた、なんて事はない。

勢い良く噴射されたお湯が体を撫で、汗を流して行く。

「……」

だが、今のセシリアは水の方が良かったと思う。

冷たい水であったならば、勝利の余韻でもなく、敗北の悔しさでもない、心に渦巻くモヤモヤとした感情を打ち消してくれると思ったからだ。

「……勝ちは、しましたけど」

最後の攻撃でインターセプターが削り取った僅かなシールドエネルギー。

己の攻撃、そして何より零落白夜の使用によって、「白式」のエネルギーがギリギリまで減っていたからこそ、勝ち取れた勝利だ。

その差は0.46秒、コンマ1秒を争った果ての勝利、相手がブリュンヒルデの弟とはいえ、初心者に対して出して良い結果ではない、これは実質的には負けだ。

私は、織斑一夏に負けたのだ。

「強かった……」

織斑一夏は、今まで出会ってきた男性の誰よりも強かった。

ISが使えるからではない、彼が特別だからではない、ブリュンヒ

ルデの弟だからではない、あの強さは彼本人が心に秘める強さだと思う。

「……まったく、絶滅したのかと思いましたが」

他者に媚びず、己を貫く芯を持った男。

まだ16年ではあるが、その短い人生を振り返ってみても、片手で数えられる程度にしかいなかったタイプの人間。

母も気が強い人であったし、婿入りした手前もあつたのだろうが、母親の顔色を常に伺ってヘコヘコと頭を下げるばかりだった父親とは違う、アレが真の男なのだ。

「……そういえば、叔父様も」

数百人を巻き込んだ列車の横転事故により両親が死に、己の体や財産を狙う強盗紛いの俗物を掻い潜らなければという時、後見人として現れたロイ・キャンベルというアメリカ人の老紳士もそうだった。

遠い親戚だと言うその男は心から己を気遣い、何から何まで親身に世話をしてくれた。

最初はそうやって浸け入り、合法的に全てを手に入れるつもりだろうと疑っていた自分が恥ずかしい程に。

ISの適性試験を受けたのも、「ブルー・ティアーズ」の計画に参加できたのも、彼の進めと計らいがあつてこそその事である。

……無論、IS適正Aという己の才覚もあるだろうが。

最初こそ父の影響からか男など、と思っていたが、今ではロイ叔父様と呼ぶ程度には親しい間柄である。

それでも世にいる男、その大凡は軟弱で、芯など持たない、父の様な人間だと思っていたのだ。

だが、一週間前のあの日、出会ってしまった。

私が理想とする、強い心と瞳を持った男——織斑一夏と。

「織斑、一夏……」

その名前を口にしてみれば、カアツと心が熱くなるのが分かる。

瞳を閉じれば、織斑一夏が己に向かって絶対に勝つと宣言した時の目つきが、顔が、声が浮かぶ。

脳裏に焼き付いたそれが浮かんでは消えるその都度心臓の動悸が

早くなり、体が熱くなる。

これは降りかかるお湯の熱ではない、まるで体が沸騰しているかのようだ。

「ふふ、これではまるで……」

これでは、落とされかけたという棗の事を笑えない。

気をつけろと言われた側からーいや、出会ったその日には、既に惚れていたのかもしれない。

「……そう、これが、恋というものなのですね」

そう自覚するが早いか、心に渦巻いていたモヤは晴れ、代わりに欲望が渦巻いた。

織斑一夏の事をもっと知りたい。

織斑一夏ともっと触れあいたい。

織斑一夏の心、その奥底にあるものに触れてみたい。

織斑一夏の心を私で埋め尽くしてみたい。

織斑一夏を、独占したい。

そんな淡く儂く、陳腐な恋愛小説のような感情が己を埋め尽くす。

「……なるほど、恋は戦争、命短かし恋せよ乙女とは、言ったものですね」

きつと、ライバルは多い。

篠ノ之箒に日野棗、他にもいっぱいいるだろう。

もしかしたら、彼の実姉ですら恋敵かもしれない。

「私は一途でしつこくってよ、織斑一夏」

その独白は誰が聞くでもない。

だが、新しい決意を胸に固め、新たに生まれた恋心を宿したセシリアは、いつになく笑っていた。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

翌日、代表決定戦の話題で持ちきりとなっていた。

曰く、セシリア・オルコットが勝つのは当然である。

曰く、織斑一夏の奮闘は評価に値する。

曰く、セシリアお姉様に踏んでほしい。

曰く、負けて傷心の織斑一夏を慰めてあわよくば云々。

曰く――と、欲望に塗れた者もいるが、概ねセシリアと一夏の戦いを讃え、セシリアによるクラス統治がどうなるか、といったものであった。

クラス代表、と一言に言っても様々な役割が存在する。

催し物の際した他クラスとの調整や、クラス内の会議における纏め役としての仕事――要は学級委員長のようなものである。

だが、ことこのIS学園においては”そのクラスで一番強い奴”、といった物騒な意味合いが強い。

IS学園は傍目から見れば女の子がキャツキヤウフワイワイガヤガヤと賑やかに姦しく過ごしているようにしか見えないが、その本質はISという兵器の扱いを学ぶ軍学校であり、各国が最新型ISの試験を行う試験場であり、腹の探り合いもする非常にシリアスな場所である為、強さというステータスは非常に重要視されるのだ。

なので、そのクラスの代表であるという事は、そのクラスで最強である事の証左に他ならない。

「はい、それでは1――1代表は織斑一夏君に決定しました！あ、1繋がりでいい感じですね！」

よって、山田麻耶のその発言により1――1は朝から衝撃に包まれた。

「は？……え？」

「なに惚けたツラをしている、眠いのか織斑」

「いや、頭はスッキリしてるんですけど、意味がわからないです先生」

当然の疑問である。

昨日行われたクラス代表決定戦、それに自分は負け、セシリアは勝った。

そうすれば、必然的にセシリアがクラス代表の筈である。

なのに何故、自分がクラス代表になっているのか。

「えっと、それは――」

「それは、私が代表を辞退したからですわ！」

「セシリアさんが――あれ？」

山田先生の声を遮り、立ち上がったって声をあげたのは案の定セシリア

である。

毎度思うのだが、あの“優雅でカッコいい貴族のポーズ”みたいなのは素でやっているのだろうか。

「ふふん、僅差とはいえ勝負は私の勝ちでした

ですがそれは私の油断が招いた事……お分かりでしょうが最初から全力であれば数分と持たなかったでしょうね」

「ぐう」

確かな事実であるだけにぐうの音も出ない、ぐうって言ったけど。

しかしあの時、途中まで遊んでさえないなければ圧倒され、完敗していたのは明らかなので反論する余地などない。

「ですが、私も初日での一件やその他諸々の大人気ない発言を反省してしまして……その謝罪も含めて、クラス代表の座を“一夏さん”へ譲ることにしましたの

クラス代表ともなれば戦いの場には事欠きませんし、経験も積みましょう」

なんとありがた迷惑な気遣いだろう。

経験が積めるのは良い事だが、それにクラス代表の責務がオマケで付いてくるのは個人的にいただけない。

元より勝つつもりではいたが、アレはセシリアとの個人的な喧嘩でもあり、正直クラス代表とかどうでもよかったーとは口が裂けても言えないのだが。

……ん？セシリアの奴、俺のこと名前で呼んだか？

「それに、私のように優雅でエレガント、華麗にしてパーフェクトな人間が一夏さんにISの手解きをしてさしあげればクラス代表はおろか学園一ですらもー」その必要はない！「ーなんですって？」

その時、バンと大きな音と共に誰かが立ち上がった。

音の方向に目を向けると、立っていたのは箒だ。

「生憎だが、一夏へISの手解きをするのは私と決まっている。

なにせ、一夏から直接頼まれたのだからな！」

「……私の事もお忘れなく」

箒はいつも以上に殺気立っている。

棗も座ったまま、いつものニコニコ笑顔であるがなんだか目が笑ってない。

「あら、適正ランクCの篠ノ之箒さんに、整備不良とかいう不手際をやらかして棄権した適正Bランクの日野棗さんではないですか、ランクAの私に何かご用で？」

「ら、ランクは関係ないだろう！」

「それにこれは一夏がどうしても頼んできたからだ！」

頼んでねえ、というのは禁句なのだろうか。

てゆうか……

「箒ってランクCなのか……？」

「だからランクは関係ないだろう！」

これも地雷だったのか、怒鳴られてしまった。

因みに俺はランクBであるらしいが、これは訓練用の「打鉄」で出したランクな上に「白式」ではまだ計測をしていない為、あまりあてにはならない。

そもそも、このランクはあくまでも目安程度にしかならないから意味はないと授業で言っていた気がする。

「ふふふ、そうですねー、その整備不良をやらかした&ランクが下の私に負けたのはどこの誰でー」「いい加減にしないか馬鹿者共」――

「「あいたあー」」

その言い争いも痺れを切らした千冬姉が指で百円玉を飛ばし、それぞれの額にぶつけた事で幕を下ろした。

どうなってるんだ、どう考えても百円玉が当たった音じゃなかったぞアレ。

「返せ」

「「……はい」」

千冬姉は三人から百円玉を回収して懐にしまうと、何をどうしたらあんな風にコインを飛ばせるのか不思議で仕方がないといった風の生徒に向かって言った。

「お前らのランクなどゴミだ、どいつもこいつも平等にヒョッコだ、故に等しく価値などない

私は差別が嫌いだから、今この段階で腕の差がどうであろうと差別しないし見下さん

私はお前達が自分の尻を拭けるようになるその時まで、じつくりと念入りに指導してやる、喜べ」

わーい嬉しくない。

なんだ、今の千冬姉にはハートマン軍曹の霊でも降りているのかアレは。

てゆうかそりゃ千冬姉からしたらランクなんてあつてないようなもんだろうよ、Sランクだもんな。

「くだらん諍いは十代の特権だが、生憎今は私が管轄する時間だ、自重しろ三馬鹿共め」

「「はい……」」

「脱線したが、織斑一夏がクラス代表で異論はないな？ある者は発言を許可する」

ないでーす……。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

時は過ぎ四月下旬、春とは言えども未だ肌寒さが残る時期である。

夜ともなればそれは顕著で頬を撫でる風は冷たい、IS学園が東京湾上に建造されたメガフロートである故に、海風が吹き付けているのもあるのだろう。

「フッーハアッー！」

そんな中、虚空に浮かべた仮想敵に拳を撃ち、蹴りを放つ。

ウインドブレイカーのフードを被り、走りながらシャドーをする様は宛らスタローンで、イヤホンから流している音楽も例の曲である。

「せいッ……てヤアッー！」

思い浮かべるのは嘗て己を負かした男——”雷電”と名乗るサイボーグ兵士。

たった一刀の元に、ISの装甲はおろかスキンバリアーさえも切り捨てた一閃は今でも脳裏に焼き付いている。

認識の相違によるものであるとはいえ、命の取り合いをしたあの時間は濃厚だった。

あの戦いは、私が有していた今までの認識をすり潰した良い契機だったと思う。

兵器の性能差は大局を左右するものではない、戦場に立つ兵士の、パイロットの、指揮官のセンスが全てを左右するのだと認識を改めた。

そんな風に昔を思い出していると、スマートフォンに繋がたイヤホンから1時間が経過した事を告げられ、徐々に速度を落とす。

暫く歩いて呼吸を整え、整理体操をしていると、1人の少女と目が合った。

「あの」

「なにか?」

「今日初めてここに着たんですけど、総合受付ってどこか分かりますか?」

明るめの茶髪をツインテールにし、肩と腋が露出する独特な改造制服を纏う少女。

身長はセシリアさんより少し小さい程度だろう。

それと日本語を話しているが、僅かながらに中国訛りを感じる辺り中国人であろうか。

「這更容易談論? (こっちの方が話しやすいですか?)」

「我在日語很好 (日本語で大丈夫ですよ) ……驚いた、上手ね」

「仕事柄マルチリンガルなもので、最近だとトライくらいまでは珍しくないですけど」

ここ最近ではモノリンガルのバーゲンセールであった日本も、IS学園設立の影響からか外国人の流入が増えて急速にグローバル化が進み、バイリンガルは当たり前、トライリンガルも珍しくない。

どんな馬鹿でも簡単な英会話は出来る程度に教育が進んでおり、アイムノットスピークイングリッシュはもう通じないのである。

IS学園では生徒の殆どは日本人であるが、セシリアさんのように外国人がいけないわけではない、寧ろそこいらの大学よりも多いのでクラスによつては英語の方が多く使われているくらいだ。

「そうね、私も日本語と英語は喋れるわ」

「僅かに広東訛りがあつたので分かりましたが、普通なら気がつかないくらいに上手でしたよ」

「昔は日本に住んでたのよ、ワケあつて帰国してただけけど、最近ちよつと気になることがあつて、無理言つて入学しちゃった」

王大人には今度お礼をしないとね……あ、王大人つてのは私の恩師ね」

王大人……王尚真ワン・シヨウシンか、確か元中共の幹部で現在は国家代表候補生選抜チームの役員だったはず。

そんな人物に無理が言える立場……相当親しい？

しかしそんな人物ならば多少なりとも名前を聞くはず……だとすれば秘蔵っ子か、最近まで陽の目を見なかつたか、はたまた……いや、待てよ。

「……気になることつて織斑一夏つて男性の方だったりします？」

「なに、あなたエスパー？その通りよ！」

王大人との関係性はさておき、嫌な予感がしたので聞いてみたが予感的中である、正直言つて頭を抱えた。

昔は日本にいたというし、気になるつてだけで中共の幹部に話を押し通すだけの根性……間違いない、これは厄ネタだ。

「どうしたの？」

「……いえ、なんでもありませんよ、ええ、なんでもないので」

「……？まあいいけど、それよりアイツ、一夏とさつきすれ違つたんだけど私の知らない女とよろしくやってたわ、なんか知らない？」

頭痛がしてきた。

なんだ、なんなんだ、一夏さんは女を泣かせる星の元にでも産まれているのか、どれだけ女性関係で厄ネタを持ち込めば気が済むのだ。

最近では箒さんとセシリアさんが睨み合つてばかりで、その間に挟まれて胃を痛めているというのに、またそこに女を連れ込むのかあの男は。

「この時間ならISの訓練ですかね、箒さんという幼馴染の方が面倒を見ています」

正直なところ彼、ヘツポコですので」

「なるほど……って、幼馴染？……あー、私が引越してくる前の話かしらね」

どうやらこの子は一夏さんの幼馴染ーその2号であるらしい。箒さんがIS発表後の要人保護プログラムで引越しを余儀なくされた後、入れ替わるようにやってきたようである、セカンド幼馴染とでも言うべきか。

まあ良い、一夏さんの女性関係は百歩譲って良いとする。

今はそんなことよりもやるべき事があるのだ。

「それより挨拶が遅れましたね、1年1組、日野棗と申します

日本の国家代表候補生です」

「ああ、そういえばそうね……私は凰鈴音、中国の国家代表候補生よ、予定だと2組に編入するわ」

「では隣ですね、国家代表候補生同士、今後ともよろしくお願いします」

「敬語なのは素なの？」

「性分です」

「そ、ならいいわ……あ、そうだ

口ぶりから察するに一夏の事は知ってるんでしょ、あいつ何組？」

「私と同じ1組ですね」

「クラス代表になったって聞いたんだけど、本当？」

「はい、英国の国家代表候補生と決闘まがいの試合をした結果……まあ紆余曲折あってクラス代表になっています」

「……2組の代表つてもう決まってるの？」

「ウチのように荒れたとは聞いていませんし、おそらく決まっているのではないのでしょうか……ところで、なにが目的です？」

鈴音の目つき、それが意味するものを私は知っている。

これは獲物を狙い定めた猛獣の目つきだ。

「うん、私情マシマシなのは十分承知んですけど、ちよつと一発キメてやらないと気が済まなくて」

「……罪人ですね、一夏さんは」

本当に、あの人は産まれてくる国を間違えているのではなからう

か。

いや、仮に一夫多妻制が認められている国であつても敵を作りすぎて後ろから刺されそうである。

その内、箒さん辺りが一夫多妻去勢剣とか繰り出しそうだ。

そんな彼と彼女達の未来を案じつつ雑談に花を咲かせていると、目的地である総合受付へ辿り着く。

「それじゃ、私はここで手続きがあるから」

「はい、ではまた明日お会いしましょう」

また一波乱ありそうだなあと明日の平穩に危機を感じつつ、自室へと戻るべく歩みを進める。

そして、口は災いの元という言葉があるように、この時感じた事を口にさえしなければ、もう少し私の学園生活は平穩だったかもしれない。

「二度あることは三度ある、か……まさかこれ以上増えるなんてことは……ないですよね」

そしてこれは杞憂で終わることなどなく、一夏を取り巻く女事情が何事もなく済んだことなどありはしないのだと、この時の私は予想だにしなかったのである。

第6話 『Enter the Dragon 2』

「転校生ですって? 1-1-1に?」

「いえ、2組ですよ、中国の国家代表候補生、鳳鈴音だそうで」

翌日、行きがけで出会ったセシリアさんと共に教室へ向かう中、先日の鳳鈴音の事を話してみる。

ことIS関連では情報収集に余念がない彼女ならば、本社が知り得る以上の事を何か知っているのでは、と思ったからだ。

「鳳鈴音……聞きませんわね」

「あなたなら何か知っているかと思いましたが、やはり知りませんでしたか……まあ、仕方がないですかね、昨年までは国家代表候補生リストにもいなかったそうですから」

「……たった一年で勝ち上がってきたと?」

本社に問い合わせしてみた所、鳳鈴音のIS適性はAランク、どういった経緯かは知らないが昨年になってから国家代表候補生選抜チームへ入団、流石は中国だけあつて数千人規模で存在するチームメイトを怒涛の勢いで勝ち抜き、「甲龍」と言う名の専用機を入手するに至っているようだ。

そして王大人こと王尚真と頻繁に行動を共にしているのが確認されており、やはりお気に入りであるらしい。

「それにしても、そんな事をなぜ?」

「昨日のトレーニング中、受付の場所が分からず迷子になってるのを発見したものですから」

「これはまた、なんとも間抜けな代表候補生もいたものですわね」

「この広さです、多少迷うのも無理はないですよ」

経歴から察するに努力型の天才とでも言うべきか、もしかしたらセシリアさんと気が合うかもしれな——

「……いや、万に一つあれば良さそうですね」

「何がです?」

「何でもありません、こちらの話です」

箒さんとセシリアさんとは一夏さんを取り合うな仲になるであろ

う事は、昨日の発言から想像に難くない。

箒さんとセシリアさんに加えて凰鈴音までも加わると本気でハーレムの様相を呈してくるのだから恐ろしい。

……まあ、仮に勝ち上がったとしても世界最強の女が一夏はやらんとか父親みたいなこと言い出して立ちほだかるのも容易に予想できるのだが。

「しかし2組のクラス代表も気の毒ですわね」

「2組に国家代表候補生はいませんでしたからね、凰鈴音も奪う気満々でしたし」

基本的に国家代表候補生は1クラスに一人、二人いれば多い方だ。

国家代表候補生は各国軍のエリートが指導にあたる場合が殆どである為、IS技術を競い合うイベントが多数あるが故、クラスが保有する戦力に偏りができないようにする為の措置だと聞いている。

本来ならば私としてその例外ではないのだが、私の場合は日本政府と強い繋がりがあるIATだからこそその1組編入と言えるだろう。

要は”日野棗を1組に編入しないと大変なことになるぞ”、と脅したわけである。

自国の企業とはいえ、防衛省はメタルギアに関わる戦力供給、その殆どをIATに依存している為に倉持工業、徳川重工に並ぶお得意様なのだ。

機甲特科は2019年に陸上自衛隊が対IS防衛戦略に基づいてメタルギアREX MkII 19式二足歩行戦車と20式水陸両用二足歩行戦車を大量導入するにあたって防衛戦略の見直しが必要となり、その結果機甲科と特科部隊の一部が併合され生まれた兵科だ。

19式と20式が搭載可能な武器は多岐に渡り、二足歩行故に舗装路は勿論のこと悪路の走破性能やパイロードも潤沢とあって、多方面から色々騒がれていた記憶がある。

そんな雑談をしている内に教室へ辿り着く。

HR前である教室の中はクラスメイトがガールズトークに花を咲かせているが、その話題の中心はやはりクラス対抗戦だ。

「頑張ってね織斑君！」

「主に私たちのスイーツの為に！」

本格的なIS訓練が始まる前の実力指標構築を主とし、副としてクラスの団結を深めるとかなんとか、そんな感じのフワフワしたイベントである。

ただ、優勝商品として食堂のデザートフリーパス半年分がクラス全員に対し配布される為、このように意地でも勝ってもらってデザート代を浮かそうと躍起になるのだ。

「……まあ、当事者以外はこんなもんですよねえ」

「ですわね」

一夏さんの周囲を取り囲む女子はクラスの殆どである。

箒さんとごく一部の生徒を除いてデザートに目が眩みすぎだ。

「こうゆうのは気合いだよ！気合いがあればなんとかなるよ！」

「お、おう」

「まったく、男がそんな気の抜けた返事をするんじゃない

弱気になるな、絶対に勝ちに行け」

「そうだよ、専用機持ちはウチ以外だと4組だけだし楽勝だつて！」

一夏さんがそんな気の抜けた返事をし、箒さんに叱られている時、聞き覚えのある声が教室に響いた。

「ーその情報、古いわよ」

「え？」

教室の入り口に立ち、腕を組んで壁にもたれかかっていたのは、やはり凰鈴音だった。

……もしかしてカッコつけてるのだろうか、あのポーズは。

「2組も専用機持ちが代表になったの、そう簡単には勝たせてあげないんだから」

「お、お前、鈴か？」

「久しぶりね一夏、中国の国家代表候補生として、2組のクラス代表として、今日は宣戦布告に来たってワケよ」

フツと小さく微笑むと、トレードマークであろうツインテールが揺れる。

昨日から思っていた事だが、その背格好で威張っても子供が意地を

張っているようにしか見えない。

もう少しタツパがあれば様になっただらうに。

「なにカツコつけてんだ？メチャクチャ似合っていないぞ」

「んなつ……!?な、なんてこと言うのよアンタは！」

この空気の読まなさ、流石であると言わざるを得ない。

誰しもが思ってたけど言わなかったことを平然と言ったのける鋼のメンタル、ある種の尊敬にすら値する。

「一夏さん、少しは空気読みましょう？」

「え、読むところあったか？」

「……まあこのニブチンは置いといて、昨日ぶりですね」

「あ、昨日はありがとね」

「いえ、お気になさらず……それよりも」

「へ？」

うしろうしろ、と指を指す。

これまた可愛い声を受け、後方を振り返った先には――

「通路を塞ぐな馬鹿者、もうHRの時間だ、自分のクラスへ戻れ」

「ち、千冬さ」

「織斑先生と呼べ、それと聞こえなかったのか？通路を塞ぐな、そして自分のクラスへ戻れ」

「……はい」

シヨンボリのグローバルスタンダードがあるとするれば、これがお手本だと言わんばかりの雰囲気醸し出す彼女は、山田先生とは別べくトルで小動物っぽさがある。

「……高校デビュー失敗ってヤツですかね」

「あんなデビューは御免ですわね……てゆうか一夏さん、あの小娘は誰ですか？少々お話を伺いたく」

「そうが一夏、ヤケに親しそうだったがアレは――」

「知るか、お前らもさっさと席に着け、叩かれないのか？」

「席に着きますー！」

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

「――であるからして、ISの――」

「(先程の女子は何者なのだ……一夏と随分親しげだったが)」

篠ノ之箒は授業に集中できずにいた、先の転校生——鳳鈴音と一夏の関係が頭から離れないのだ。

「——昨今の世界情勢からしても——」

「(アレはまるで幼馴染か旧友のソレだ、幼馴染と言えば私の他にないアドバンテージだと思っていたが)」

あの気安さ、振る舞い、全てが己と一夏の関係には無いものだった。箒は確信した、鳳鈴音と名乗った中国の国家代表候補生、奴は私の恋敵であると。

「——メタルギアとISは——」

「(ならば打つべきは先手必勝、相手より先んじる他にない)」

しかしだ、よく考えてみれば鳳鈴音がどうであろうとなんだろうと大した問題ではない、重要なポイントはそこではない。

私には奴にもセシリアにも無い極大のアドバンテージがある。

そう、私と一夏は同じクラスな事に加えて同室なのだ。

二人きりの時間など幾らでも作れる、そうなればあんな事もこんな事も可能なのだ。

「(まったくしようがない奴だ、またISの事を教えてやるとしよう)」
フン、と鼻を鳴らして上機嫌に腕を組む。

そうだ、己が有するアドバンテージは不動にして盤石である。

ならば何を心配する事があるのか、そうだ、今夜にでも——

「——之、篠ノ之、聞いているか？」

「えっ、あつ、はい！」

「そうか、ならばISとメタルギアの関係性を答えろ、国際的な、第三者的な視線でな」

「……すみません、呆けていました」

「フンッ！」

「いだあっ!?!」



「——なお、これについては明日——」

「(まったく! なんなんですのさっきの女子は!)」

セシリアは焦れていた。

その影響か、ノートに走らせるシャープペンシルが綴るものは昨日までの育ちの良さが伺える綺麗な筆記体の英語はなく、ロシア語のカルテもかくやなミミズ文字であり、とても英語とは思えなかった。

「ーして、こういった場面ではー」

「(国家代表候補生が来るのは良い、競い合う相手が増えるのはやり甲斐がある、でもこと今回に限っては最悪ですわ!)」

ヤケに一夏と親しげだった中国の国家代表候補生、鳳鈴音。

現時点でさえ箒と棗というライバルがいるというのに、一昔前のソ連が如く”ISパイロットは畑から取れる”を地で行く事に定評がある中国のISパイロット選抜デッドレースをたった一年で勝ち抜いたエリート、そんなオバケみたいな奴が一夏争奪戦に加わるなど冗談ではなかった。

「(国家代表候補生である華々しい経歴は、大きなリードポイントであった筈なのに……!)」

己は恋愛事に疎いどころかポンコツである自信がある。

そんなところで自信を持ってどうするのかという話であるが、事実なのだから仕方がない。

両親が他界してからというものの、色恋沙汰にかまかける暇など無かったし、そもそも理想の男など一夏が現れるまで見たこともなかったのだ。

篠ノ之博士の妹とはいえ、箒が有するリードポイントは同室である事と幼馴染である事のみ。

ならば真の敵は同じ国家代表候補生である棗であり、彼女さえなんとかすればこの恋路は価値も同然であると思っていた。

しかし、その牙城は今朝崩れてしまったのである。

「(こんな時こそ思い出すのです、師匠に教わった”射撃さしすせそ”を!先んじて撃て、しこたま撃て、すかさず撃て、背中から撃て、そして引導を渡してやれ……これですわ!)」

国家代表候補生になったばかりの頃、私に射撃のなんたるかを教えてくれた謎のアジア人女性。

彼女の腕は凄まじく、トレードマークのポニーテールがリコイルで揺れるその都度、敵が1人また1人と倒れていくのである。

本業は大火力砲撃による殲滅らしいが、その延長線として存在する通常の射撃もお手の物で、ワンショット・ワンキルを確実に実践する様には美しさすら感じられた。

今でこそ引退してしまったが、そんな唯一師匠と仰ぐ人物の言葉、それを実践すべき時だと確信した。

「ーつまり、イニシアチブを取れば良いのですね師匠！」

「私の授業中に他の考え事とは良い度胸だな、死ね」

「あいたあ！」

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

時は変わって昼休み。

件の転校生について質問責めにされている一夏と共に食堂へ行く。

流星は天下のIS学園とだけあって、学校の学食とは思えないほどのレパートリーと品質である。

メニュー表は壁を覆い尽くしており、そこらの定食屋よりも多いのではなからうか。

その癖に値段は学食らしいリーズナブルな値段なのだからありがたい。

……特に、前回のトトカルチョで今月の食費を溶かした私としても、ありがたい。

「今日は……オードックスにカレーにしましょうか」

「棗はメニューに拘りとかないのか？毎日変えるけど」

「食に関する拘りは人並みだと思いますが、これだけメニューがあるので、折角ですから毎日違うものを食べてみようかと」

「へえ、筈なんか毎日きつねうどんだし、セシリアも洋食ランチなのにな」

「別にいいだろう、私はきつねうどんが好きなのだ」

「私は単に選ぶのが面倒ですので……あと、日替わりを頼んで苦手なものが出てきても困りますし」

武士は食わねど高楊枝な上、食えればなんでもいいとか思っそう

な箒さんに関しては何も角、リアル貴族出身のセシリアさんは好き嫌いが多そうだと勝手に思っているのだが、実際のところどうなのだろうか。

「遅いわよ一夏！」

そんなことを思いつつ、席に向かっていると何かと噂の転校生、凰鈴音が現れる。

やはりというか、お互いに名前やらあだ名で呼び合う程度には仲が良いらしい。

……その片方は感情の趣が違うようだが。

「……もしかして待ってたのか」

「なによ！悪い？」

「いや、ラーメンのびてんぞ」

「……!!」

もしかしてアホの子とかそういういった属性に分類される人なのだろうか、一夏さんの言葉通り凰鈴音が持つトレーに鎮座するラーメンは、汁を吸って些かのびているように見えた。

「まあいいや、なんなら一緒に食おうぜ」

「そ、そうね！そこまで言うなら付き合ってもいいわ！」

セシリアさんとはまた違ったベクトルの上から目線で告げる凰鈴音は先程までの不機嫌っぷりはどこへやら、一転して上機嫌になる。

「……」

その一方で、やはり箒さんとセシリアさんは徐々に機嫌が悪くなつて行く。

眼前で恋敵が狙っている男と仲良くしていればまあ、そりゃあ機嫌も悪くなるか。

しかし、その男こそ天下の朴念仁もとい朴念神こと我らが織斑一夏であるからして、彼女たちの殺意など察するまでもなく華麗にスルーしてしまうのであった。

「そっぴや丸一年ぶりになるのか、元気だったか？」

「元気じゃないように見える？無病息災ってヤツよ」

「おばさん元気か？てゆうか代表候補生になつてたなんて知らなかつ

た、いつなつたんだ？」

「日本に行くつて報告した時に泣かれたこと以外は元気よ、そんな事よりアンタこそなにやってんのよ、ニュースで見た時ビックリしたじゃない」

「そんなことより！！いい加減貴女と一夏さんがどういった関係なのかお話願いたいのですけど？」

「そ、そうだぞ一夏！まさか付き合ってるのか!？」

「付き合ってるのかどうかについては兎も角、そこは私も気になりませんね」

遂にしびれを切らしたのか、セシリアさんと箒さんは棘のある口調で凰鈴音を問い詰める。

会話からして幼馴染で、それなりに仲良しという事は分かるが、それ以上は分からない。

だが、そんな雰囲気も意に介さず凰鈴音は顔を赤らめ、頬を覆ってクネクネと気持ち悪い動きを始めた。

「べ、べべべ、別にあたしは一夏と付き合ってるワケじゃ」

「そうだぞ、俺は別に鈴と付き合ってるわけじゃない、ただの幼馴染ー」

「フンツ!!」

「あだあ!？」

ドカツと打撃音が聞こえた後、一夏さんが机の下で足を抑え、ぬごおおと呻いている。

どうやら向かいの席に座る凰鈴音が蹴ったらしい。

「……幼馴染だど？」

「うごおお……あ、ああ、鈴は小5からの幼馴染だよ」

ほら、箒って小4の時に引越しただろ？それと入れ替わる形で出会ったんだ、そんで中2の時に家の都合で引越したから、ちょうど一年ぶりくらいなんだ……ああ、そっか、するとアレだ、お互いに面識ないのか」

今更かよ、というツツコミはしないでおく事にした。

「……箒ノ之箒だ、私の方が先に一夏の幼馴染だった、そこを間違える

なよ」

「凰鈴音よ……幼馴染に年季とか後とか先とか関係ないわ、重要なのはその密度よ」

「では、私も……セシリア・オルコット、英国の国家代表候補生ですわ、一夏さんとはそれはもう濃密な時間を」

「フン、一時間弱戦ったり口喧嘩してただけだろうに」

「なんですってー」

「ー改めてまして、日野棗です」

日本の国家代表候補生兼、IAT社専属テストパイロットです

それと、一夏さんと同様に鈴さんとお呼びしても？」

「ー丁寧にも……じゃあ、あたしも棗って呼ぶわ

棗は他の2人とは印象違うわね、仲良くできそう」

いつも通り剣呑な空気になってきたので言葉を断ち切るようにして自己紹介をする。

2人には、ここで喧嘩すんじゃないわねえ、と言外に言ってみたが、取り敢えず黙ったので意思はちゃんと伝わったようだ。

「そういえばアンタ、クラス代表なんだって？」

「ああ、まあ、成り行きでな」

器を抱え、だいぶ男前にスープを飲み干した鈴さんはそう聞くと、一瞬間を置いて意を決したように口を開いた。

「……まあ、なんてゆうの？お、幼馴染のよしみで、ISの操縦を見てあげても、い、いいんだけど？」

顔を逸らし、俯き加減に視線のみを向けた言葉はだいぶ歯切れが悪い。

それが相当な勇気を振り絞った言葉であるのは明白だった。

「マジか、そりゃありがたー」

「聞き捨てならんぞオ！」

「聞き捨てなりませんわア！」

「うわぁ……」

だが、その言葉の根本にある意味を察したのは一夏さんではなく、私を含めた3人だけである。

そして、2人の怒気すら孕んだ言葉は続けざまに紡がれる。

「一夏にISの操縦を教えるのは私の役目だ！百歩譲っても私と棗の役目だ！」

「そもそも貴女は2組でしょう！敵の施しは受けませんわ！」

意見が一致してんだかしてないんだか、どちらかにして欲しいというのは欲張りだとして、鈴さんは第三者からしたあの言葉が持つ意味を分かっているのだろうか……分かってなさそうだな、3人とも見事に頭に血が上っていると見える。

恋は盲目と言うが、目の前でそれを証明する光景を目にするとは。

「棗さんも何か言ったらどうですか？」

「分かっていますって……鈴さん、クラス対抗戦の事はご存知ですよね？」

「うん、知ってるけど」

「ならば、鈴さんの立場からしても一夏さんに塩を送る真似は要らぬ反感を買うだけかと思えます……1組にしろ、2組にしろ、ね？」

何かと焦る気持ちは分かりますが、鈴さんとしても良いことばかりではないはずですよ

「……そうね、あたしも頭に血が上ってたみたい

今のところは引くわー今は、ね」

そうして、鈴さんはトレーを手に席を立つ。

その顔は妖しく微笑んでいて、その表情が意味するものが箒さんとセシリアさんへの挑発行為なのは明らかだった。

「退屈は無味無臭の猛毒……ですが退屈しないのも度を過ぎればまた毒となる、それもまた然り、ですか」

「何言ってるんだ？」

「フンツ!!」

「あだあ!？」

第7話『Mission impossible（スパイ大作戦）』

「今日はウチのスタッフ共々、よろしくお願いしますね」

「いえいえ！あのIAT社が作ったISの生整備を見れるっただけでも価値があるってもんですよ！どうぞこちらへ！」

ある日の放課後、私は本社より送られてきた専属スタッフを引き連れて整備課へと足を運んでいた。

セシリアさんとの戦闘により、戦闘不能とはいかずとも万全とはいえない状態である「ヴァイパー」を整備する為だ。

四月も下旬に差し掛かる時にやっているのは、本来ならば試合から5日後には完成する予定だった整備部品の完成と到着が大幅に遅れた結果だ。

詳しく言うならば、上層部はクラス代表しか出場しないクラス対抗戦を私も出れるものだど勘違いしていたようで、その勘違いが正された結果としてパーツの状態に万全を期す為に遅れたのだが。

「では、ISを整備ハンガーに置いてください

待機状態のまま台に置いてくれれば、あとは勝手に展開されますので」

指示に従い、台座の上に待機状態の「ヴァイパー」を置くと瞬く間にISのパーツがハンガーに展開される。

通常のISとはだいぶ異なる仕様のなので少し不安だったが、無事に収まって良かったと安堵する。

「わあ〜っつっ！」

「これがあのー！」

「この感情、まさしく愛ね！」

「……ではみなさん、よろしくお願いしますね」

「了解、それじゃあ仕事だ！かかれかかれ！」

そう言ってスタッフに指示を出したのは主任こと伊野部進だ、サイボーグ部品の多い「ヴァイパー」の整備に彼は欠かせないのと同時に、

私の様子見も兼ねて来日したらしい。

「それと棗君、君の整備もやるから」

そう言つて、ポンポンと肩を叩く仕草をする、仕事の合図だ。

「分かりました、お願いします」

「え!? ISのみならずIAT社製サイボーグも見せてくれると!?!」

私がサイボーグであるというのは既に周知の事実だ。

そりゃあれだけ盛り上がっていたセシリアさんとの戦いでネイキッドモードを晒したのだから当然なのだが。

「そいじゃ、いつも通りお願いね」

「はい、主任」

制服を脱ぎ、ISスーツを着込んだのみの体を晒す。

整備課の面々はそれを見て目を輝かせていた。

「これが最新軍事医学の結晶……写真集以外で見るの初めて!」

「なんて美しい曲面加工……ウツ」

「写真! 写真撮っていいですか!?!」

「だーめ♡」

「ああんイケズウ!」

「でも触るだけならいいよ」

「やったー!」

人の手足をオモチャにしないで欲しいのだが、今の私では文字通り手も足も出ないのでささやかな抵抗しかできない。

てゆうかサイボーグの写真集ってなんだ、需要なんて……ありそうだな、一部のマニアが大喜びしそうだ。

だが、この注目も必要なものだから我慢せねばならない。

スタッフが持ち込んだNCMS適合者専用の整備台にもたれかかると、主任が手早く端末を操作し、各所のメンテナンス用ハッチが開く。

ハッチの中にあるのは人工骨や人工筋肉を繋いでいる接合具である、それを外して引っ張れば私の手足が分離する仕組みだ。

普段は義肢をつけたままスキャンするだけなのだが、今回はパーツひとつひとつをじっくりメンテナンスする為に義肢を外すのである。

「はい、じゃあ外すよー……せーののツ！」
「うっ」

手足が無くなる感覚というものにはだいぶ慣れたつもりだが、気持ち悪いものは気持ち悪いので少し苦手な瞬間だ。

接合部の断面に取り付けられたカバーにプラグが次々に差し込まれ、その都度なんとも言えない感触が走る。

「んっ……すみません、もう少し優しくお願いします」

「相変わらず苦手だねえ、いい加減慣れたら？」

「なら主任もサイボーグになりましょうよ、メンテナンスやってあげますから」

「僕はサイボーグで食ってるけど、サイボーグになる気は無いんだよねえ……ほら、次は首と背中行くよ」

「はい」

……さて。

首の付け根から尾骶骨にかけて繋がれた幾つものケーブル、殆どはシステムチェック用のものだが、頸椎に繋がれたものは外見を偽装した有線LANケーブルだ。

ケーブルはメンテナンスに用いるパソコンから「ヴァイパー」のハンガーを経由して整備課のサーバーに接続されている。

目的はただ一つ、そこから「ブルー・ティアーズ」と「白式」、運が良ければ「甲龍」のデータをコピーする為だ。

この学園にやってきた目的の一つ、産業スパイ活動である。

現状、NG2計画が開発が進んでいるメタルギア・ネクスス三号機、「スフィアード・ルーラー」のコンセプトは「ブルー・ティアーズ」と酷似した複数の大型遠隔操作式の子機を利用したオールレンジ攻撃を主体とした機体であるからして、開発部が「ブルー・ティアーズ」の情報を喉から手が出る程欲しがっているからだ。

「白式」に関しては世界唯一の男性パイロットに与えられた機体、それが例えポンコツだろうとも、その中身次第ではIAT社製ISの性能を向上できるかもしれない。

更に言うならば、近接特化型ISである「白式」のデータを用いて「ヴァイパー」の強化を出来れば最上である。

「セシリアさんが整備課で装甲の換装やビットの諸設定を済ませたのは確認済み、「白式」だって少なくとも傷を負っているのだから、メンテナンスの為にここを使っている筈だ……ならば、整備履歴から情報を迎れる筈)」

「甲龍」に関しては殆どデータがないので興味本位、良ければ開発の参考にする程度であるが、中国の代表候補生に与えられる機体……ハイエンドモデルでない筈がない。

「(正直一か八かだけど、鈴さんが編入してから既に3日、訓練は欠かさずやっているようだし、一度はここで整備を受けているはず……たぶん、きつと、おそろく)」

確実なのはクラス対抗戦の後なのだが、なにぶん鈴さんが編入してきたのが急なだけあって、日程の調整が上手くいかなかったのだ。

そもそも編入自体が寝耳に水であり、上も大慌てな様である。

「(まあ無い物ねだりをしてもしようがないですし、盗れるものだけ盗っちゃうでしょう)」

「それじゃあシステムチェックから始めるから、”お願いね”」「はいはい、分かっていますよ」

拘束バンドが身体に巻き付けられ、義眼メンテナンス用機器に偽装された脳波コントロール可能なヘッドギアが取り付けられる。

それじゃあ、電腦空間へとダイブするでしょう。

「(整備課のメインサーバーへアクセス……やはりシステムがアクティブなだけあって日替わりのパスワード認証だけか、運がいい)」
本来ならば虹彩、声紋、指紋、パスワード、IDカードからなる五重認証が必要なサーバーへのアクセスはその殆どをスルー、順調な出だしだ。

日替わり且つ12桁もあるパスワードも、先程整備課スタッフからパスワードをメモした紙切れは拝借済みである。

決して盗んだわけではない、後で返すから借りただけだ。

「(整備履歴は……ビンゴ！)」

「ブルー・ティアーズ」と「白式」のデータ発見、「甲龍」はやっばりないか……セルフメンテの範疇でしか使っていないって事かな」

「ブルー・ティアーズ」は全体の装甲換装と予備ビットの登録とシステムチェック、「白式」は装甲修復と全体のシステムチェックをやっているようだ。

「(さてさて、丸裸にしちやいましょうねっと)」

調べてみたところ、「ブルー・ティアーズ」のビット、その核はフッ化重水素レーザー投射機であるようで、使用される莫大な電力はクレイドルに搭載された高密度水素吸着合金を用いた大容量バッテリー。フル充電したならば五時間の連続稼働が可能。

クレイドルに搭載されたA I S ミサイルは拡張領域から随時転送を行なって発射……概ね開発部の予想通りか。

スターライトもほぼ同様の構造だが、バッテリー稼働ではないぶん出力がダンチだ。

だが、可変銃身の変形機構に関してはどうやったらかんなヘンテコなものがある火力を発揮出来るのか不思議で仕方がない。

しかしまあ、英国が有するレーザー兵器技術のオンパレードである。

英国は当初アメリカとイスラエルに追随する形だったが今では独自の発展を遂げて二国を追い越し、売上高はレーザー兵器市場の3割を占める大御所。

最近では対大陸間弾道ミサイルや対I Sの防衛装置として衛星軌道上に大型レーザー砲台「エクスカリバー」を秘密裏に建造中であると本社情報部の人から聞いた事がある。

そして、当の「ブルー・ティアーズ」は設計だけ見るならばビットのテストベッド的な意味合いが強い機体である事が分かるが、どうやらセシリアが色々カスタマイズしているようで元の形とはだいぶかけ離れているのが分かる。

特にスターライトなんかは顕著で、元の設計だと砲身の変形による銃種の変更機能など存在せず、ただのフッ化重水素レーザー投射機だったのを魔改造したようだ。

ビット自体もだいぶ頭のおかしい設計だ……流石は英国、パンジャンドラムの頃から何も変わってない。

「なんとまあ、よくもこんなピーキーな機体をあそこまで使いこなせるものです……さて、次は「白式」ですね……って、うわあ!」

「白式」のデータを閲覧すると、絶句した。

ISの開発理論や設計に関する知識は、出来ないながらもある程度理解している。

だからこそ分かる、この機体のヤバさを。

「装甲素材は多重ナノハイブリット・ハニカム装甲……倉持なら耐貫通性スライド・レイヤー装甲か、衝撃吸収性サード・グリッド装甲辺りを採用してくるかと思ったけど全然違う……てゆうかなんだこれ……知らない……」

設計図やらを見るに、どうやら一度完成したものを何者かが手を加えている、というところまでは分かる。

だが、その加わった手がわけのわからない構造をしている。

装甲素材である多重ナノハイブリット・ハニカム装甲もそうだが、スペックが本当に第3世代機かと疑いたくなるレベルだ、なんかプログラムも気色悪い曼荼羅みたいになってるし。

あと雪片二型……これはもしかしなくても最近発表されたばかりの第四世代技術の展開装甲じゃないのかこれ……ならば「白式」は第4世代型? いや、展開装甲が使用されているのは雪片二型のみだし、3・5世代?

武器が一つしかないのも、唯一仕様特殊能力を第一形態から使つてるものだから拡張領域が埋まって量子変換出来ないからか。

てゆうか「暮桜」の唯一仕様特殊能力である零落白夜を「白式」が使えるのってまさか……いや、仮にそうだとしてもこんなのが作れる技術者って……あつ。

「(天災かあ……なんか納得しちやったなあ、考えるのが馬鹿みたいだ、やめよう)」

最後の最後で締まらないなあと思いつつ、システムに介入して閲覧履歴を削除し、私が侵入した痕跡を消す。

国家間、企業間の諜報活動が暗黙の了解と化しているIS学園とはいえ、流石に足がつけば処罰の対象となつてし、これがバレてセシリアさんや一夏さんとの関係を壊すのは公私共に悪手に他ならない。悪く思わないで欲しい、これも仕事だから仕方なくやった事なのだ。

うん、仕方がない。

「主任、首尾はどうです?」

「うん、今終わるところだよ」

仕事は済んだと合図を送り、メンテナンス兼情報収集を終える。

ヘッドギアが取り外され、チエックを終えた義肢が運ばれてくる。

汚れも落としてくれたのかピカピカだ、ありがたい……だが。

「さて棗君、いつもの事だが我慢してくれよ」

「……はい」

「一体なにが始まるんです?」

「うん、まあこの義肢が特別製だったのもそうだし、本来サイボーグは切除したり切断することはあつても取り外す事は考えていないからねえ」

「と、言いますと?」

「神経回路やバイパスを接続する時、痛いやら気持ち悪いやらで気分が最悪なんですよ、リバーシしかねない程に」

外す時もそれなりに気持ち悪いが、つける時は気持ち悪さに加えて痛み——それも激痛が伴うのだからもう最悪である。

一瞬とはいえ、フェイススケールで表すなら最上級である”

Hurts ^死as ^ぬmuch ^ほas ^どpossible ^痛” を迷いなく指差す程度には痛い。

因みに体の拘束具も、痛みで暴れてもメンテナンス台から落ちないようにする為の予防措置だ。

「え、ちよつとやめてくださいよ!」

「安心して下さい、トイレは済ませていますし、夕飯まだなんですよ」

「なんも安心できないんですけど!?! てゆうか上のみならず下からもな

の!?!」

「よーし行くよー息合わせろー」

「二「ウース」」

「待って! ビニール袋! あとなんか拭くものー!」

「二「せーののッ!」」

「痛うツツツ!!」

「あッー……あ、大丈夫だった」

「そりやそうですよ、今まで何回やってきたと思ってるんですか」

いちいち騒がれては堪らないと、30秒に一回神経接続を繰り返す訓練をやらされたのは良い思い出だ。

それのお陰でちよつと気持ち悪い&メチャクチャ痛いと思うだけで済むようになったのである、痛みによる反射ばかりはどうしようもないので拘束具はつけているが。

てゆうか、ウチのスタッフが袋もオムツも用意していない時点で察して欲しいものだが。

「まあ最初の頃は上も下も大洪水だったので大変でしたけどね、今では苦手なだけで慣れたもんです」

「ははは、あの頃は大変だったなあ」

「へ、へえ……」

軽くシャドーボクシングをし、接続された手足の感触を確かめ、普段と変わらない事を確認する。

長年世話になっているこの人達に限って無い話だが、万が一ということもあるからだ。

「何か問題はあるかな?」

「いえ、いつも通りの良い仕事で」

「そりや良かったーと、そうだ」

今後の事も考えて義肢に搭載した小道具は最小限に抑えたから、確認してくれ」

「了解です」

端末に表示された道具は……右手の各形ドライバ―やピン等の小道具、両手首の仕込みナイフ、左手の各形接続端子か、まあこんな所

だろう。

「確認しました、だいぶ減りましたね」

「流石にISの拡張領域を流用した機能はオミットしとかなないとメン
ドくさそうだったからねえ、本当なら行く前に取れば良かったんだ
けど……：てゆうか反応が紛らわしいからやめろって文句来たし」

だから実質腕に関しては丸ごと交換した形になる、元の腕はこつち本社
で保管しておくから」

一部の機能は流石に義肢の内部に収納出来なかったもので、ISコア
を經由して拡張領域にスペースを間借りしていたのだが、やはりマズ
かったようだ。

いざって時に便利だったんだけどなあ、膝のレーザーカッターと掌
のショットガン。

「仕方ないですよ、急な話でしたしーで、「ヴァイパー」の方はどう
ですか?」

「そうだねえ、RCSの出力と燃費向上、関節はメンテフリーとは行か
ずとも破壊されない限りは半永久的に交換不要、あと全体的にパワー
が上がってるから」

「具体的には?」

「REXが相手でも殴った場所がスクラップになるよ」

「そりゃ怖い」

それなら月光くらいなら片手でブン回せるなあとか思いながら制
服を着て、整備が完了した「ヴァイパー」を受け取る。

心なしか待機状態のネットワークレスも綺麗になっているようだ。

「それでは、私はこれで」

「うん、僕達は片付けがてらここの子達と遊んでくから」

「程々にしてくださいね、やり過ぎると怒られますよ」

そう言つて、整備課の面々とウチのスタッフに軽く挨拶をして整備
課練を後にする。

収集した情報はあちらで処理してくれる手筈になっているので、私
は楽なものだ。

「(しかし、一夏さんもあんなのが自機だと今後は大変ですね)」

元は倉持かどこかが作ったであろうが、実質的に篠ノ之束謹製と思われる「白式」。

今の所、”初の男性パイロットに与えられた機体”程度にしか情報が出回っていないし今後暫く騒がれる事はないだろう。

だが機体スペックは相当なものだし、コアも既存機からの流用……しかも「暮桜」からとなればどんな成長をするのか、楽しみやら怖いやら。

「(どうあれ、明後日のクラス対抗戦が楽しみですな)」

第8話 『War machine (殺戮機械)』 1

横浜沖に存在するIS学園、その管理域は今世界で最も不可侵なエリア、その一つだ。

多くの一般人に混じって国家代表候補生というVIPが幾人も集う世界でも類を見ないほどに稀有な場所であり、限られた数しか存在しない超兵器「インフィニット・ストラトス」が多く收容され、ここいらの軍事施設よりも嚴重な警備と監視が敷かれている為だ。

並大抵のステルス能力では種別のみならず国籍すら看破され、直ちに迎撃されてしまうであろう嚴重な警備網は偵察衛星や最新兵器、特殊部隊並みの高度な訓練を受けた警備員と他ならぬISにより行われ、非法法に忍び込んだ間者は意図的に見逃されたものを除いて帰還した者はいない。

そんな海域の中で、悠々と泳ぎ回るものがある。

それは尾を持ち、脚があり、翼があり、頭があった。

それを見た人はペンギンだと言うかもしれない、或いはシャチだと言うかもしれない。

だが、そののいずれでもない。

なぜなら、その身体は鋼鉄——正確には鉄の十倍ものユゴニオ弾性限界を持つセラミック装甲と均質圧延装甲による積層装甲——で出来ているからだ。

ペンギンのそれと似た形の翼には大型のクローアームと備え付けられた火器類は発見した侵入者を容赦なく海の藻屑と変えるだろう。

シャチの頭だと言われれば見えなくもない頭部と背中に装備された最新鋭のアクティブソナーから発せられる機械音と共に守護すべき学園に対する不屈き者がいないかを常を見守っている。

その名はメタルギアGRACE。

日本国自衛隊において「20式水陸両用二足歩行戦車」と呼ばれ、学園周辺に計30機が6機ずつローテーションで警戒網を形成する最新型のメタルギアで、IS学園防衛の要だ。

「くあ……ふあ」

「飯尾さん……やめてくださいよ、眠気が感染るじゃないですか」
そんなメタルギアのコックピットの中には2人の男がいた。

長時間の任務を想定した特別仕様のコックピットには冷蔵庫、給湯器、簡易トイレが備え付けられている。

そこで欠伸を噛み殺すことなく零し、淹れたばかりのコーヒをボトルからチビチビと啜る男性と、それを窺める男性。

彼らは上官と部下の間柄であるようだった。

「しようがねえだろ、ローテ組んでるって言ってもこんな狭つ苦しい所に野郎と2人つきりだ、退屈で死んじまうよ」

「退屈は人を殺しません、墮落させるだけです」

いくら広いとは言っても、機動兵器のコックピットである以上その広さは推して知るべしである、戦車よりはマシと言うだけで狭いには違いないのだ。

「禅問答してるんじゃないやねえんだよ刈谷、んなことどうでもいい

俺はこんなクソみてえな仕事終わらせて、ベッドに飛び込みたいたいだ」

「そりゃ同感ですが、せめて仕事中はキチつとしてください」

「わっーたよ……なあ、分かったからタバコ吸っていい？電子タバコなんだけど」

「スティックチョコパンの封を開けた時の窒素ガスみたいな臭いがするから嫌です」

「具体的……」

「そもそも精密機械満載の密室でタバコって時点で論外です」

生え散らかした無精髭をなぞる壮年の男、飯尾忠邦いとおたけは部下である優男風の青年、刈谷浩介かりやこうすけと雑談をしながら哨戒任務を淡々とこなしている。

彼らは防衛省が組織した I S School Security Special Unit / IS4U 人間だ。

陸上自衛隊、警察、民間警備会社から選り抜かれた精鋭へ更に訓練を課し、それを耐えて課程を修了しなければならぬが、手取りは50万円は堅く、賞与も最低額が100万円、週休3日、福利厚生も万

全とあつて人気の職である。

飯尾は元警察の警備部特殊強襲部隊^A、刈谷は民間警備会社^C出身で、幾度も死線を越えた猛者だ。

「空調はしっかりしてんだ、いいじゃねえかタバコくらい」

しかしながら、ここは世界に名を轟かすIS学園であり、世界的に見ても治安の良い日本である。

立場やその他諸々の事から鑑みても、ここに喧嘩を吹っかけるアホはいやしないー飯尾はそう考えていた。

「冗談は私服のセンスだけにしてください、もし計器類が壊れたり誤作動起こしたらどうするんですか？自衛隊と違って予算は潤沢なので壊れても変えすぐに回って来るでしょうが、報告書作って提出するの飯尾さんなんですからね」

無論、当のIS学園では各国の思惑やらなんやらが交錯しているだろうが、自分の任務はIS学園の警備である為に関係はない。

こうして欠伸をかき、愚痴の一つや二つを漏らしてもバチは当たらない、そう考えていた。

刈谷も飯尾を窺めてはいるが、概ね同じ考えである。

ここに照準を向けると言う事は、世界を敵に回す事に他ならないのだから、余程の歴史的な大馬鹿者が相手でない限りは有事など起こるはずは無い。

事実として、ここに勤め始めてから早くも5年が経つが、下着泥棒の1人ですら入ったことがないのだ、故に気が緩むのも当然である。

そんな事を考え、緩んでいたからなのだろうか、突如としてコックピットに機械音が鳴り響いた。

「んああ!？」

「は、反応!？」

飯尾がルーチンのに前方へ発したアクティブソナーが感知した反応。

クジラでは無い、クジラはこんなに小さくない。

イルカでも無い、イルカはおろかシャチだってこんなのは無理だ。

かと言って何処かの原潜でもない、東京湾の浅さじゃメタルギアで

もないと隠密潜行なんて不可能だ。

そしてメタルギアでもない、水中でこんな速度はありえない。

「70ノット以上だと……?」

「まさか魚雷!？」

近代の魚雷はキャビテーション現象を利用したスーパーキャビテーションを用いることで200km/h以上を平気で叩き出すのが、これはそれよりも遅い。

だが、それでも海洋生物と言うには早過ぎるし、反応が小さ過ぎた。

更に言うならば、原潜並みの探知範囲を有するGRACEの警戒網に引っかからなかった隠密性……。

そう、これはまるでー

「いや、魚雷じゃない……これは、まさかISだと言うのか……!？」

「どこの世間知らずだ!?!脳ミソが火星まで吹っ飛んでんのか!？」

「ここがどこだか、まるで分かってねえのかよ!」

「翼腕部、脚部を巡航形態より戦闘形態へ移行完了!ローテ中各機へ警報送信!」

「パトロール04から本部!所属不明の潜航物体を感知!

約140km/h
約75ノットで最終防衛ラインへ向かって接近中!彼我との相対距離は約27km!」

《HQ了解、学園全体に緊急警報を発令する、パトロール04は直ちに警告と迎撃を用意せよ》

「パトロール04了解!」

「航行中の所属不明機へ告ぐ、貴機は日本国並びにIS学園の主権領域を侵犯している!直ちに所属と目的を述べ、こちらの指示へ従え!繰り返し返すー」

刈谷は無駄だと分かりつつも警告を再送し続ける、無論返答はなかった。

こんな所に、こんな状況を作ってまで侵入してくる奴が、何かの間違いで来る筈がないのだから。

「……ッ!パトロール04から本部へ、アンノウンから返答を認めず!回避しつつ迎撃をおこなー」

「敵機更に加速！100ノット！こちらを指向しています、回避間に合いません！」

「――自爆装置作動!!」

急接近した敵機の迎撃はおろか回避も間に合わないかと判断した飯尾は自爆装置を機動させ、緊急脱出装置を作動させる。

「ベイルアウト！」

そしてややあつて、轟と水中に巨大な火の玉が産まれ、海底のヘドロ諸共海水を吹き飛ばし、大きな水柱を東京湾に作り上げた。



――時は少しばかり遡る。

例によって例の如く、アリーナは観客でこった返していた。

しかし、前と違うのはこれがクラス内部での抗争――もといクラス代表決定戦ではなく、学園公式の試合という点だろう。

「落ち着きませんね、箒さん」

「そ、そんな事はない！私はいつも通りだ！」

そう言うも体は正直と言うべきか、先ほどから貧乏揺すりが止まらないあたり、これから鈴さんと戦う一夏さんの事が心配なのだろう。

因みに、セシリアさんは報道対応に追われておりまだ来ていない、開始までには間に合うだろう。

結局、「甲龍」の事は殆ど分からず終いだった。

自主トレをする鈴さんを盗み見てはいたが、やはりクラス対抗戦を意識してか、やっていたのは基本的なマニューバや、無闇矢鱈に大きい青龍刀を用いた近接コンボの錬成である。

特徴的過ぎる非固定浮遊部位の肩部スパイクアーマーの用途が気になる所だが、その正体は終ぞ掴むことは叶わなかったのだ。

恐らく――というか確実に「甲龍」は近接戦闘タイプだろうから、アレは近接戦闘を行う上で何がしかの役割があるのは確実である。

推進機なのか、武器を格納しているのか、はたまた凶悪な見た目に

そぐわぬシヨルダータツクルでもキメてくるのか、推察は出来るがどれも決め手に欠けるものだ。

中国と言え、現国家代表の紫涵遠スーハン・ヤンが有する「蒼嵐」ツァン・ランも近接戦闘型だったなと思ひ出す。

前回のモンドグロッソで披露した、両手と脚部にマウントしたチエーンソーを自由自在縦横無尽に振り回して相手を切り刻む”サンダークラウドフォーメーション”
雷雲旋風切断陣”なる技は美しさと強さを兼ね備えた凄まじいものであったと記憶している。

そんなことより
閑話休題

「まあ別に実戦ではなく試合なのですから、命を落とすような事は万が一を考えてもあり得ませんし、その万が一の事態が起きてもこの医療スタッフは優秀です」

「だから心配などしていない!」

「私は箒さんが心配しているなどと、一言も言ってませんけどね」
「うっ……」

やはり凶星のようで、箒さんは恥ずかしげに俯く。

わかりきった事ではあるが、一夏さんを取り巻く恋愛事情は複雑怪奇であり、まるで下手な三文芝居でも観ている気分である。

しかも不愉快なのは、そこに私が組み込まれているらしい事だ。

「まさか、セシリアさんのみならず箒さんからも恋敵であると認知されているとは)」

これはつい先日報道部の人間から知った事であるが、私は一夏ハレさんを好く女性陣ムの1人に数えられているらしい。

甲斐甲斐しくISの手解きをしたり、普段一緒にいる時が多い事からそう判断されたようだがとんでもない、勘違いも甚だしい。

ISの手解きをするのは一つでも多く貸しを作つて少しでも多くの情報やツテを入手する為である。

普段一緒にいる時間が多いのも、それに付随してあわよくば「白式」を手離したタイミングで情報を解析する為だ。

何度も言うようだが私の好みはタバコや葉巻、大型バイクや車が似合うハードボイルドでシブい年上の男性であり、決して一夏さんのよ

うな優男ではない。

やれオジコンだジジコンだと言われようが知った事ではない、人の好みは千差万別十人十色が世の常なのだ、理解できないならそれで結構である。

……そりゃあ、面と向かって大真面目に”あんな事”を言われてしまえば、一夏さんを大なり小なり意識してしまうのは仕方のない不可抗力であり、本心ではない（と、思いたい）。

私としては、箒さんにしろセシリアさんにしろ、秋風が立ち扇とならなければ良い。

更に愛、屋烏に及ぶとなって全てが丸く納まれば最上だ。

直接自分に関係のある事ではないとはいえ、周囲がギスギスするのは気持ちが良いものではないのである。

良い日常とは健やかな精神、健全な環境からなるものだ。

不安要素なんて一つでも少ない方が良い……目指す未来も、歩んだ過去も血塗れなだけに、心からそう思う。

「……ま、どうあれ男子3日会わずば刮目して見よなんて言いますし、彼の成長に期待する他にないので？ 私たちに来るのは祈るか応援するだけです」

別に会ってないわけではないし毎日顔を合わせてはいるのだが、心情的な問題である。

「それは、そうだが」

「彼にしても、そんな心配してあたふたしてるより、いつもの調子で応援の一つでもしてくれた方が嬉しいと思います」

「……うむ」

そう頷くと、箒さんは漸く貧乏揺すりを辞め、いつもの凜とした表情を取り戻す。

「すまないな、みつともない所を見せた」

「いえ、ご友人を心配されるのは当然のことですから……っと、始まるようですね」

照明が消え、アリーナの中央がスポットライトに照らされる。

そこにはいつの間にもやら一人の女性がマイクを持って立っていた、

報道部の部長である。

真つ赤なタキシード、蝶ネクタイ、右目の眼帯と珍妙な格好であるが、その姿は薄ぼんやりと透けており、立体映像である事が伺える。

『ISがその名を世に轟かせて早10年、様々なISが産まれ、消え、その遺伝子を継いだISが産まれてきました

アメリカが、ロシアが、中国が、そしてこの日本も、その雌雄を決するべく凌ぎあってきたのです

その戦いの最高峰こそ、かの種別国家対抗戦モンドグロツソ

ですが、戦いの舞台はモンドグロツソのみに非ず、そして先鋭はモンドグロツソに非ず、ではその先鋭はなんなのか？

そう、世界各国の選抜かれたエリートである国家代表候補生とその専用機！厳しい選考をくぐり抜けたパイロットの卵達が集うこのIS学園！ここで行われる様々な対抗イベントこそ！その時代の最先端を行くのです！

そして、ここにその戦端を開く一大イベント！学年別クラス対抗トーナメントの開催を!!ここに宣言します!!

それでは、一年生の部、第一回戦選手、入場ツツ!!』

ワアアツ、と大きな歓声上がる。

観客は元より、司会の報道部員からしてボルテージは最高潮だ。

「……暑苦しいな」

「いいんじゃないでしょうか、私は好きですよあああゆうの」

うん、やはり司会とはああでなくてはならない。

場を盛り上げるのが彼女達の役割だ。

『先ずは一年一組！女の世界に一人きり、白き鎧に身を包み、刀担いでやって来た！その手握るは実姉が誇るかの剣！世界最強に俺はなる！世界唯一の男性ISパイロット！織斑一夏だアーーーッッ！』

総合格闘技の謳い文句のような紹介と共にカタパルトから飛び出したのは白銀のIS、我らが一夏さんの「白式」だ。

特に変わりはないが、胸部アーマーと肩部非固定浮遊部位には日本所属であることを表す日の丸の識別章と”表向きには”「白式」を製作した倉持技研と、その親組織である倉持工業のロゴマークが記され

ている。

一夏さんから進んで記したとは思えない、恐らくは何処からか要望があったのだろう。

……私の予想通りアレを作ったのがかの”天災”であるならば、己の作品にロゴマークなど貼り付けられたらキレそうなものだ、何事なけば良いが。

『続きまして一年二組！師との契りを胸に抱き！滾る熱情烈火の如く！来たぞ中国四千年！！中国国家代表候補生！！凰鈴音だアーーーーッッ！！』

「甲龍」も「白式」同様、中国の識別章と協賛企業のロゴマークが大きく記されている。

ふと思つてパンフレットに記された特記事項に目を通すと、”参戦者は国家代表候補生であるか否かに関わらず所属を明らかにすること”とある、どうやら識別章をペイントするのは決まりであったらしい。

協賛企業、或いは開発企業のマークは単に宣伝の意味合いがあるのだろう。

所属が決まっていない生徒はIS学園のエンブレムを刻印する事が義務付けられているようだ。

『選手出揃いました！既にお互い睨み合い、気合十分といった所でしよう！それでは長らくお待ちしました!!』

義眼でズームし、一夏さんを見てみるとなにやら喋っているようだ。

相対する鈴さんも口を動かしているからして、回線を使って話しているのだろう。

その様子はなにやら剣呑だ、ここ数日で何かあったのだろうか。

『それではア！ISファイトオー……レディー……ゴオーーーーー!!!』



「一夏、今からここで土下座して謝るってんなら、ちよつと痛めつけるくらいで許してあげるけど?」

そう高圧的に宣言する鈴は露骨に怒っている、やはり先日の発言が不味かったのは明らかだ。

「言っても雀の涙だろ? 必要ねえよ、全力で来い」

しかし、原因を作ったのは自分だが手を抜かれるのはゴメンだ。

俺は手を抜くのも抜かれるのも嫌いなのだ。

勝負とはいつでも全力で、真剣にやってこそ意味が生じるものである。

「一応警告しておくけど、ISの絶対防御は完璧じゃないーシールドエネルギーを突破する威力さえ出せばパイロット自身にダメージを与えられる」

それは脅しではない、本当のことだ。

いつか棗が話してくれた事だが、世界にはパイロットへダメージを与える事だけに特化した兵装も存在すると聞く。

無論、それは協定違反であるしこの学園においても禁止されているのは勿論だ。

だが、殺さない程度に甚振る事は可能である、という現実が変わりはない。

事実として、棗はセシリアに対してそういった攻撃を仕掛けていたそうだし、セシリアも同様であるとのことだ。

「……男に一言はねえ、全力で来いって言ってるんだ」

「フン、そういう強情な所は変わらないのね、美人侍らせてヘラヘラしてるのかと思っただけど、安心したわ」

『既にお互い睨み合い、気合十分といった所でしょう! それでは長らくお待ちせしました!!』

「時間ね、お喋りはここまで……それじゃ、お望み通り全力で三枚におろしてあげる」

「ああ、こいよ……その素っ首、貰い受ける」

格好つけてこんな事を言ってみたが、セシリアの時にあそこまで善戦できたのは奇跡の産物だ。

二度も奇跡は起きない……しかし、俺とてあの時からなにも成長していないわけじゃない。

『それではアー・ISファイトオー……レディー……』
ゴオー……!!!』

なんか前回と掛け声違くない？なんて思う暇もなく、開始のゴングが鳴り響くと共に「甲龍」はこちらへ急接近、二刀の巨大な青龍刀のようなものー正確には青龍せいりゆうえんげつとう偃月刀である「双天牙月そうてんがげつ」を「白式」に向かつて振り翳す。

黙って見ているほど俺も馬鹿ではない、同様にスラスターを目一杯吹かして雪片で撃ち合う。

「ゼエアッツ!!」

「なんのー!」

刹那の鏝迫り合いの後、互いに撃ち合うーが、撃ち合いなんて生易しいものではない、幾合かの打ち合いの果てに雪片は双天牙月に弾かれ、大きな隙を晒してしまう。

「まずツー……!」

棗とセシリアによる教導でなんとかモノにしたクロス・グリッド・ターン三次元躍動旋回と瞬時加速を用いて「甲龍」の間合いから退避した。

何故か、などと考える程難しいものではない、そもそも「白式」と

「甲龍」ではパワーが違い過ぎたのだ。

「伊達に中国の最新鋭機じゃねえってか!」

「一昔前とは違う、”メイド・イン・チャイナ”は高品質の代名詞って事よ!」

双天牙月は鈴の持ち方、振るい方によつて自在に角度を変えながら斬り込んでくる。

それが二つ、ただでさえパワー負けしているのに二刀流を完全に使いこなしているとあれば消耗戦どころの話ではない。

更に三次元躍動旋回を続けている事によつて目が回りそうなほど小刻みに動いている故、このままでは撃ち負けるのは必須だ。

「(なら一度距離を取って体制をー)」

「ところがギッチョン!」

「なッー!?!」

瞬時加速で距離を取った時だった。

「甲龍」の両肩部スパイクアーマーが、まるで龍が顎を開くが如く展開し中心の球体部が発光したかと思うと、途轍もない衝撃が「白式」を襲う。

しかもまるでプロボクサーにブン殴られたかなような衝撃、これは一体――

「これ、ジャブだから」

「い、いったいなにが!?!」

不敵な笑みを浮かべた鈴の宣言、そうだ、牽制ジャブの次は本命ストレートと相場が決まっている――!

「があっ!?!」

不可視の攻撃により襲った衝撃はシールドエネルギーを貫通し、己の体を打ちつける。

衝撃に押されるまま、慣性に従ってフィールドバリアへ叩きつけられ、地表に落下した。

霞む瞳で確認したシールドエネルギー減少値は76、ビットの直撃ですらここまででは無かったというのに。

「ちよつとマズイ、かな」

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

「……なるほど、PICによる空間圧縮で擬似的な砲身を形成、発生する衝撃波に指向性を持たせて砲弾として射出する――差し詰め、衝撃砲と言ったところですか」

PICはごく空間に存在する素粒子は干渉して慣性、重力を無効化するものであるが、まさかそれを武装へ転化させるとは……さすがは中国、目の付け所が違う。

「ですわね、BITと同様の第三世代兵器……それもシールドエネルギーを貫通する事を前提とした、パイロットを直接攻撃可能なISファイト国際条約第五条違反ギリギリの特殊兵装……恐らく、”衝撃を叩きつけるだけだからセーフ”とでも言って審査をくぐり抜けたのでしょうか」

「……つまりどういう事だ」

「ぎっくり言うのとド○えもんが使う空○砲のもっとすげえヤツですね」

「なるほどー」

「ぎっくりしすぎでは……？」

珍妙な例えではあるが、これ以上に明確な例えは思いつかない。

青狸のアレ然り、穴を一つ開けた段ボールの箱の中に煙を充填させ、箱を叩くと煙が飛んでいく、で○じろう先生のアレとかだ。

「甲龍」の衝撃砲はこれと原理的には同じである……と思われる。

正直化学やら科学の方は専門外なので、よく分からないのが正直なところだ。

「しかし、物騒な空○砲もあつたもんですね、それなりに重装甲な「白式」をあかも吹き飛ばすとは」

「不可視なものも合わさって厄介極まりないな……」

「アレで色着いてたら意味ないですからね、素人には何が起こってるのか分からないでしょうが」

「ですわね……まあIS学園の生徒たる者、完全な原理の理解とまではいかずとも概ねどのような兵器であるかの予想くらいはつくでしょうけども」

セシリアさんはチラリと箒さんに目を向ける、箒さんはバツが悪そうに目を背けた。

「こつちを見なさいな、箒さん」

「私は、理科が苦手だ」

「そんな自信ありげに宣言されても……」

どうやらーというか割とわかりきっていた事だが箒さんは理屈的な事には弱いらしい。

一夏さんへモノを教える時も「ここでズバーンとやる」とか「これをここでシュツとやって後はサツとやる」とか、ものすごく擬音が多い上に抽象的な表現が多い。

正直私も何を言っているのか分からなかったし、一夏さんも困っていた。

「棗さんならどうしますの?」

「私ですか?……そうですね、初撃を避ける自信はありませんが、慣れれば動きにブラフを仕込んでフェイント、衝撃砲のリロードを読んでその隙を突きます」

なるべく二の打ち要らずと行きたいところですが、鈴さんも相当な腕前ですし、そう簡単にはいかないでしょうね

セシリアさんなら圧勝ーとはいかずとも殆ど一方的に倒せるのでは?」

「空間湾曲によるレーザーの空間減衰値の変化がどの程度かにもよりますが……7割程度は残せるかと」

「あとは衝撃砲の狙いがどうなっているのかだ、セシリアのビットのようにある程度の自動照準が可能なのか、完全マニュアル操作なのか」

「マニュアル半分、オート半分ではないですかね

本人の視野外にも撃つてますし、照準補正をつけているのでは」

「そもそも精密照準する必要があるようには思えませんわね

アレ、圧縮率によっては連発も可能かと」

考えれば考えるほど厄介な兵器だ。

PIICによる空間圧縮など殆どエネルギーを食わないだろうから低燃費、圧縮率によっては連射も可能、砲身と砲弾は不可視、射程こそ不明だが近距離クロスレンジから中距離ミドルレンジならば威力減衰は起きないと思われる。

実弾もバラマキ系なら衝撃砲で威力を落とされるだろうから、対策するなら高火力にして高速、そこに接近対策の牽制、精密性無視の広範囲殲滅、この程度ではなからうか。

「ウーン、やり合いたくないですねえ、「甲龍」とは」

「同感だな……」



やばい、詰んだかもしれない。

「……さーて、どうすっかな!」

既に何回あの不可視の攻撃を受けたかも分からない。
シールドエネルギーはもとより、身体の節々が痛む。

なんとか回避出来るようにはなったが、それだけだ。

「なかなかやるじゃない？」「甲龍」の「龍咆」をここまで回避するなんて……ま、回避だけで対策は出来てないみたいだけど」

「原理はなんとなく理解した、あとはなんとかしてやるさ」

とは言ったものの、龍咆というらしい不可視の攻撃、恐らくはP I Cで空間圧縮をし、その余波で攻撃をしている衝撃砲とでもいうべきシロモノだが、砲弾だけならまだしも砲身まで不可視なのはかなり厳しい。

しかもこの龍咆、射線そのものは直線とはいえ砲身の射角と方向に限界がないようで、いくら死角に潜り込んでも撃ってくるから厄介だ。

「(その上で鈴本人の腕も相当……棗とセシリアが言ってた通りか)」

セシリアと棗曰く、鈴は、数千人と繰り広げる中国国家代表候補生選抜デッドレースを一年で勝ち上がってきた正真正銘の化け物”らしい。

そんな実感は無かったのだが、考えてみれば昔からオリンピックやらなんやら、数々の分野で国家主導の元で選手の選抜と育成を行なっているのだから、I Sにおいても同様の事を行っているのはおかしい事ではない。

それを引越してから一年ちよつとで他の候補生を追い抜いて専用機を取得し、I S学園入学の切符までも入手したというのだから、確かにエリートなのだろう。

「(だからって、諦める理由にはならねーな)」

確かに鈴は凄まじい腕前で無制限機動と全方位への軸回転、I Sに関する基礎と応用を高いレベルで習得している。

ある一点に以外で俺は鈴に敵わないのだろうが、その一点だけは負けられない。

「(気持ちだけは、負けられないッ！)」

棗は言っていたように、最後まで諦めず、不可能を可能にするビ

ジョンを思い浮かべ、それを実行する為の一手を掴む、これが今の俺に出来る全てだ。

「おい、鈴」

「なによ、今更土下座する気にでもなった？」

「本気で、全力でいくからな、首洗って待つてろよ」

左手で首をトントンと叩いて首を切る仕草をし、精一杯の強がりで見つめる。

「……なっ、なによ、そんな当たり前の事カッコつけて言ったワケ!？」

「フン!一夏には私との格の違いって奴を思い知らせてやるんだから!後で泣いて謝っても許さないんだからね!」

「何故だか鈴の顔は赤いが、口調から察するに俺の気概に押されでもしたのだろうか。」

しかしそんなのも束の間、双天牙月を一本に連結させ、宛らバトンのように振り回して構え直す。

今までのように龍咆で牽制を繰り返しつつ、大本命の双天牙月で斬り込むつもりだろう。

瞬時加速で衝撃砲を使われる前に呐喊し、零落白夜で一気にケリをつける、それしか方法はない。

「瞬時加速からの踏み込みは棗からして”国家代表候補生のソレに並ぶ”と褒められた得意技だ。」

「これなら、イケる!」

「オラア!」

目一杯スラストを吹かし、連続した瞬時加速で「甲龍」に肉薄する。

個別連続瞬時加速とか二段瞬時加速とか言うらしいこの技、今まで一度も成功していなかったが上手くいったようだ。

「うそ、この距離で躲した!？」

そして、個別連続瞬時加速が成功した事で己の左右を轟音が通り過ぎ、肌がビリビリと揺れた、衝撃砲が着弾せず通り過ぎた音だ。

「甲龍」の龍咆は全方位に向けて発射が可能であるが、肩部アーマー

を基点としている以上、前方に指向した場合はどうしてもその射線はV字になり、円錐状の隙間が生じる筈。

そこに上手く入り込めれば勝機はあると踏んだわけだ。

「言つたら、全力で行くぜって」

「一夏……」

吹けば息がかかりそうな距離、連結した双天牙月はこの距離なら使えない。

衝撃砲だつてチャージは間に合わない。

あとは、居合の要領で零落白夜を発動して……切るツツ!!

バシン

「へ?」

そんな音と共に、アリーナが暗転した。

「へぶー」

「あうあ!」

あまりに突然なことだった為か、俺は雪片で切ることも忘れ鈴に突っ込んでしまう。

IS 同士の激突、その衝撃は凄まじいものであり揉みくちやになつて地表へ落下してしまつた。

「いってー……なんなんだよ……」

「いたた……つて、きやあー! あんたどこに頭突っ込んでんのよ
離れなさいよ!」

「す、すまん鈴!」

「ぎやあー! 突っ込んだまま喋るナー!!」

そんな騒ぎを他所に、暗転したアリーナが薄暗く照らされる。

その刹那、各所の警報機がけたたましく鳴り響き、アナウンスが流れた。

『IS 学園教員及び生徒へ伝達します、只今当学園へ所属不明の IS
と思わしき未確認機が接近中、全ての行事と授業は中止し、生徒は警
備部隊員の誘導に従つて速やかに指定されたシェルターへ避難して
ください、教員は直ちに IS を着用し指定位置にて迎撃用意

繰り返しますー』

「……#6c.」

第9話『War machine 2』

IS学園の表層―学舎部分の下には様々な区画が存在する。

教員用ISの格納庫と表層への射出用カタパルト、日々累積される様々なデータを収容するサーバールーム、非常時に職員と生徒が避難するシエルター等、多岐に渡る。

そんな区画の一角、IS学園統合管制室は存在した。

「パトロール04乗員のベイルアウト確認！救難信号感知！」

「ドローンを出せ！乗員の回収を急がせろ！待機中の部隊は全機対IS戦闘パッケージへ換装を完了次第出撃！」

教員の出撃はまだなのか!？」

「先のハッキングで教員用のIS格納庫が閉鎖されています！解除を受け付けません！」

普段ならば、学園の美少女達をプライバシーを侵害しない程度に合法的な手段で眺めるのが主な仕事である。

しかし、今日ばかりはそんな事をしている場合ではなかった、IS学園創立以来初となる武力行使事案への対処に追われているからだ。

「アンノウンからISコア反応を検知！コア波形計測、照合開始します！」

「何処の馬鹿者だ!?コアナンバーは!？」

「……ツツ！アンノウン、コア波形が照合できません！未確認コアです！」

「未確認だとオ!？」

学園近海を巡視するメタルギア部隊が発見したアンノウン―未確認のコアを持つISは既に防衛識別圏を突破して上陸、先んじて防衛線を構築していたメタルギア部隊と乱入した国家代表候補生と交戦を開始していた。

「クソツ……なんだこの状況は!？」

IS4U指揮官の女性―向島むこうじま 冴さえは苛立つ。

10年前、一介の幹部の身であったが衛生科から空自のIS運用部

隊へ異動願いを出し、厳しい選考の後に I S パイロットになり、5 年前からは教導隊主任教官の任に就き、つい先日 I S 4 U への栄転が決まり、仲間と教え子達に華々しく送られたものの、四月一日に着任してから半年と経たずにこの状況である。

パトロール 04 の撃破、防衛線構築から間も無く交戦開始、苦戦を強いられているタイミングで一年生の国家代表候補生が乱入し、今に至るが混乱の最中にも程がある。

配属当初はぬるい職場だと感じたものだが、まさかこの様な事態に陥ると思ってもよらなかった。

「待機中の G R A C E、I R V I N G 全機、対 I S 戦闘パッケージへ換装完了、出撃用意よし！」

「全武器の使用を許可！自衛隊は!？」

「中即団 I S 部隊が第 3 種発令！到着まで 15 分！」

「百里のライトニング II がスクランブルとの情報！」

「メタルギアならまだしも、I S 相手に通常戦力で相手になると思っているのか!? 悪戯に隊員を殺すだけだと何故分からん！中即だけ寄越して百里のは追い返せ！木更津にも来るなど伝える！」

「それと係留部との連結解除を用意！コアも戦闘モードへ移行！」

「よろしいのですか!? 委員会の承認がー！」

「生徒が死んでからでは遅い！死ななければ私と大臣の首が飛ぶだけで済む！」

「しかし！」

「つべこべ言うな！全ての責任は上が取ると言っている！」

「あーもう知りませんよ！」

聞き分けの悪い部下を叱咤し、指示を出す。

現状、全てが後手に回っている状況だというのに、総理も大臣もあるものか。

ここの生徒が、国家代表候補生やら政府要人の姪やら経済界の大物の孫やら、何かあれば死ぬよりも酷い目に合わされること請け合いな小娘がここには掃いて捨てる程いるからして、私の首一つで事が丸くおさまるなら安いものだ。

「須野田防衛大臣、あなたが悪いんですよ……」

着任してから早々に意見具申した即応可能なISとパイロットの常駐案、それを蹴ったのは防衛大臣の須野田だ。

教員がいるだろうと、あの織斑千冬もいるのだろうと、1機200億円もするメタルギアがいるじゃないかと、反IS思想が透けて見える蹴飛ばし方だった。

メタルギアとISの公式戦闘記録はないし、あの白騎士事件以降ISと戦った事がある人間などほとんど皆無に等しい。

そもそも、白騎士事件とて戦闘というには程遠いものであったと、当時のパイロットから聞いているからして、教員や織斑千冬が戦えない状況も想定した防衛プランも検討すべきだと、そう思っていた。

「メタルギアとて無能ではないが、こころも奇襲されては形無しか……結局は生徒のISに頼っている、無様ね」

「司令！」

「なんだ!？」

「アンノウン以外の高熱源体を検知！熱圏、当艦直上440km！我が方を指向しています！」

「ミサイルか!？」

「不明です！対象弾着まで10カウント！9、8——」

「総員対衝撃防護オー——!!!」



『IS学園教員及び生徒へ伝達します、只今当学園へ所属不明のISと思わしき未確認機が接近中、全ての行事と授業は中止し、生徒は警備部隊員の誘導に従って速やかに指定されたシェルターへ避難してください、教員は直ちにISを着用し指定位置にて迎撃用意
繰り返します——』

「……は?！」

正直、最初は意味が分からなかった。

以前ニュースかなにかで、IS学園は世界で最も安全な場所、とか

謳われていた気がする。

そこへ未確認ISの接近？シエルターに避難？教員はISで迎撃用意？わけがわからなかった。

「うおっ!？」

「ちよ、これ……」

だが、その疑問も轟音と地震ー恐らくは何かが爆発によって吹き飛んだ音と揺れがアリーナを襲い、観客席が波立つ。

その直後、バシユンやらダダダやら、最近になって聞き慣れた音が聞こえてくるーこれは、ミサイルや機銃の音だ。

鈍いと言われる俺でも流石に分かる、どうやら本当にヤバい事が起きているらしい。

「鈴！俺たちも急ごう」

「……そうね、勝負はお預けか」

残念そうな鈴を尻目に、アリーナから出るべくピットへ向かう。

閉じているシャッターを開けるべく、緊急用開閉ボタンへ手を伸ばしー

『触るな!!』

「!？」

スピーカーから鳴り響いた千冬姉の声に反応しビクリ、と体の動きが止まる。

これは普段俺たちの素行を叱る声ではない、此方の身を案じた必死の叫びだ。

『二人共そこから動かず、何が起きてもいいように準備しろ!』

「ハア!？シエルターに行くんじやねえのかよ千冬姉!」

『学園のセキュリティシステムがハッキングを受けている!ソレのせいでアリーナ管理システムが乗っ取られ、バリアが攻性を帯びた!触ればISでもタダじゃ済まんぞ!』

「白式」のハイパーセンサーを使って確認すると、確かにバリアの性質はIS同士の戦闘から観客を守るものではなくっており、人間の致死量を大きく超えた電流が流れているのが分かる。

しかもその特性をサーチしなければただのフィールドバリアとし

か表示されないのがタチの悪さを際立たせていた。

試合前に鈴が言っていたように、ISのスキンバリアーや絶対防御も万能ではない。

龍咆のように人体へ直接ダメージを与えることが可能な兵器には相手は電流を流すものも存在するのだ。

「これって……」

「閉じ込められた!?!でも、なんで」

『目的は分らんがロクなことではあるまい、兎に角言う通りにしろ、いいな!』

それっきりスピーカーからの音声は途切れ、観客が逃げ去ったアリーナに二人きりとなってしまった。

「……取り敢えず」

「気を抜かず休憩つてとこかしらね……」



突如として鳴り響いた武力攻撃を告げるアラートに観客席は混乱の境地に達した。

セシリアさんや私を含む一部の生徒が冷静になれと声をかける努力も虚しく人波に流され、廊下へと押し出されてしまい、皆ともはぐれてしまったが大丈夫だろうか……しかしまあ。

「面倒なことになりましたね」

IS学園への武力行使、それが意味する所を理解出来ない輩がこの世界に存在するとは思ってもよらなかったーいや、分かって尚の行動であるならば一体全体どんな奴なのか……案外、私の敵と繋がりがあるかもしれない。

「……ふむ」

「そこあなた、何をしているんですか!?!早く!」

「ーすみません、少し考え事を」

「早くしーキヤア!?!」

「なっ!?!」

突如として、轟音と共に眼前の天井と壁が崩壊した。

そこには先程はぐれた箒さんを始めとする教員と生徒が複数、見た所専用機持ちはおらず、このままでは瓦礫に押しつぶされてしまうだろう。

「チィッ！」

私の後方に誰もいない事を確認し、崩れ落ちる天井を蹴飛ばす。

そのまま空中で一回転し、スラスターを目一杯ふかして通路が崩壊した原因であるメタルギア、その首を雷切で両断。

更にまた一回転し、首が泣き別れた胴体へ全力のアツパー昇を繰り出し、回転をつけた勢いを全身のスラスターで余すところなく利用した空中連続回し蹴り電巻旋風脚を放ち、メタルギアを通路から押し出した。

その後、ワイヤーテールで頭部を掴んで落下の勢いを殺す。

この三つの動作を完了するまで1・24秒！絶好調だ。

「まったく、本当に面倒な……！」

あとコンマ1秒、「ヴァイパー」の展開が遅れていたら箒さんもろとも押し潰されていたところだ。

本来ならば無許可のIS展開は嚴重注意では済まないが、今回ばかりは大目に見て欲しいものだ。

突っ込んできたメタルギアはどうやら学園に配備されたGRACEのようである。

「ローフンツ！」

ガコン、とコックピットハッチをこじ開けるとパイロットが項垂れている。

一人はピクリとも動かないが、命に別状はなさそうだ。

「ローキ、きみは」

「無理して喋らなくて結構、今は大人しく救助されてください」

気がついたパイロットが息絶え絶えといった様子で言葉を絞り出す、それを制止してシートベルトを引き千切り、二人を引つ掴むと、近くにいた箒さんと教員に受け渡すローキで。

「皆さんはパイロットの方をお願いします」

「棗はどうするんだ!?まさかローキ」

「……やりすぎましたか」

思いのほか綺麗に決まった飛び蹴りで黒いISは錐揉み回転をしながら港湾区画へと突っ込んだ。

おそらく倉庫であったであろう建物は跡形もなく崩れ去り、土煙りをあげている。

「ま、人命には変えられませんしねー学園防衛部隊各機へ、日本国家代表候補生、日野棗、助太刀しますよ」

『なに!?生徒は避難をー』

【言ってる場合か!!こちら Metal Gear Squad M G S リーダー、助太刀に感謝

する!」

各機、破損レベル小破以下を除いて全機退がれ!ISの攻撃の邪魔だ!動ける者は弾薬を充填して後方支援に回るぞ!」

翼腕部をもがれた者、尻尾がない者、脚部が破損した者、破損度合いと部位はそれぞれだが、少なくとも消耗を強いられているようだ。

考えてみれば、公式では初となるIS対最新鋭メタルギアの戦闘である。

無論、第三世界を筆頭に小規模な戦闘こそ繰り広げられているが、使われているメタルギアは第二世代機にも劣るものである為、カウントするのも馬鹿らしい。

しかしなるほど、精鋭揃いの防衛部隊も、実戦経験がなければこんなものか。

「さて、何方か存じ上げませんが随分と派手好きなご様子……よくもまあ、IS学園を相手にここまで立ち回ろうと思ったものです」

それはさておき、件の黒いISに目を向ける。

相当な強さで蹴り飛ばした筈なのだが、大きな損傷は見受けられない。

「ー」

《警告、警告、警告》

《コアナンバー、コア波形、照合失敗、未確認コア》

返答はなく、頭部バイザーのアイセンサーがピカピカと光るのみで

ある。

答える気がないのか、喋れないのかーいや、こいつ、なんだ？この違和感は。

それも未確認コア？なんの冗談だこれは。

「……まあいいでしょう、いろいろ聞きたいことはありますがー先ずは一曲、フラメンコでも如何です？」

「ーー！」

先ずは様子見で接近してから右ジャブからの左ストレートを放つ、此方の攻撃に対して黒いISは両肩のレーザーで迎え撃つが、そんな攻撃に当たるほどヤワな訓練はしていない。

最低限の身動いでレーザーを躲すと、レーザーが大気を焼く独特の臭気が鼻をつく。

この距離で射撃は不利だと感じたのかやたらと大きな拳を振り上げてくるが、その手を掴み取って地上へブン投げた。

黒いISは学園施設の壁をゴリゴリと削りながら慣性を殺し、距離が開いたからか両肩に加えて両腕、計4本のレーザーを此方に連射してくる。

「ハンッーそんな精度ではー！」

射撃に不慣れなのか、偏差射撃が得意でないのか、詳しい事情は知らないがどうも照準が実戦的ではない。

せっかく高威力のレーザーなのにどうも画一的というか、愚鈍なまでに教科書的な射撃だ、捻りがないとも言おう。

事実として、こんな考え事をしながらでも相手の攻撃を躲し、カウンターを決める程度には余裕がある。

「攻撃の出力は条約違反、あれ程の攻撃を耐える装甲……なのに、なんてチグハグな」

ここまで戦って分かったことがある、やはりというかなんとというか、こいつには生気がない。

以前、雷電が言っていた“気”の概念……: 当時は理解出来なかったが、兎に角この黒いISからは、生きた気配を感じない、気の流れが存在しないのだ。

少しでもISに乗ったことがあるならば生じる筈の癖や個性が無い。

間近に攻撃が迫っているというのに恐れ無い。

こいつにはロー感情がない。

「せいッローヤァー（無人機……？いや、そんなワケが無い、ISコアは生体にしか反応を示さない筈だ）」

だが考えれば考える程、眼前の黒いISは無人機にしか見えない。体のブレ、反射、何からなにまで機械的で、出来の悪いコンピューターと戦っている気分だ。

何らかの手段でマインドコントロールをしたパイロットが駆っているにしても、あまりにも個性がないように見える。

「(このご時世で管理外のコアなどありえない、生体にしか反応しない筈のISで無人機などありえないローだが、そもその前提が間違っているとするれば?)」

管理外のコアは存在する。

コアの生体認証は突破できる。

そしてこの学園に攻め込めるだけの度胸その他諸々……これだけ考えれば、誰がやったのかは自ずと浮かんでくる。

「(しかし解せない、篠ノ之束がここを襲撃してなんの旨味があるというのか)」

誰かを殺したいのなら、毒殺なりなんなりもつと別のやり方がある。

仮に襲撃を仕掛けるにしてもIS学園にいる間でやる意味が分からないし、夜間に仕掛ければもつと楽にことを済ませられる筈だ。

あの天災がそれを考えつかないとは思えない。

ならば、こうして”襲撃をする事”そのものに意味がある……？

「ローなるほど、余裕はなさそうですね」

この形で行われる襲撃に意味があるのなら、この戦いは長引かせるべきではない、悪戯に時間をかけては相手の思うツボだ。

教員を待つ為の時間稼ぎなど言っている場合ではなく、この場で私の手によって撃破すべきローそう判断した。

「それならそれで、やり方を変えるべきですか」

そう思い、黒いISのレーザーを回避しながら接敵するが流石に学習したのか、後方へ回避行動を取りながらの射撃——俗に言う引き撃ちの戦略を取っている。

「月並みですね」

引き撃ちは常にこちらを見据えながら後退し、一定の距離を保ちつつ射撃を繰り出す戦術だが、その対処は簡単だ——相手の後退速度を上回って接近すれば良いのである。

尤も、引き撃ちに対する戦法のセオリーは本来弾幕や煙幕等による攪乱であり、相手の弾幕を掻い潜って接近するのは常人のやることではないのだが。

「（ここが港湾区画でなく、ビル街か渓谷ならばもつとやり易かったのですが……無い物ねだりは良くありませんね）」

倉庫やガントリークレーンを足場にして踏み込み、瞬時加速の加速もつけてジグザグな軌道を取り、コースを読ませず、尚且つ高速で接敵する。

やり方を変えると言っても、戦法を変えるわけではない、そもそも私の武器は手足のみ、その武器を繰り出す手段が少し変わるだけだ。相手は無人機だ、確証は無いが確信はある。

織斑先生が聞いたら激怒しそうなものだが、そもそもIS学園に攻め入った時点で人権など無いのであるからして、私がアレをどうしよう問題は無いはずだ。

「狩らせてもらいますよ、伽藍堂」

雷切を構え、黒いISに疾駆する。

狙うは頭部と胴体、相手が人間であるにしろ無人機であるにしろ、コアユニットがありそうな部位はその二つだからだ。

万が一読みが外れて無人機ではなく人間であった場合は少々面倒な事になるが手錠が死体袋に変わるだけだ、尋問が出来ないのは残念だが何も問題は無い。

そもそも読み通り無人機であるならば自壊するなりなんなり、追跡されないよう処置はしているはずだから意味がない。

「シュー」

黒いISから放たれたビームを瞬時加速で躲し、側面に回り込み、地面を思いつき踏み込んでぶった斬る。

道筋は見えた、相手の死角にも回り込んだ、地面を踏みしめたーあとは、斬るだけ。

その瞬間だった。

「なっー!!」

ドン、と大きな揺れが襲う、立て続けに2回だ。

地震にしては揺れが少ないが、無視できる大きさではない。

そして後方から伸びる閃光、私の後ろにあるものはーISアリーナだった。

「ッー!!」

思わず後方を振り返ると、ISアリーナの天井には大きな穴が空き、そこからくもくと黒煙が立ち上っている。

「やはり、陽動……!」

「ヴァイパー」のハイパーセンサーはアリーナにいる「白式」と「甲龍」の反応をキツチリ捉えていおり、そしてー

「もう一体!」

流石に驚きを隠せなかった。

一機だけでも国際問題待った無しである所属不明のIS、その二機目が現れた。

しかも、アリーナ内部の反応が忙しなく動き始めた辺り、交戦を開始しているのだろう。

そしてその反応に気を取られていたら私は、ハイパーセンサーが掻き鳴らすアラートに気がつかず。

「マズー」

私の眼前に迫る荷電粒子砲に視界が覆われるのに、そう時間はかからなかったのだ。



「外、すごい音だな」

「そうね……」

あれから五分あまりの時間が経った。

外から響いてくる爆発音や衝撃は依然止まらず、激しさを増しているように感じる。

「アレ、何とかならないかしら」

「なにが起こるか分からないからやめろって千冬姉にこっ酷く叱られたばっかだろ」

「でも待つだけって、性に合わないのよね」

「だろうな」

そう言いつつも鈴は動かない。

凰鈴音は冷静でさえあれば何が起きているのか、何が起こるのかも分からない状況で無謀な行動をする程、思慮の浅い少女ではないのである。

「あのさ、鈴ーうおア!？」

「な、なに!？」

ズンツ、とアリーナが揺れる。

思わず上を見上げたのは、震源が上だったからだ。

「んなっ」

「アレってー」

アリーナの天井には大穴が空き、青空が覗いている。

可動式のドームは溶断されたかのように赤熱し、その表面を輝かせていた。

その先、奴はいた。

《接近警報、接近警報、接近警報》

黒光りするメインフレームと同様、パイロットも黒いスーツに身を包んだISは今時珍しいものの、棗の「ヴァイパー」で見慣れてきた全身装甲型だ。

それは高電圧のバリアーをいとも簡単にすり抜けると、二人の前に降り立つ。

《コアナンバー、コア波形、照合失敗、未確認コア》

「なんだって!？」

「……冗談でしょ?」

一夏と鈴は驚愕した。

なんらかの妨害で相手がどこに属するものか、或いは正体が掴めない事はあるが、ハイパーセンサーがこの距離で敵を誤認する事はありえない。

外見ならばいくらでも誤魔化しようはある、事実として鈴は祖国が隠密活動用パッケージを開発してある程度までは実戦運用に耐える状態まで持ち込んでいるのを知っているからだ。

コア波形やナンバーも専用の妨害装置さえ使えば問題はない。

だがそういった類の妨害は無く、更に世界に存在するコアの数は498個で、開発者である篠ノ之博士が増産しない限り増える事はない。

これが意味する所は二つ、篠ノ之博士が新規のコアを製作したか、何者かがコアのブラックボックスを解析してコピー品を作り出したかだ。

「(しかも奴はあのバリアーをすり抜けてきた……って事はアレが今現在の状況を作り出した元凶……或いはその仲間って事か?でも、それは――)」

「ホラ、ボサツとしないの!来るわよ!」

「ッ!」

そうこうしているうちに眼前の黒いISはその大きな腕を構え、此方へ突進して来る。

胸の前でクロスした腕の先からはバチバチと紫電を纏うレーザーブレードと思わしき物が展開されていた。

「ぬおおお!？」

両腕のレーザーブレードによる猛攻を雪片で受ける。

その一撃は重く、速い。

「だけど、鈴よりは軽い!」

「太ってなんかないわよ!」

「そういう意味じゃねえよ!」

「フン！まあいいわ、それよりあの黒いのをさっさとやっつけるわよ！なによ、凶体と武器ばかり大きくて弱っちー」

その刹那、瞬時加速で移動した鈴の右後方、つまり先程までいた場所に黒いISのレーザーが着弾した。

「ーそう、な……」

ドンツという大きな音と共にアリーナの壁へ着弾した極太レーザーは壁を焼くのみに留まらず、ISの攻撃に耐える設計である筈の装甲板をドロドロに溶解させている。

「(アレは当たったら、死ぬ)」

サアツと血の気が引き、お互いに半ば確信に近い予想を胸に抱く。

「どうすんだよ！あいつ怒ったぞー！」

「知らないわよー！」

怒ったかどうかは兎も角として、奴の攻撃が厄介なことには変わりはない。

レーザーブレードとレーザー砲、スタンダードではあるが一撃の火力が尋常ではないからして当たればそこでお終いだ。

鈴も応戦しているが、衝撃砲による牽制も相手が鈴の照準よりも早く動いている以上は意味をなしているとは言い難い状況だ。

あいつムカつく
「你很？人！」

「落ちて着け鈴！あいつの思うツボだ！」

一夏は思わず母国語が飛び出す程度にイラついているらしい鈴を宥めつつ、戦略を練る。

千冬姉や棗も言っていた、〃状況は目で見るのみでなく、心で視るのだ〃と。

「(奴の挙動、予備動作、攻撃、なにかヒントがある筈だ)」

目で見て捉え、心で視て判断する。

悪戯に物事を見て判断するのではなく、良く観察して掌握すれば自ずと最適解は見えてくる。

「ー、……鈴ー！」

「なによー！」

「あいつ、どう思っつ？」

「どう思うって……どうもこうもないわよ！イキナリ現れて攻撃してきた失礼な奴で、私達の敵！」

それ以上になにか必要だったの!？」

「違う！感情じゃなくて理屈でどう思うかって言ってるんだ！」

「ハア!？」

「あくまでも仮説だがなー」

一夏は稚拙ながらも鍛えてきた観察眼と知識……千冬姉、箒、セシリア、棗、鈴から教わった全てを総動員して俺は、奴は無人機である” という仮説を立てた。

「なに言ってるの!?!荒唐無稽にも程があるわよ!?!」

「でもそれ以外に考えられるか!?!ここはIS学園で、俺は世界唯一の男性操縦者、お前は中国の国家代表候補生だぞ！日本と中国どころか世界までも敵に回すのに有人機なんか使ってられるか!?!ここには千冬姉だっているんだぞ！」

「でも、ISのコアは人間にしか反応しない筈じゃ!?!ありえないわよ!！」

「無人機も研究されてるってなんかのニュースで見たぞ！可能性はゼロじゃない、ありえないなんて事ありえねえんだよ！」

「ーッ（たしかに、無人機は祖国でも研究されている技術、それに奴の挙動……あまりにも正確すぎるしワンパターンすぎる）」

鈴の導き出した答えは結論は同じでも一夏とは違っていた。

たった一年で中国国家代表候補生まで上り詰めた天才である彼女は相手の一挙一動を見逃さない。

ハイパーセンサーの補助あつてこそそのものだが、相手の癖を見極めるべく観察を怠った事はない。

故に、あの黒いISの挙動がたった1mmのズレも生じさせない程、機械的すぎる正確性を有していることも把握していた。

どんなに鍛えた人間でも連続して動き続ければ筋肉に乳酸が溜まるし、動悸が早まって呼吸は乱れやすくなる。

そういったバイタルパターンは時が立つにつれて変化するものであり、既に五分以上経過したこの状況でそれはあり得ない事だー相

手が生きた人間ではなく、ロボットであれば話は別であるが。

「(こんなに激しい戦闘をしておいて少しもブレない照準、同じ軌道の斬撃……確かに、無人機と言われれば納得がいく)」

鈴は後にこのISを「AI制御された自動車工場でも見ている気分だった」と語る。

「……それなら、容赦は要らないわね」

「そういうこった！キメるぞ！」

「私が龍咆で牽制するから思いっきりぶった切ってやりなさい！」

「合点だ！」

エネルギー残量を確認しながら瞬時加速で加速と減速、三次元躍動旋回を繰り返して相手を攪乱しつつ急接近するが相手のAIも馬鹿ではなく、その都度機械的な回避をしようとするが――

「ダブルだもってけエー!!」

しかし、それは「甲龍」の衝撃砲が許さない。

出力と射程が抑えられた代わりに連射が可能となった龍咆が無人機を襲う。

「ママが見ても分からないくらいポッコボコにしてやるんだから!!」

物騒な台詞と共に発射される衝撃砲、通常出力であればどの衝撃を与える龍咆が出力が抑え気味であるとも言えども連打される状況など考えたくもないが、それが味方となっているこの状況ほど頼もしいものはないと一夏は感じる。

「オラオラオラオラオラオラオラアーーーーー!!!」

重機関銃の連射の様な轟音と共に龍咆の連打を繰り返す鈴の覇気は凄まじいものであるが、それが一夏へ1発キメる事が出来なかった、その原因を作ったお邪魔虫への八つ当たりである事を一夏は知らない。

しかし――

「クツ……見た目に似合わず！」

「速い……！」

だが、最高のコンビネーションを発揮しつつある二人を以ってしても黒い無人機を御しきる事は叶わなかった。

ずんぐりとしたがいけない機敏さ、そしてなにより繰り出す攻撃一つ一つが全て致死のものである事、それが勝敗を決することを阻害しているのだ。

「速いしヤバいつてなると……」

一夏の脳裏に浮かんだのは棗とセシリアの戦い、その中盤だ。

ビットとスターライトの猛攻、それを棗が掻い潜ったあの時である。

「……鈴！死なない程度に強いの一発頼む！」

「!?……何するかは聞かないでおくわよ！」

その言葉の意味を瞬時に理解した鈴は、呆れ顔しつつも龍咆の砲身を形成し直し、チャージした。

一夏は鈴を信じ、レーザーの雨を回避しながら黒いISへ突貫する。

「今だア！鈴！」

「分かってるわよー！」

先ずは一発衝撃砲を発射、黒いISはそれを瞬時加速で回避するが、そこまでは織り込み済みだ。

今までの戦いでこいつが二段も連弾も使ってこないーいや、使えないことは分かっている。

故に、瞬時加速を使った後では致命的な隙が生じているのだ。

しかし、一夏と黒いISとの距離はまだ離れており、幾ら瞬時加速に一言あるい一夏と言えどもその距離を埋めることは不可能だったーそう、一人では。

「一夏アーーーーー!!!」

鈴が放ったもう一門の衝撃砲が放たれるが、それは黒いISには当たらない。

何故ならその射線上には一夏がいるからだ。

「ぐッー!?!」

背後からの衝撃は凄まじいもので、メキメキと骨が軋む音がする。

だが、一夏は衝撃砲によって生じた慣性と己の瞬時加速を合わせ、音を超え、零落白夜を起動した雪片で黒いISを真っ二つに切り裂い

た。

「……!? ……」

「肉を切らせて骨を断つ……ってな、学ばせてもらったぜ、棗」
胴を両断された黒いISは力無く地面へ落下し、沈黙した。

鈴と一夏は恐る恐る残骸へ近づいて双天牙月と雪片でチョンチョンと小突き、完全に死んだ……機能を停止した事を確信する。

「お、終わったな」

「そ、そうね……」

「ハア……」

この後、ショートした配線がバチンと火花を散らした事でヒイと小さく悲鳴を挙げた事を、一夏は見なかった事にしたのは余談である。